中津貝塚

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第18集

倉敷埋蔵文化財センター

2021.3

序

倉敷市玉島黒崎に所在する中津貝塚は、縄文時代後期初頭の中津式土器の標準遺跡として知られています。現在は、瀬戸内海の沿岸から２㎞ほど内陸に入ったところに位置していますが、かつては海が湾入していた入江に面する段丘でした。

貝塚の存在は大正年間から知られていましたが、昭和初期に主に地元の郷土史家を中心に発掘調査が行われました。この調査で出土した土器が学界で紹介され、縄文時代後期の基準土器として中津式土器と呼ばれるようになりました。また、屈葬人骨もしばしば発見され、当時の埋葬方法や人類学的形質を知る重要な資料とされてきました。

今回の調査の契機となった岡山県道水島港唐船線の延長計画に伴い、平成28年・29年には岡山県教育委員会によって確認調査が実施されました。本市ではこの調査の成果を引き継ぎ、平成30年度から令和２年度の３年間にわたり、確認調査を行いました。

調査内容については、本書で詳しく解説しますが、調査の成果を速やかに公開するために令和２年１月18日に現地において説明会を開催しました。十分な広報ができなかったにも関わらず、当日は150人以上の参加があり、郷土の遺跡への高い関心がうかがい知れました。遺跡の詳細を明らかにするだけでなく、郷土に対する愛情を醸成するという観点からも所期の目的を達成できたと思います。

中津貝塚周辺には、西元浜貝塚や阿原貝塚、島地貝塚などの縄文時代の貴重な貝塚が点在しており、条件が整えば、引き続き同様の調査を実施する予定です。これらの調査を積み重ねることにより、瀬戸内における古代史研究のさらなる発展に寄与できるものと考えています。

末筆ながら、試掘の快諾をいただいた地権者をはじめとする地元の皆様に感謝を申し上げるとともに、調査及び報告書の作成にあたり御指導と御鞭撻を賜りました関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

令和３年３月31日

倉敷市教育委員会
教育長　井上正義

例　言

1　本書は、倉敷市教育委員会が国庫補助を受けて平成30年度から令和2年度にかけて実施した中津貝塚の範囲確認調査の報告書である。

2　中津貝塚は倉敷市玉島黒崎に所在する。

3　発掘調査は、倉敷埋蔵文化財センター主幹 小野雅明・同主任 藤原好二が担当し、平成30年度から令和2年度にかけて3次にわたって実施した。

4　発掘調査における遺構の写真撮影は小野・藤原が行い、遺物の写真撮影は藤原が行った。

5　出土遺物の整理及び報告書の作成は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理に当たっては倉敷埋蔵文化財センター嘱託職員（令和元年度より会計年度任用職員）内田智美・那須玲子・日下美樹の協力を得た。

6　石器石材の同定（肉眼観察）に関しては、倉敷市立自然史博物館主任 武智泰史氏に依頼した。また、新潟大学医学部に保管されている中津貝塚出土人骨の情報収集に関して、新潟大学旭町学術資料展示館学芸員 清水美和氏のお手を煩わせた。

7　本書の執筆は、第2章第2･3節、第3章第1･2節･第3節1、第4章1を小野、第1章、第2章第1節、第3章第3節2、第4章2を藤原が担当し、全体の編集は藤原が行った。

8　土壌サンプルの自然化学分析については、（株）パレオ・ラボに依頼して実施し、付論として掲載した。

9　本書で使用した高度値は海抜高であり、方位は特に示さない限り磁北である。

10　本書第2図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図を複製、加筆したものである。

11　発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センター（倉敷市福田町古新田940番地）で保管している。

目　次

序

第１章 遺跡の位置と環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 1

第２章 調査に至る経緯と経過 …… 6

第１節　過去の調査 …… 6

第２節　調査に至る経緯と経過 …… 7

第３節　調査の組織 …… 9

第３章 調査の概要 …… 11

第１節　調査区の概要 …… 11

第２節　各トレンチの概要 …… 12

第３節　出土遺物 …… 26

１　土　器 …… 26

２　石　器 …… 36

第４章 調査の成果 …… 45

付論　中津貝塚土壌サンプルの自然化学分析 …… 48

出土遺物観察表 …… 51

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺の遺跡 …… 2
第３図　トレンチ位置図 …… 11
第４図　トレンチ１東壁断面図・平面図 … 12
第５図　土壙墓１断面図・平面図 …… 13
第６図　土壙墓２平面図 …… 14
第７図　土壙墓２横断面図 …… 14
第８図　トレンチ21東壁断面図・平面図… 15
第９図　トレンチ21遺構断面図…… 15
第10図　トレンチ２東壁断面図 …… 16
第11図　トレンチ３東壁断面図 …… 16
第12図　トレンチ４東壁断面図 …… 17
第13図　トレンチ５東壁断面図 …… 17
第14図　トレンチ６東壁断面図・平面図 … 18
第15図　トレンチ７～11断面図…… 19
第16図　トレンチ12西壁・
南壁断面図・平面図…… 20
第17図　トレンチ12遺構断面図…… 21
第18図　トレンチ13・14断面図…… 21
第19図　トレンチ15～18断面図 …… 22
第20図　トレンチ19～23断面図 …… 23
第21図　トレンチ24～27断面図 …… 24
第22図　トレンチ１出土の土器 …… 26
第23図　トレンチ21出土の土器…… 27
第24図　トレンチ６出土の土器１ …… 28
第25図　トレンチ６出土の土器２ …… 29
第26図　トレンチ６出土の土器３ …… 30
第27図　トレンチ６出土の土器４ …… 31
第28図　トレンチ６出土の土器５ …… 32
第29図　トレンチ６出土の土器６ …… 33
第30図　トレンチ６出土の土器７ …… 34
第31図　トレンチ３・５・12出土の土器… 35
第32図　土壙墓１・２出土の石鏃 …… 36
第33図　土壙墓２出土の接合資料 …… 37
第34図　土壙墓２出土の石核・剥片 …… 38
第35図　トレンチ１包含層ほか出土の石器１
…… 39
第36図　トレンチ１包含層ほか出土の石器２
…… 40
第37図　トレンチ４出土の石鏃 …… 41
第38図　トレンチ６出土の石器 …… 42
第39図　トレンチ12～14出土の石鏃 …… 43
第40図　トレンチ15出土の石器…… 43
第41図　トレンチ21出土の石器…… 43
第42図　表面採集ほかの石器 …… 44
第43図　中津貝塚の貝層と土壙墓群の範囲
…… 45

図版目次

図版１　トレンチ１ 2018年度（１）
- １　土壙墓1・2人骨検出状況（南東から）
- ２　土壙墓1半裁状況（南から）
- ３　土壙墓1人骨検出状況（北から）

図版２　トレンチ１ 2018年度（２）
- １　土壙墓1人骨取上状況（上から）
- ２　土壙墓2検出状況（東から）
- ３　完掘状況（南から）

図版３　トレンチ１ 2019年度（１）
- １　土壙墓2 1層遺物出土状況（東から）
- ２　土壙墓2 3層遺物出土状況（南から）
- ３　土壙墓2人骨検出状況（西から）

図版４　トレンチ１ 2019年度（２）
- １　土壙墓2人骨上半身検出状況（西から）
- ２　土壙墓2人骨取上状況（南から）
- ３　完掘状況（南西から）

図版５　トレンチ２・３
- １　トレンチ2全景（南西から）
- ２　トレンチ3全景（北西から）
- ３　トレンチ3東壁深掘断面

図版６　トレンチ６
- １　東壁北半部
- ２　東壁南半部
- ３　貝層上面（東から）

図版７　トレンチ６・７・９
- １　トレンチ6全景（南西から）
- ２　トレンチ7全景（南西から）
- ３　トレンチ9全景（南西から）

図版８　トレンチ12・16・18
- １　トレンチ12全景（南東から）
- ２　トレンチ16全景（南東から）
- ３　トレンチ18全景（南東から）

図版９　トレンチ20・21
- １　トレンチ20全景（北東から）
- ２　トレンチ21土壙墓3検出状況（東から）
- ３　トレンチ21土壙墓4検出状況（南から）

図版10　トレンチ21・24・27
- １　トレンチ21完掘状況（北から）
- ２　トレンチ24全景（南東から）
- ３　トレンチ27南壁

図版11　出土土器（１）

図版12　出土土器（２）

図版13　出土土器（３）

図版14　出土土器（４）

図版15　出土土器（５）

図版16　出土土器（６）

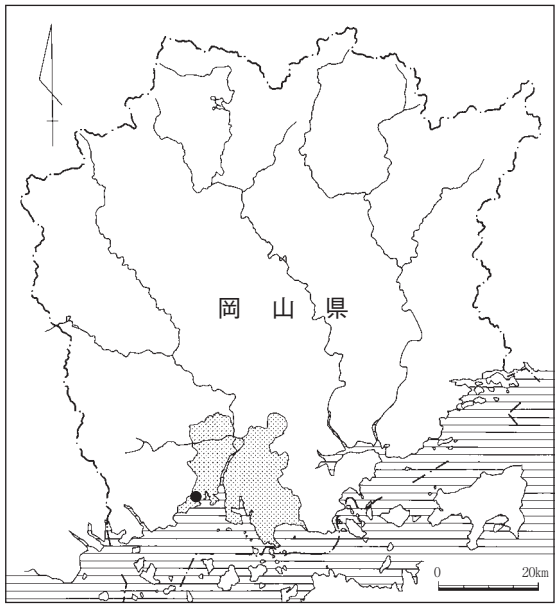
図版17　出土石器（１）

図版18　出土石器（２）

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中津貝塚の所在する玉島黒崎地区は、浅口市と隣接する倉敷市南西部の瀬戸内海に面した地区である。夏は海水浴場として賑わう沙美海岸や樹齢200年と言われる雨笠の松（市指定天然記念物）のある本性院などがある。昭和26年（1951）の町制施行で浅口郡黒崎村から黒崎町になり、昭和28年（1953）には玉島市と合併、昭和42年（1967）の倉敷市・玉島市・児島市の旧三市の合併を経て、今日にいたっている[1]。



第１図　遺跡の位置

一説によると、現在の笠岡市西大島の御嶽山から浅口市鴨方町六条院西の竜王山、そして浅口市金光町佐方の竜王山に至る山塊（以下、竜王山塊と呼称）は「大島」と呼ばれる島であったと言われているが、これは実証されてはいない[2]。竜王山塊の東側には、柏島、乙島、狐島と近世までは島であった低い丘陵が続き、狐島の東側は岡山三大河川の一つである高梁川河口域である。竜王山塊と柏島の間は、現在水田や宅地となっているが、江戸時代の正保3年（1646）から寛文6年（1666）までに新田開発が行われて陸地化したもので、それまでは海が入り込んで狭い水道の様相を呈していた[3]。この水道の両岸にあたるところには、「中津」を始め、「元浜」・「西浦」・「唐船」と海にちなむ地名が認められる。さらに北に入り込んだ浅口市金光町大谷には「津」の地名も残っており、深く海が入り込んでいたことがわかる。水道の両岸は海岸段丘を形成しているが、特に竜王山塊側で顕著に認められる。中津貝塚も竜王山塊から流れ出た屋守川が形成した扇状地形が海蝕によって削られたこの段丘上に立地しているが、現在は東側に大池が築かれており、古い地形をわかりにくくしている。

第２節　歴史的環境

瀬戸内海が形成される以前の旧石器時代における玉島地区では、柏島や乙島などが低丘陵として存在していたと考えられるが、これらの丘陵に当時の遺跡として明確なものは確認されていない。旧石器時代の遺跡は現在の浅口市金光町八重の丘陵上や竜王山塊の南、現在の海側に突出する低い尾根上等に認められる。金光町八重の丘陵上からは小型のナイフ形石器等が採集されている[4]。また、竜王山塊の南では小原南遺跡・諏訪神社遺跡・山王遺跡などがある。これらの遺跡は本格的な調査が実施されたことはなく、実態に不明な点が多い。小原南遺跡では令和元年（2019）に寺院の庫裏客殿改築工事に伴って確認調査を実施したが、既に削平整地された場所であり、遺物や遺構などは認められな

1 中津貝塚　2 釜屋の上遺跡　3 新殿向遺跡　4 奥山南遺跡　5 おやまのひら古墳　6 ゼンビラ遺跡
7 諏訪神社遺跡・諏訪神社境内古墳　8 沙美東海岸遺跡　9 小原南遺跡　10 正保堤　11 畑山城跡
12 森本松山城跡　13 水島城跡　14 水泥古墳群　15 白銀山遺跡　16 亀崎城跡　17 東元浜貝塚
18 西元浜貝塚　19 夕崎古墳群　20 東郷遺跡　21 阿原貝塚　22 要害山城跡　23 島地貝塚
24 岸本貝塚　25 道口遺跡　26 唐津池北遺跡　27 ジョオゴナル遺跡　28 平松遺跡　29 上郷古墳
30 山の神西遺跡　31 天王山古墳　32 神前神社窯跡群　33 亀山遺跡・亀山窯跡群　34 谷塚古墳
35 一つ塚古墳　36 凉松貝塚　37 葛渕古墳　38 前田遺跡　39 里木貝塚　40 福島山遺跡
41 横内北窯跡群　42 黒土窯跡群　43 陶神社南窯跡群　44 寒田窯跡群　45 五郎兵衛谷古墳群

第２図　周辺の遺跡（Ｓ=1/５０,000）

かった。

竜王山塊周辺は、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての有茎尖頭器の採集が目立つ地域でもある。中津貝塚採取とされるものが2点[5]、中津貝塚北方の民家の庭から出土したとされるもの2点[6]、西元浜貝塚採集とされるもの1点[7]と計5点が中津貝塚とその周辺に認められる。さらに、視野を広げると浅口市鴨方町益坂の和田遺跡[8]から1点、浅口市鴨方町六条院西の和田谷遺跡から1点[9]と、さらに船穂町船穂の福島山遺跡[10]からは矢柄研磨器も採集されており、旧浅口郡域ではこの時期の遺物が比較的多く発見されている。

縄文海進によって瀬戸内海が誕生すると、柏島・乙島などが島として分離し、その間は浅い水道の様相を呈していた。ここに里見川や高梁川が運んでくる土砂が徐々に堆積し、浅海性の貝類が生育するようになり、周辺の海岸に貝塚が形成されるようになったと考えられる。高梁川西岸域には、北から里木貝塚・凉松貝塚・岸本貝塚・島地貝塚・阿原貝塚・西元浜貝塚・中津貝塚などが知られている。

里木貝塚は標高3.5m程の砂洲上に形成された縄文前期から中期を主体とする貝塚で、里木Ⅰ式・里木Ⅱ式土器の名祖遺跡である。戦前には清野謙次、戦後では倉敷考古館によって調査が行われている[11]。凉松貝塚は縄文時代中期から後期を主体とする貝塚で、高梁川西岸域では唯一市の史跡に指定されている。やはり倉敷考古館等による調査が行われており、炉跡らしき遺構や多数の人骨が出土していることが知られている[12]。島地貝塚は山陽新幹線や国道バイパスの建設に伴って発掘調査が行われ、縄文時代前期～晩期の土器が出土している。縄文期の貝層はマガキを主体としたものが検出されているが、二次堆積の可能性が指摘されている[13]。

中津貝塚の北約1㎞には西元浜貝塚が存在している。縄文時代中・後期を中心とした貝塚で、中津貝塚より規模が小さいと推定されている。1990年に住宅団地造成に伴い、貝塚本体の南西方向にあたる部分で発掘調査が行われたが、既に果樹園の開墾などによって削平されており、少量の土器片や石器が出土したのみであった。その他にも阿原貝塚、岸本貝塚などが所在するが、発掘調査が行われたものはなく、実態はよくわかっていない[14]。

このほかにも低い尾根や山腹に立地し、貝塚を形成しない縄文時代の遺跡が存在する。ゼンビラ遺跡、釜屋の上遺跡、山の神西遺跡などがそれである。貝塚遺跡との性格の違いが想定されるが、調査によって詳細が把握されたものはない。

倉敷市玉島地区は弥生時代においても海が広がっており、大規模な集落跡は確認できないが、北西の遙照山塊から派生する尾根筋に点々と集落が営まれていたようである。玉島富の平松遺跡では弥生中期の土器とともに銅鏃が採集されている[15]。山陽自動車道建設に伴って発掘調査された唐津池北遺跡では弥生時代中期の竪穴式住居等が検出されている[16]。弥生時代後期の遺跡としては、浅口市金光町との境界にあたる標高240m程の尾根筋に立地するジョオゴナル遺跡が高地性の集落として注目される[17]。また、中津貝塚の近辺でも、新池から南西の谷筋を入った屋守地区の奥に、奥山南遺跡や新殿向遺跡など弥生時代の土器や石器が採集される遺跡がある。

古墳時代前期においては、玉島八島の天王山古墳が海上交通との関連で注目される。天王山古墳は昭和9年（1934）の道路建設によって前方部が削平されているが、墳長45m程と推定されている。明治12年（1879）頃に墳頂の天王神社社殿を改築した際に石室が壊され、鏡・直刀・玉類・土器が出

土したと伝えられる[18]。天王山古墳以外の前期古墳としては、玉島道口の上郷古墳や玉島黒崎の諏訪神社境内古墳等の箱式石棺が知られている。

古墳時代後期には海を望む緩斜面に横穴式石室墳が点々と築かれる。玉島黒崎の沙美海岸にはおやまのひら古墳が残り、他にも数基の横穴式石室墳が存在していたらしい。東へ目を向けると、玉島乙島の水泥古墳群、玉島八島の谷塚古墳・一つ塚古墳、船穂町の葛渕古墳等が挙げられる。これらの古墳を築いた人々の生業としては魚介類の採取や製塩が考えられるが、船穂町の前田遺跡では道路改築工事に伴って該期の製塩遺跡が調査されている[19]。また、山陽自動車道建設に伴って発掘調査が行われた道口遺跡では後期の竪穴式住居も確認されている[20]。

古代の様子はよくわかっていないが、平城京から出土した木簡に、浅口郡船穂郷や大島郷から税として塩が納められていたことが記載されていることから、古墳時代に続いて製塩が盛んであったことがうかがえる[21]。また、北部の陶地区では、古墳時代後期に須恵器の生産が始まり、奈良・平安時代まで続いている。その中の陶神社南窯跡群等で採取されたとされる軒丸瓦は、市内浅原の朝原寺跡で同笵のものが出土している[22]。陶地区から南に山を越えた玉島八島地区は平安時代に「甕の泊」と和歌に詠まれている[21]。甕などの焼き物を搬出する湊があったことに由来するとされ、陶地区の瓦なども船積みされていたのであろう[23]。平安末には八島地区の神前神社周辺で亀山焼の生産が始まり、室町時代まで続いていく[24]。陶の窯跡群と異なり、亀山焼は窯跡が狭い範囲に集中していることから、そこに何らかの政治的意図を読み取る考えもある。

治承･寿永の乱においては、玉島の乙島と柏島の間の水道が戦いの舞台となったと伝えられている。寿永2年（1183）、水島の合戦の際に乙島の水島城跡が木曽義仲の陣、柏島の森本松山城跡が平家方の陣であったと伝えられる[25]。しかし、これらの城跡に現在残る遺構は、当時のものではなくその後の戦国時代を中心としたものと考えられている。ほかにも亀崎城跡・畑山城跡などの小規模な城館があるが、発掘調査が行われたものはなく実態は不明である。玉島道口の要害山城跡は、鴨山城の細川氏が出城として築いたとされ、比較的大きな城館であったと推定されるが、宅地造成工事によって大部分が破壊されてしまった[26]。

江戸時代には岡山県南部の干潟が干拓されて、急速に水田に変わっていった。中津貝塚前面の水道も同様で、備中松山藩によって正保3年（1646）に勇崎元浜新田が開発され、今日のような景観ができあがったのである[3]。

註

（１）倉敷市歴史年表編集委員会『倉敷市歴史年表』倉敷市文化連盟 1978
（２）渡邊義明『玉島むかし昔物語』1991
（３）倉敷市史研究会『新修倉敷史市 第3巻 近世（上）』倉敷市 2000
（４）金光町史編纂委員会『金光町史 本編』金光町 2003
（５）藤原好二「倉敷市内の有茎尖頭器」『倉敷埋蔵文化財センター年報3』倉敷埋蔵文化財センター 1996
（６）原田虎平編『浅口郡史蹟名勝天然記念物』1931
掲載されているのは写真1点である。所有者への聞き取り調査により2点あるとのことであるが、実見はできていない。
（７）福本 明「中山頼夫氏寄贈の考古資料」『倉敷埋蔵文化財センター年報４』倉敷埋蔵文化財センター 1997
未実測資料。茎部の断片と推定される。

（８）伊藤 晃・浅倉秀昭・江見正己『山陽自動車道建設に伴う発掘調査２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42 岡山県文化財保護協会 1981
（９）氏平昭則「（6）一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告48』岡山県教育委員会 2018
（10）間壁葭子「岡山県浅口郡船穂町福島採集の矢柄研磨器」『倉敷考古館研究集報 第9号』（財）倉敷考古館 1974
（11）間壁忠彦・間壁葭子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報 第7号』（財）倉敷考古館 1971
（12）鎌木義昌「29 凉松貝塚」『岡山県史 第18巻 考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
間壁忠彦「涼松貝塚」『倉敷考古館研究集報 第21号』（財）倉敷考古館 2012
（13）下沢公明ほか「第Ⅵ部 島地貝塚の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ（岡山以西）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集　岡山県教育委員会 1974
浅倉秀昭『一般国道玉島バイパス建設に伴う発掘調査 島地貝塚』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 41 岡山県教育委員会 1981
（14）藤田憲司・中山頼夫「倉敷市玉島地区とその周辺の新発見縄文時代資料」『倉敷考古館研究集報 第18号』（財）倉敷考古館 1984
（15）藤田憲司「倉敷市玉島富平松発見の銅鏃」『倉敷考古館研究集報 第9号』（財）倉敷考古館 1974
（16）正岡睦夫ほか「唐津池北遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 69 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
（17）福本 明「倉敷市富ジョオゴナル遺跡出土の土器」『倉敷埋蔵文化財センター年報3』倉敷埋蔵文化財センター 1996
（18）福本 明「玉島天王山古墳出土の埴輪について」『倉敷の歴史 - 倉敷市史紀要 - 第4号』倉敷市 1994
（19）澤山孝之ほか『前田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 244 岡山県教育委員会 2018
（20）正岡睦夫ほか「道口遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 69 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
（21）倉敷市史研究会編『新修倉敷市史 第9巻 史料 古代・中世・近世（上）』倉敷市 1994
（22）間壁葭子「備中「スエ」と瓦」『倉敷の歴史 第2号』倉敷市史紀要 倉敷市 1992
（23）倉敷市史研究会編『新修倉敷市史 第1巻 考古』倉敷市 1996
（24）岡田 博ほか「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 69 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
（25）倉敷市史研究会編『新修倉敷市史 第2巻 古代・中世』倉敷市 1999
（26）宗澤節雄『郷土風土記』1981

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　過去の調査

明治30年（1897）発行の『浅口郡誌』には、柏崎村の塩田（現在の玉島勇崎）を掘削中に、地下の貝層から土器が出土したことが記載されている[1]。この貝層の正確な位置は記録されていないが、貝塚であったとすれば、この附近の縄文遺跡を取り上げた最初の記事となる。大正14年（1925）発行の『浅口郡誌』によると中津貝塚の発見は大正12年（1923）と記載されている[2]。同誌には中津貝塚所在地の風景写真が掲載されるとともに、「中津の畑二反許の地に地中に埋れて貝殻層あり」と紹介されている。同じ郡内であった笠岡市津雲貝塚における人骨の出土状況写真と併せて掲載されており、当時の関心の高さをうかがうことができる。

この『浅口郡誌』の記事に触発されて、中津貝塚における最初の発掘調査を行ったのが、地元で考古学を志していた宗澤節雄である。宗澤は貝塚周辺の畑地で石鏃をはじめとする多数の遺物を採集し、昭和7年（1932）12月には小規模な試掘調査を実施し、その翌年9月から12月にさらなる発掘調査を実施している[3]。宗澤の調査地は本報告のトレンチ3とその南にある家屋の間付近と推定される。このときに出土した資料は、昭和10年（1935）に吉備考古会の水原岩太郎によって公表され[4]、三森定男による中津式土器設定へとつながる[5]。

昭和30年（1955）には、当時倉敷考古館に勤めていた鎌木義昌が土壙墓1基の調査を行っている[6]。これは地元の考古学愛好家であった西岡憲一郎からの連絡を受けてのものであった。調査地は本報告のトレンチ12～14の周辺であるが、トレンチ内ではその痕跡を確認できなかった[7]。出土した人骨は貝輪や鹿角製耳飾りを伴い、楕円形の土壙内に四肢を折り曲げた屈葬の状態で埋められていた。縄文時代の埋葬において墓壙が初めて検出された事例として重要である。

鎌木による調査の後も西岡憲一郎による人骨の発掘が続き、掘り出された計6体が現在新潟大学医学部に保管されている[8]。個々の人骨の発掘状況は不明であるが、鎌木の調査地より北の畑地から掘り出した人骨を大原美術館[9]へ持って行ったとの伝聞もあり、西岡憲一郎の所有地や隣接する土地からの発掘と推定される。

その後は、昭和55年（1980）に遺跡範囲内で行われた個人住宅建築工事中に発見された押型文土器を、採集者である草原孝典が紹介した[10]程度で長く調査が行われることはなかった。平成になってからは道路改良工事や新池の堤防改修などに伴って数件の立会調査が、倉敷市教育委員会によって実施されているが重要な遺物・遺構は確認されていない。

平成18年に新池の東方の勇崎交差点で止まっていた県道398号水島港唐船線を浅口市金光町大谷まで延伸する事業が着手されると、遺跡の範囲内が路線となるため岡山県による確認調査が実施された。平成28年には新池を横断する形の予定路線内において確認調査が実施され、この時には中世の包含層からわずかな縄文時代遺物が確認されただけで、貝層を含む遺構等は確認されなかった[11]。このため翌平成29年に貝塚の広がりを確認するための補足調査が行われた。調査は新池の西岸に面

する土地に集中して実施され、新池の南西隅に近い範囲で貝層を確認することができた[12]。

第２節　調査に至る経緯と経過

縄文時代後期初頭に位置づけられる中津式の標準遺跡として著名な中津貝塚は、倉敷市内に所在する磯の森貝塚、船元貝塚、里木貝塚、福田貝塚などとともに、日本の縄文社会を理解するうえで重要な遺跡である。第1節で述べたように、地元研究者等の調査や出土資料の公表によって、中津貝塚の部分的な情報はある程度蓄積されている。しかし、本格的な発掘調査は未だ行われておらず、遺跡保護の観点から中津貝塚全体の内容や範囲を把握することが長年の課題であった。そのような折、岡山県教育委員会により県道398号水島港唐船線改築に伴う確認調査が実施され、平成29年の調査で貝塚の分布範囲や保存状況を探る糸口をつかむことができた。倉敷市教育委員会は、この調査を引き継ぐかたちで、中津貝塚全体を対象とする範囲確認調査を計画した。実施期間は平成30年度から令和2年度の3年間とし、調査の方法は、遺跡地図に示される範囲にトレンチ（試掘坑）を設定して貝層や遺構の有無を調べ､図面や写真などに記録するものである。最終年度には調査成果を報告書にまとめ、中津貝塚に関する情報を共有し、遺跡の保存に役立てることを目標とした。

平成30年度の調査

初年度の調査は、平成30年11月20日から平成31年2月24日の期間にトレンチ1～11の11か所で実施した。

トレンチ1では比較的多くの縄文土器を含む遺物包含層が確認され、包含層を掘り込む土壙墓2基が確認された。このうち土壙墓1については完掘して調査を行い、トレンチの西壁際で検出された土壙墓2については遺構の確認にとどめ、次年度に本格的な調査を行うこととした。

トレンチ6では耕作土の直下から貝殻の出土が認められ、土層観察の結果、上層は古墳時代から中世の時代に攪乱されているものの、下層には保存状態の良好な縄文貝層が残存していることが確認された。

トレンチ3でも縄文時代、古墳時代、古代の遺物がわずかに含まれる遺物包含層が確認された。

トレンチ2では縄文時代、中世の遺物の細片が含まれる遺物包含層が確認されたが、後世の風倒木により地層の変形がみられた。

トレンチ4､5､7～11では開墾や宅地化により削平され、遺構、貝層、遺物包含層は確認されなかった。

一部のトレンチでは部分的に深掘りをして断面観察を行い、トレンチ1～5、7～9において黒褐色を呈する粘土層いわゆる泥炭層が確認された。

平成31年1月19日に地元住民を対象として現地説明会を実施し、トレンチ1の土壙墓1を公開。30名が参加した。

令和元年度の調査

2年目の調査は、令和元年11月12日から令和2年2月19日の期間に、トレンチ1（拡張区を含む）、トレンチ12～21の11か所で実施した。

トレンチ1の西壁で前年度検出された土壙墓2について、調査区を西側に拡張して全体を精査した。

土壙墓の中には仰臥屈葬の人骨１体がほぼ完全な状態で残っており、埋土には縄文時代晩期の土器や石器の石材として利用された流紋岩、鹿角などの遺物が含まれていた。

トレンチ1の南側に設定したトレンチ21で土壙墓2基を確認した。土壙墓3については、トレンチ西端において頭骸骨が検出され、その頭位から埋葬人骨を伴う土壙墓と判断された。また、土壙墓4については、土器の集中地点を調べるためにサブトレンチによる調査を行ったところ、ヒトの頭骸骨が発見されたため土壙墓と判断した。いずれも遺構の存在確認にとどめ、所属時期などの詳細は明らかにできなかった。

トレンチ12、13では、縄文時代包含層が確認され、トレンチ12では古代の柱穴、攪乱坑が確認された。柱穴の埋土にはハイガイを主とした貝殻が多く含まれ、この場所に貝層が分布していたことが知られた。また、攪乱坑からはヒトの側頭骨や歯が出土した。

トレンチ14では地山の層まで削平され、縄文時代の包含層が失われていると考えられた。トレンチ15、16、19、20では中世の遺物がわずかに含まれる層が確認されたものの、縄文時代包含層は認められなかった。トレンチ17、18では開墾によって地山の層まで削平を受けていることが判明した。

令和2年1月18日に現地説明会を実施し、トレンチ1の土壙墓2、トレンチ21の土壙墓3、4を公開。約150名が参加した。

令和２年度の調査

3年目の調査は、令和2年9月29日から令和2年10月20日の期間にトレンチ22～27の6か所で実施した。

トレンチ22､23では耕作土の直下が地山となっており､縄文時代の遺物包含層は確認されなかった。

トレンチ24～26の下層では谷に堆積した粘土層が確認されたが、縄文時代の遺物包含層は確認されなかった。トレンチ25では粘土層から中近世の遺物が少量出土した。

トレンチ27では中世の包含層が検出され、少量の縄文土器片が混入していた。この付近一帯の丘陵南斜面には住宅が立ち並んでいるが、縄文時代の遺跡が存在したことがうかがえた。

＜調査日誌抄＞

平成30年度（2018年11月20日～2019年2月24日）

2018年11月20日　重機によりT1～3の掘削開始。
11月21日　T1で包含層の調査。T4～6の掘削開始。
11月27日　T1～3で黒褐色粘土層（泥炭層）を確認。T6で縄文貝層を確認。
12月 1日　T6で包含層の調査。中世の攪乱層を確認。
12月 4日　T1で土壙墓1・2を確認。
12月 5日　文化庁文化財第二課森先一貴技官による現地視察および調査指導。
12月11日　中津貝塚確認調査指導委員会。澤田委員、富岡委員、松本委員による調査指導。
12月12日　T6でサブトレンチによる調査。貝層上面の検出作業。
12月19日　T1土壙墓1で人骨の検出作業開始。T6で貝層の平・断面の記録。
2019年 1月19日　現地説明会を開催。T1土壙墓1を公開。地元住民30名が参加。
1月22日～2月24日 T1土壙墓1で人骨の出土状況の図面・写真記録の後、取り上げ。

令和元年度（2019年11月12日～2020年2月19日）

2019年11月12日　前年度調査のT1を拡張。土壙墓2を再検出。
11月13日　T12～14の掘削開始。
11月19日　T1土壙墓2の検出面の精査、記録。
12月 5日　T1土壙墓2上部遺構の精査、記録。T12攪乱土坑で人骨出土。
T21の掘削開始。
12月 6日　中津貝塚確認調査指導委員会。澤田委員、松本委員による調査指導。
12月10日　中津貝塚確認調査指導委員会。富岡委員による調査指導。T21土壙墓3確認。
12月11日　T1土壙墓2の人骨検出作業。T21土壙墓4確認。
12月25日　T1土壙墓2の検出状況を記録。T21土壙墓4のサブトレンチ断面の記録。
2020年 1月18日　現地説明会を開催。T1土壙墓2とT21土壙墓3・4を公開。約150名が参加。
1月22日～2月19日　T1土壙墓2で人骨の出土状況の図面・写真記録の後、取り上げ。

令和2年（2020年9月29日～10月20日）

2020年 9月29日　T22、23、25、26を重機による掘削。
10月 1日　T24、27を人力による掘削。
10月 2日　T27で中世包含層確認。
10月 3日　T22～27で図面・写真の記録。
10月10日　T24、27を人力による埋め戻し。
10月20日　T22、23、25、26を重機による埋め戻し。調査終了。

第３節　調査の組織

中津貝塚確認調査の事務及び発掘調査、報告書作成については、倉敷埋蔵文化財センターが担当した。また、事業の推進にあたっては、中津貝塚確認調査指導委員会及び文化庁文化財第二課、岡山県教育庁文化財課の指導助言を得た。

［中津貝塚確認調査指導委員会］

委　員　澤田秀実　作陽短期大学音楽学科准教授
委　員　富岡直人　岡山理科大学生物地球学部教授
委　員　松本直子　岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

［指導・助言］

文化庁文化財第二課　文化財調査官　森先一貴
岡山県教育庁文化財課　参事　大橋雅也
埋蔵文化財班総括副参事　柴田英樹
埋蔵文化財班主幹　河合 忍
文化財保護班主幹　上栫 武

［調査体制］

教育長　井上正義
教育次長　川原伸次（平成30～令和元年度）
教育次長　黒瀬敏弘（令和2年度）
生涯学習部長　黒瀬敏弘（平成30年度）

生涯学習部長　　三宅健一郎（令和元～２年度）
文化財保護課長　鍵谷守秀
埋蔵文化財センター館長　中原誠二（平成30年度）
埋蔵文化財センター館長　浅野光正（令和元～２年度）
埋蔵文化財センター主幹　小野雅明
埋蔵文化財センター主任　藤原好二

調査にあたっては地権者をはじめとする地元の方々、土木委員の森本 毅氏、地区役員の西 博氏、仁科 幸氏にはたいへんお世話になった。また、次の方々にはたいへん有益なご教示を賜った。記して感謝申し上げます。清家 章、鈴木茂之、山本悦世、山口雄治、草原孝典、田嶋正憲（敬称略）

註

（１）中塚一郎『浅口郡誌』三宅書房・細謹舎 1897
（２）浅口郡役所『浅口郡誌』1925
（３）宗澤節雄による中津貝塚の調査に関する著述に下記の三文献があるが、それぞれに調査の契機や時期に矛盾がある。記憶を頼りに執筆したことによる矛盾と考えられるが、本文では調査時期からそれほど隔てないうちに記録された宗澤1935・1938の記述を採用した。なお、これによって宗澤による中津貝塚調査の功績が否定されるものではない。
宗澤節雄「中津貝塚實験記」『岡山縣浅口郡黒崎村中津貝塚發見 縄紋式土器模様』水原岩太郎 1935
宗澤甕亭「浅口郡附近の縄文式遺跡」『吉備考古』第36号 吉備考古會 1938
宗沢節雄「玉島黒崎 - 中津貝塚の思い出」『倉敷春秋』第2号 倉敷市文化連盟 1971
（４）水原岩太郎『岡山縣浅口郡黒崎村中津貝塚發見 縄紋式土器模様』1935
（５）三森定男「先史時代の西部日本」『人類学先史学講座』1・2　雄山閣 1935
（６）鎌木義昌「縄文遺跡における埋葬施設の一例」『石器時代』1　石器時代文化研究会 1955
（７）調査地をピンポイントで記したものは公表されていないが、倉敷市文化財保護審議会委員を長く務められた小野一臣氏による中津貝塚の遺蹟調査カード（1956年作成）には、「曲葬人骨」出土地点として大池の際に×印をつけた図が描かれている。遺蹟調査カードはコピーを倉敷埋蔵文化財センターが保管している。
（８）池田次郎「吉備地方海岸部の縄文時代人骨 - 時代差と地域性の成立 -」『鎌木義昌先生古希記念論集 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会 1988
（９）調査中に地元の方から聞き取った内容である。同じ美観地区にある倉敷考古館と混同されていると思われる。
（10）草原孝典「倉敷市玉島中津貝塚採集の押型文土器」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会 1987
（11）河合 忍「（6）県道水島唐船線改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告47』岡山県教育委員会 2017
（12）河合 忍「（1）県道水島唐船線改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告48』岡山県教育委員会 2018
河合 忍『県道水島港唐船線改築に伴う埋蔵文化財確認調査報告 中津貝塚』岡山県教育委員会 岡山県岡山県古代吉備文化財センター 2016・2017

第３章　調査の概要

第１節　調査区の概要

倉敷市教育委員会が1998年に刊行した倉敷市遺跡地図（玉島地区）では、中津貝塚の範囲として、新池の西に広がる扇状地から東側の堤防にかけての部分を記している。これは、1975年に刊行の倉敷市文化財分布図を踏襲したもので、中津貝塚における調査歴および地表観察に基づく推定域を示したものである。遺跡地と柏島の間にある平野は、近世に干拓が行われるまでは遠浅の入江であったと考えられることから、中津貝塚は、細長い水道を見下ろす高台に立地していたと想像される。この地区をより細かく見ると、遺跡の南端は河川によって浸食され、2m近くの段差がある。また、遺跡の南西端から北東方向にかけても谷が入ることが岡山県教育委員会の調査により明らかとなっている。

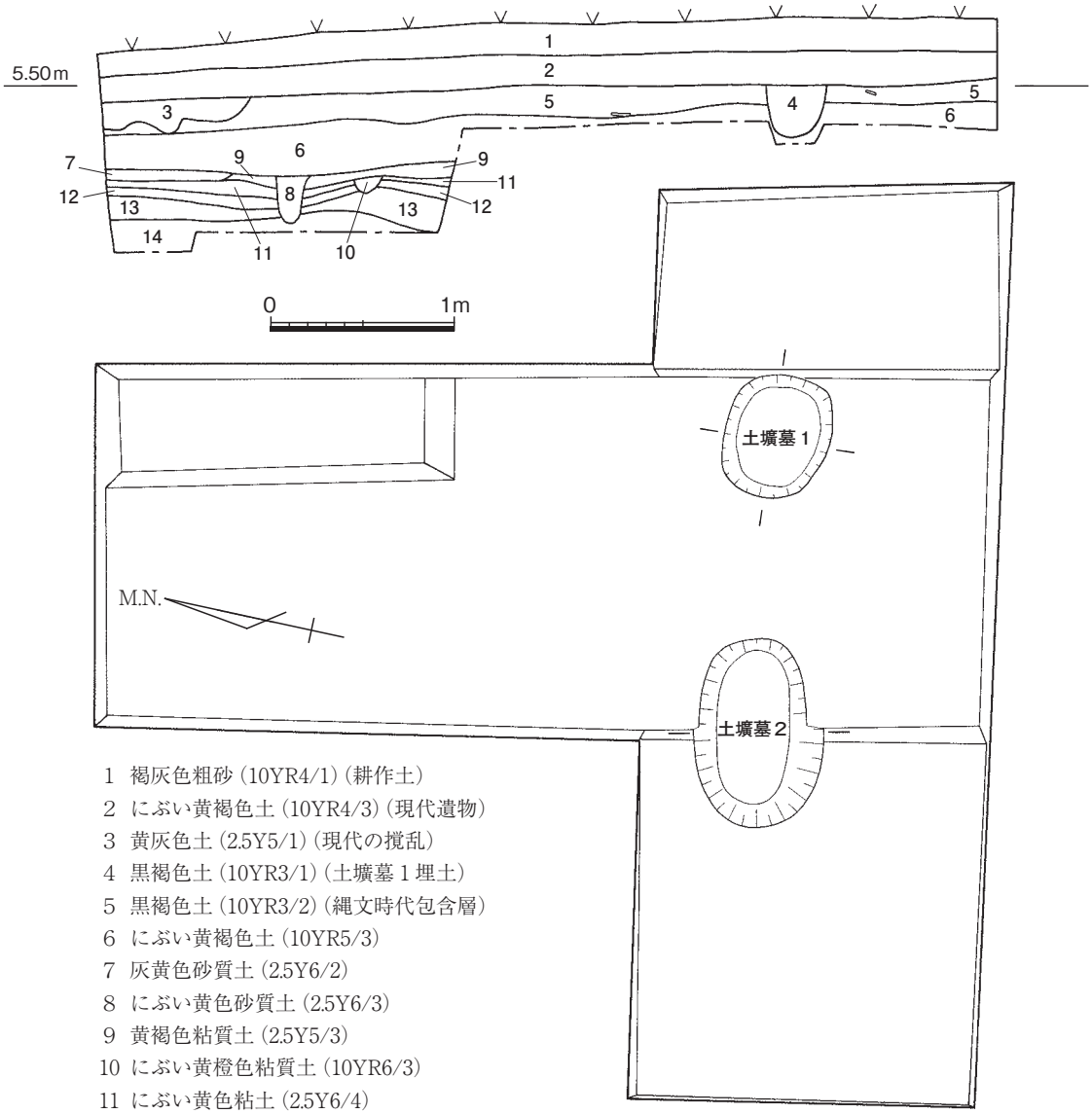
第３図　トレンチ位置図（S=1/3,000）

これらのことを踏まえて、今回の確認調査では、新池の西側で二つの谷で挟まれた低台地を調査対象として全部で27トレンチを設定した。トレンチの規模は基本的には5ｍ×2ｍとし、状況に応じて加減した。その位置を小字で3区分すると、中津地区（T1～T14、T21）、実盛（實盛）地区（T15～T20）、北迫・北迫前地区（T22～T27）となる。

第２節　各トレンチの概要

中津地区（T1～T14、T21）

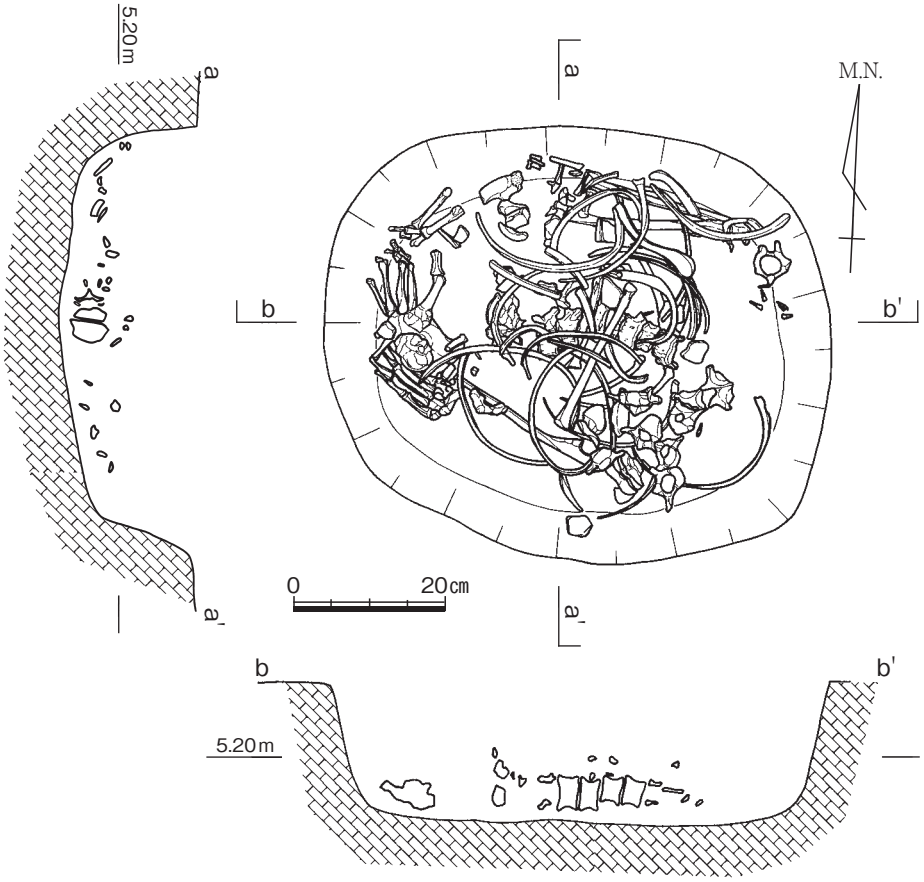
T1の基本層序は、耕作土（1層）、現代の攪乱層であるにぶい黄褐色土（2層）、縄文時代包含層である黒褐色土（5層）、遺物をわずかに含むにぶい黄褐色土（6層）となっており、これより下は遺物を含まない層が続く。標高約5.0ｍで厚さ6㎝程度の黒褐色粘土（12層）、いわゆる泥炭層が検出され



1 褐灰色粗砂（10YR4/1）（耕作土）
2 にぶい黄褐色土（10YR4/3）（現代遺物）
3 黄灰色土（2.5Y5/1）（現代の攪乱）
4 黒褐色土（10YR3/1）（土壙墓１埋土）
5 黒褐色土（10YR3/2）（縄文時代包含層）
6 にぶい黄褐色土（10YR5/3）
7 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
8 にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）
9 黄褐色粘質土（2.5Y5/3）
10 にぶい黄橙色粘質土（10YR6/3）
11 にぶい黄色粘土（2.5Y6/4）
12 黒褐色粘土（7.5Y3/1）
13 暗灰黄色粗砂（2.5Y5/2）
14 灰色粘土（10Y6/1）

第４図　トレンチ１東壁断面図・平面図（S=1/40）

た。縄文時代包含層には、細片が多いが比較的多くの遺物が含まれ、縄文時代中期、後期中葉、晩期の遺物が出土している。遺構については、平成30年度調査で土壙墓2基が確認された。土壙墓1は、遺構確認後に継続して調査を進め、土壙墓2は、存在を確認した後に埋め戻しを行い、翌年度にトレンチ範囲を拡張して調査を実施した。

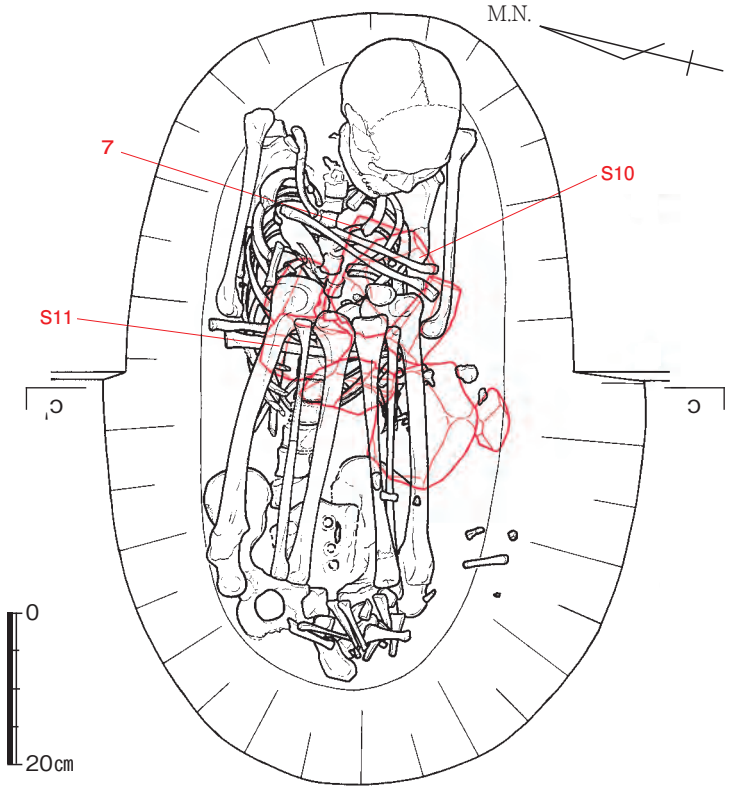


第５図　土壙墓１断面図・平面図（S=1/10）

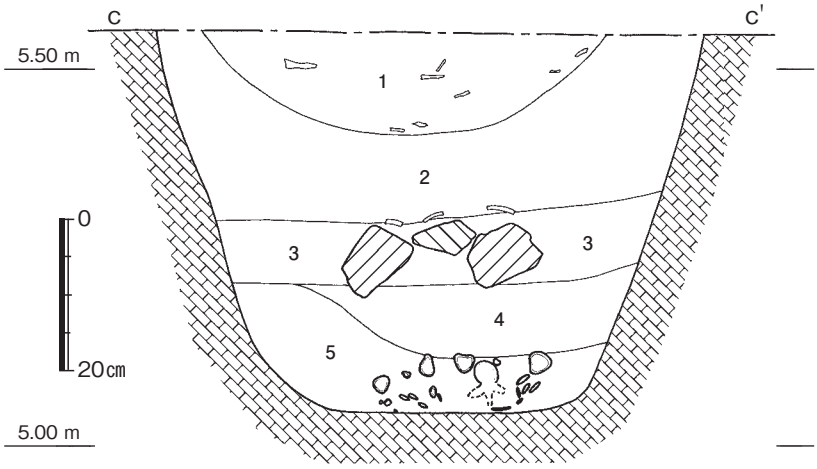
土壙墓1は、縄文時代の遺物包含層を掘り下げ、6層上面に達した段階で発見された。検出面では、東西70㎝、南北60㎝を測る不整円形である。縄文時代の包含層を切り込んでおり、包含層の上面から土壙墓底までの深さは約30㎝である。この土壙墓から埋葬人骨1体が検出され、1号人骨と呼称する。人骨は保存状態が良く、ある時期まで付近に貝層が残存していたことが想定される。埋葬状態については、体の上位を東側に置く傾向は認められるものの、全体的としては解剖学的位置を保っておらず、頭蓋骨、肩胛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、寛骨等を欠いている。土壙墓東端の底近くで、離脱した歯が8点散在していた。これらの出土状況を写真、図面で記録後、番号を付けて取り上げた。土壙墓の埋土は黒褐色土で、粒状の炭が混じる。出土遺物は深鉢、精製浅鉢の小片、サヌカイト片が少量である。

土壙墓2は平成30年度調査における包含層の掘削中に確認された。トレンチの西壁沿いで鹿角や獣骨、土器片の集中する範囲が認められたために精査したところ、包含層上面から掘り込まれた土壙を検出することができた。流紋岩の石核や鹿角等が目についたことから、当初は石器石材貯蔵用の穴かゴミ穴を想定して調査を進めていたが、平成30年度調査期間終了間際で人骨（頭部）が検出され、土壙墓と確認された。そのため、調査は令和元年度調査に持ち越されることとなった。

令和元年度調査ではトレンチを西側へ拡張して、土壙墓全体の調査を行った。検出面は標高5.55m、平面形は0.70×1.10m 程の楕円形で、残存する深さは約50㎝である。底面は標高5.05mに位置している。土壙墓内には埋葬人骨1体が残存しており、2号人骨と呼称する。頭位は東から10°ほど北に振っており、埋葬位は仰臥屈位である。顔面が胸の方を向くように頸を折り曲げている。数本の



第６図　土壙墓２平面図（S=1/10）



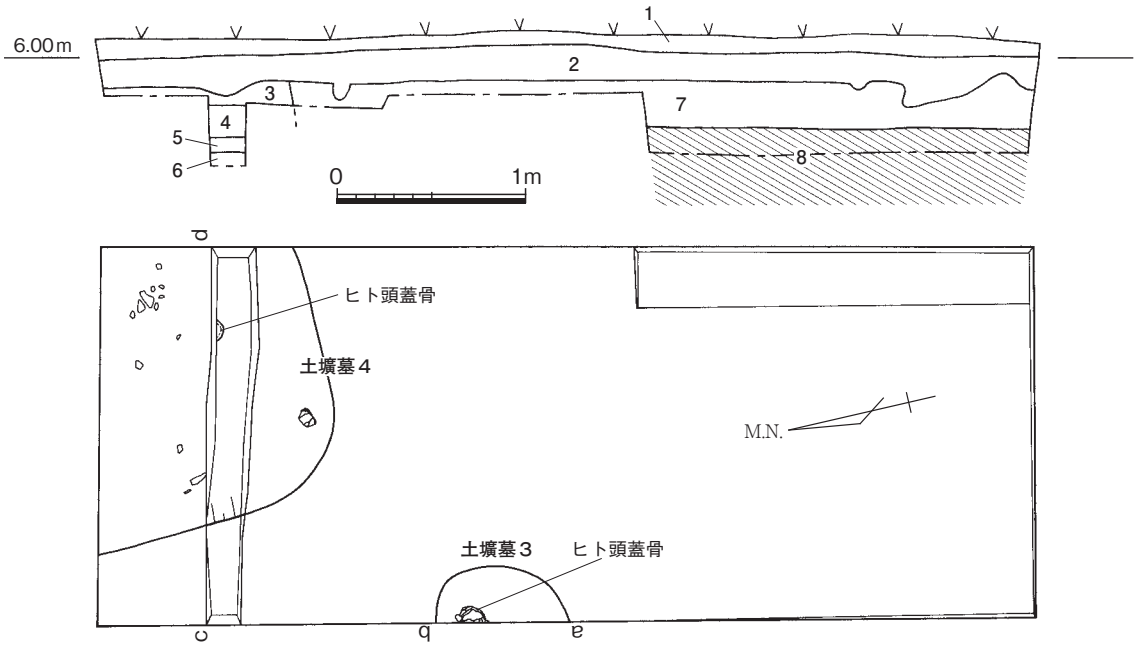
1　黒褐色粘質土　　4　にぶい黄色土
2　褐色粘質土　　5　灰褐色砂質土
3　褐灰色砂質土

第７図　土壙墓２横断面図（S=1/10）

歯が脱落して、一部は肩甲骨の下側に入り込んでいたものも認められた。右腕は腹部に置かれ、尺骨と橈骨が下の椎骨を押しつぶしてしまっている。左腕は胸部の上に置かれている。脚部は膝が胸部上に届くまで折り曲げられている。手足の指の骨はあまりまとまらず、中には離れた位置に遊離したような状態のものも認められた。

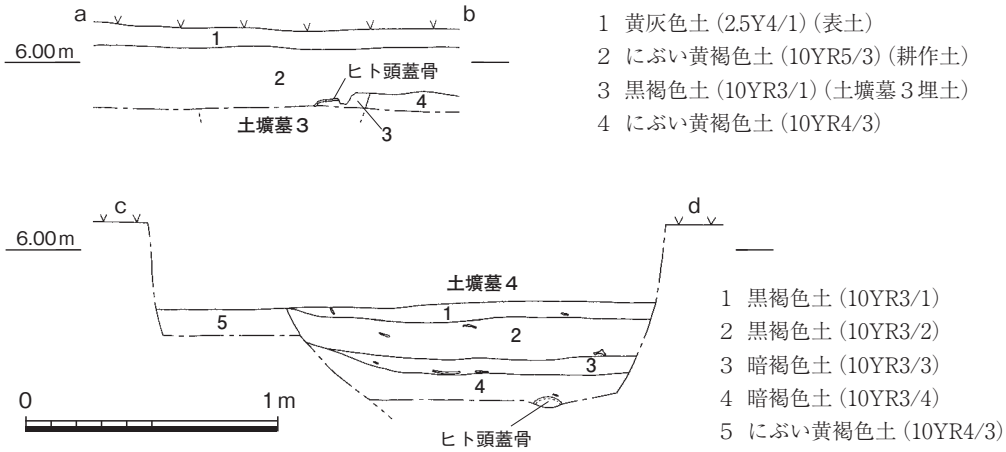
埋土は5つに分層した。1層は黒褐色粘質土で、検出面からの深さは約15㎝のレンズ状堆積で、縄文土器片、サヌカイトや流紋岩の石核・剥片、鹿角や獣骨、魚骨等が多量に含まれていた。これらの遺物は埋土2層が時間の経過とともに陥没した窪みに廃棄されたものであり、土壙墓と直接の関連はない可能性がある。2層は褐色粘質土で上下の層と比較すると遺物の量は少ない。3層は褐灰色砂質土で、上層との境界付近に土器片が多く認められた。この層中からは流紋岩製石核・剥片と合わせて10個弱の礫が検出され、周囲には縄文土器や鹿角、獣骨、貝なども認められた。流紋岩製石核等はほぼ水平な4層上面にまとまった状態で置かれ、その隙間や上から鹿角等の動物遺体や土器片が出土している。遺体を埋めた後、土壙をみなまで埋めることなく一度水平にならし、そこに流紋岩製石核等を置いたと考えられ、埋葬途中に何らかの祭祀行為が行われた痕跡と推定される。4層はにぶい黄色土、5層は灰褐色砂質土で、ともに土器片やサヌカイト片をわずかに含んでいた。

T21は、土壙墓の分布範囲を把握するため、**T1**の南側に設定した。基本層序は、表土（1層）、耕作土（2



1 黄灰色土（2.5Y4/1）（表土）
2 にぶい黄褐色土（10YR5/3）（耕作土）
3 黒褐色土（10YR3/1）（土壙墓４埋土）
4 黒褐色土（10YR3/2）（土壙墓４埋土）
5 暗褐色土（10YR3/3）（土壙墓４埋土）
6 暗褐色土（10YR3/4）（土壙墓４埋土）
7 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
8 黄褐色粗砂（2.5Y5/3）（地山）

第８図　トレンチ21東壁断面図・平面図（Ｓ=1/40）



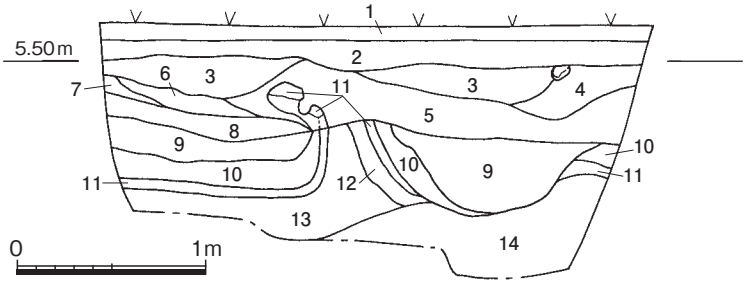
1 黄灰色土（2.5Y4/1）（表土）
2 にぶい黄褐色土（10YR5/3）（耕作土）
3 黒褐色土（10YR3/1）（土壙墓３埋土）
4 にぶい黄褐色土（10YR4/3）

1 黒褐色土（10YR3/1）
2 黒褐色土（10YR3/2）
3 暗褐色土（10YR3/3）
4 暗褐色土（10YR3/4）
5 にぶい黄褐色土（10YR4/3）

第９図　トレンチ21遺構断面図（Ｓ=1/30）

層）、にぶい黄褐色土の縄文時代包含層（7層）、遺物を含まない黄褐色粗砂層（8層）となっている。縄文時代の包含層には、縄文時代早期、中期、後期中葉、晩期の遺物が含まれている。トレンチの西壁および北端の2か所で人骨の一部（頭骨）が確認された。これらが土壙墓に埋葬されたものと判断し、それぞれ土壙墓3、4とした。土壙墓3は地表下約30㎝で東端部分が確認された。頭骨の上層部分は耕作等により破壊を受けて失われているが、下層の部分は残存すると思われる。墓壙は縄文時代包含層を切り込んでいることがトレンチ西壁で観察された。所属時期については、遺物の出土を確認していないので不明である。今回の調査では土壙埋土の掘り下げを行わず、遺構の存在確認にとどめた。

土壙墓4はトレンチの北端において、現地表から約30㎝下で検出された。この付近で縄文時代遺物の集中が認められたため、サブトレンチを掘開したところ、地表下約70㎝でヒトの頭蓋骨が確認された。それ以上の掘り下げは行わず、遺構の存在確認にとどめた。所属時期については不明である。埋土上層の黒褐色土層から後期中葉、その下の暗褐色土層から精製の鉢（第23図**21**）が出土した。トレンチ東壁の観察から、土壙墓4も縄文時代包含層を切り込んでいることが確認された。

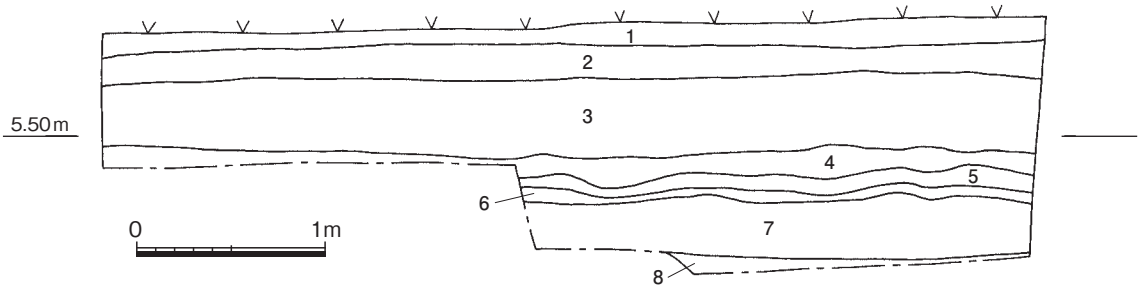


1 暗灰黄色土（2.5Y5/2）（腐植土）
2 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）（現代遺物）
3 褐灰色砂質土（10YR5/1）（現代遺物）
4 黒褐色土（10YR3/1）
5 褐灰色砂質土（10YR4/1）（中世土器）
6 黒褐色砂質土（10YR3/2）
7 黄灰色砂質土（2.5Y5/1）
8 にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）（中世土器）
9 灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
10 にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）
11 黄灰色粘質土（2.5Y4/1）（泥炭層）
12 黄褐色砂質土（2.5Y5/3）
13 にぶい黄色土（2.5Y6/3）
14 黄褐色砂質土（2.5Y5/3）

第10図　トレンチ２東壁断面図（S=1/40）

T2では付近に立木が密集するため、トレンチの幅2ｍ、長さを3ｍに縮小して調査した。3層までが現代の層で、4～8層から縄文時代、中世の遺物が出土した。遺物の量はごくわずかで、全て小片である。9層以下の土は非常に硬く締まっており、遺物の包含は認められないが、土層の状況が特異であるため、深掘りして記録に留めた。断面観察では、黒褐色泥炭層（11層）を底土とし、中に砂質土（9層）と粘質土（10層）が入り込んだ土坑状のものが並んでいる状況が確認された。このような地層の変形は、暴風により立木が倒れ、さらに風にあおられて木の根等が堆積物とともに回転して生じる「風倒木痕」と解釈することが多いが、地震が原因で、堆積物が塊となってこのような変形が起こることもあるらしい。

T3では、耕作土直下のにぶい黄褐色土（2層）から古墳時代の土器等が出土した。その下で縄文時代の遺物を含む黒褐色粗砂（3層）が確認され、早期押型文土器等が少量出土した。この3層は、**T1**の黒褐色土（5層）に比べて遺物の量は少ない。4層以下の土層には遺物は含まれない。標高約5.3ｍ

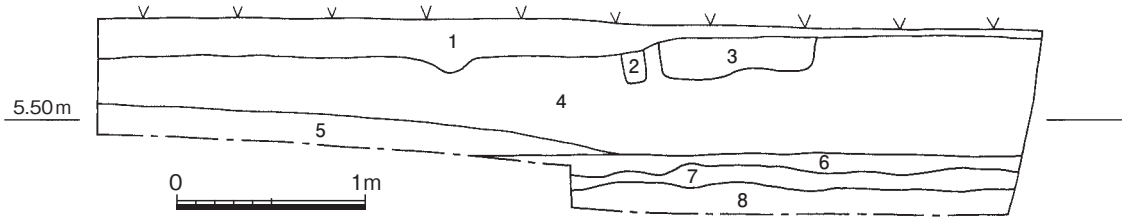


1 黒褐色土（10YR3/1）（耕作土）
2 にぶい黄褐色土（10YR4/3）（現代の攪乱）
3 黒褐色粗砂（10YR3/1）（縄文土器・須恵器・土師器）
4 にぶい黄色粘土（2.5Y6/3）と
　暗黄灰色粘土（2.5Y4/2）の互層
5 黒褐色粘土（2.5Y3/1）（泥炭層）
6 暗黄灰色粘土（2.5Y5/2）
7 暗灰黄色細砂（2.5Y4/2）と
　黄灰色粗砂（2.5Y4/1）の互層
8 明オリーブ灰色粘土（2.5GY7/1）

第11図　トレンチ３東壁断面図（S=1/40）

で厚さ10㎝程度の黒褐色粘土（5層）の泥炭層が確認された。この層については土壌サンプルを採取し、放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代草創期に相当する年代値が得られた。

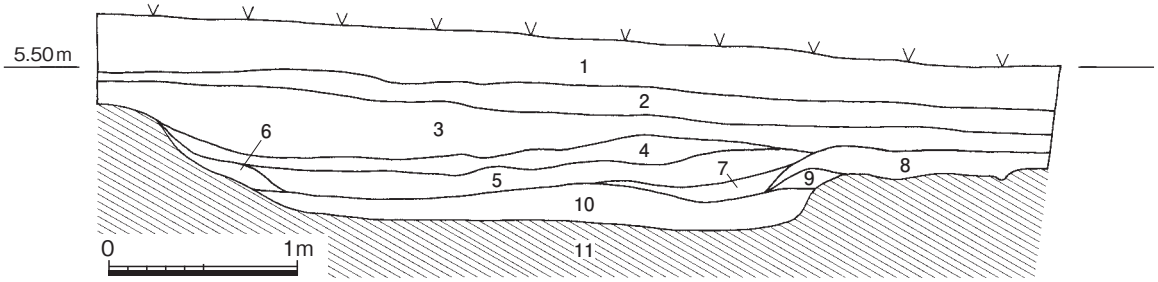
T4では耕作土直下で縄文時代の遺物包含層が確認された。黒褐色粗砂（4層）からはサヌカイトの小片が出土した。褐灰色粗砂（5層）からは後期から晩期の時期と思われる縄文土器が少量出土した。また、標高5.2～5.3ｍで黒褐色粘土（7層）の泥炭層が確認された。



1 灰黄褐色土（10YR4/2）（耕作土）
2 にぶい黄色土（2.5Y5/3）（現代）
3 にぶい黄色土（2.5Y5/3）（現代）
4 黒褐色粗砂（10YR3/2）（縄文時代遺物）
5 褐灰色粗砂（10YR4/1）（縄文時代遺物）
6 にぶい黄色粘土（2.5Y6/3）と暗黄灰色粘土（2.5Y4/2）の互層
7 黒褐色粘土（2.5Y3/1）（泥炭層）
8 灰色粘土（N6/0）

第12図　トレンチ４東壁断面図（Ｓ=1/40）

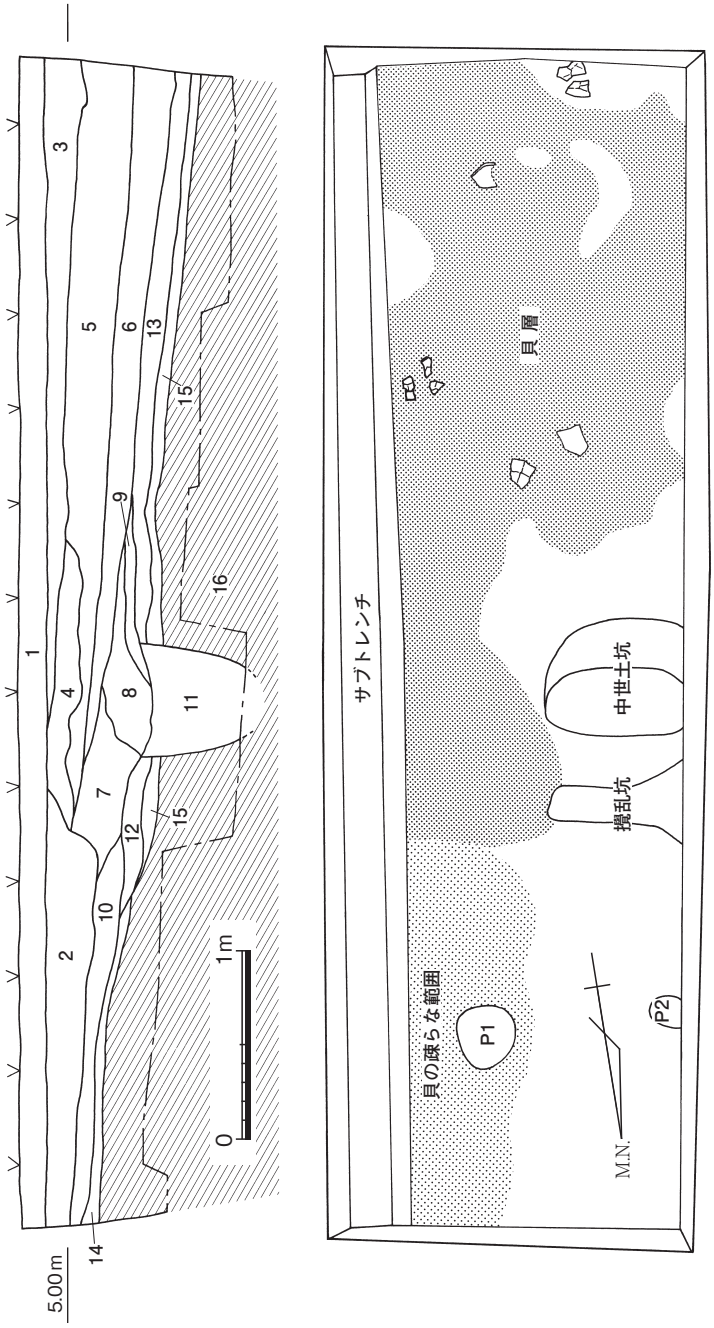
T5では現代の攪乱坑が深部にまで及んでおり、縄文時代の遺物包含層は残っていない。この攪乱坑は瓦製造のため、粘土を採掘した跡と思われる。粘土採掘坑の底から土器の底部が出土している。このトレンチでも破壊された状態で泥炭層が確認された。



1 灰黄褐色土（10YR4/2）（耕作土）
2 黒褐色土（10YR3/2）
3 黒褐色土（10YR3/2）（攪乱層）
4 灰黄褐色土（10YR5/2）（攪乱層）
5 褐灰色土（10YR5/1）（攪乱層）
6 暗褐色土（10YR3/3）（攪乱層）
7 褐灰色土（10YR5/1）（攪乱層）
8 褐灰色土（10YR5/1）（攪乱層）
9 灰黄褐色土（10YR4/2）
10 褐灰色砂質土（10YR5/1）
11 灰色粘土（N6/0）

第13図　トレンチ５東壁断面図（Ｓ=1/40）

T6は**T4**・**T5**と同一の畑地で、**T5**の南約12ｍ、道路際に設定したトレンチである。地表面の標高は約5.25ｍ、道路を挟んだ南側の土地（耕作放棄地・屋守川の旧河道）は標高約3.5ｍで、約1.8ｍの比高差がある。調査当初は5×2ｍの大きさでトレンチを設定していたが、貝層が確認されたことから、南の道路際まで1ｍ強の拡張を行った。土層は1層が現代の耕作土で、2～3層は硬くしまった花崗岩バイラン土である。この畑地は過去には果樹園として利用されており、2層は果樹園を片付けた際の攪乱土、3・4層は果樹園として利用する際に整地するために持ち込まれた土と推定される。5・6層は硬くしまった粘質土で、中世土器片を含んでいることから中世以降の堆積土と考えられる。7～9層は中世土坑（11層）の周囲にできた浅い窪みに堆積した土である。特に8層は明黄褐色粘質土をブ

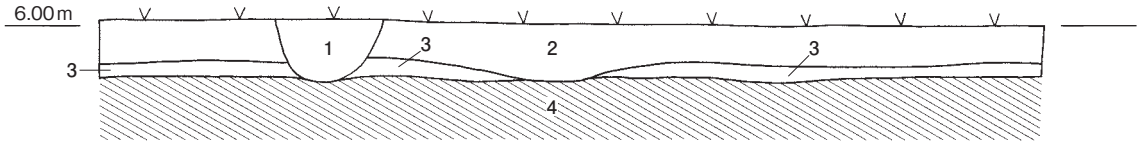


1 暗灰黄色土（2.5Y5/2）（耕作土）
2 にぶい黄色土（2.5Y6/4）（現代の撹乱）
3 にぶい黄色土（2.5Y6/3）
4 灰黄色土（2.5Y6/2）
5 褐灰色土（5YR4/1）（中世土器）
6 黒褐色粘質土（7.5YR3/1）（中世土器）
7 黒褐色粘質土（7.5YR3/2）（中世土器）
8 灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
9 灰褐色土（7.5YR4/2）（貝殻少量）
10 褐灰色粘質土（7.5YR4/1）
11 黄灰色粘質土（2.5YR4/1）（中世土坑埋土）
（貝殻、縄文土器、須恵器）
12 褐灰色粘質土（10YR4/1）
（撹乱を受けた混土貝層）
13 黒褐色粘質土（7.5YR3/1）（混土貝層）
14 黒褐色土（7.5YR3/2）（混土貝層）
15 黒褐色土（7.5YR3/2）（混土貝層）
16 にぶい黄色土（2.5Y6/4）

第14図　トレンチ６東壁断面図・平面図（S=1/40）

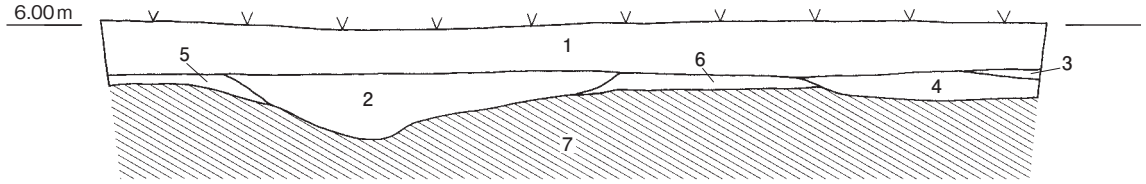
ロック状に含むことから土坑の掘削土の可能性がある。10層は中世土器片や貝殻を含む層であるが、貝殻の密度は低い。11層は中世土坑の埋土で、中世土器の他に貝殻や須恵器なども含まれている。土坑の規模は直径60㎝、深さ60㎝以上である。12層は混土貝層であるが、10層と続くようにも見え、中世段階での撹乱を受けている可能性がある。13～15層は縄文時代の混土貝層である。13層は貝の密度が高く、ハイガイ・マガキ・ヘナタリなどが認められたが、その厚さは10㎝ほどとあまり厚いものではなく、所々貝が認められない部分も存在していた。南に向かって下がっていっており、道路内に末端が存在するものと考えられる。また、上面には比較的大きな破片の縄文土器が張り付いていた。14・15層はやや砂質で貝の密度が低く、貝層と16層との漸移層であると考えられる。16層はしまりは強くないが、均質な砂質層で、貝塚形成期の地山と考えられる。トレンチ内で検出された遺構には、

トレンチ７北壁



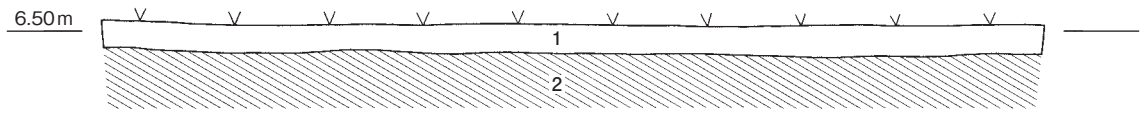
1 褐灰色土（10YR4/1）（現代）
2 灰黄褐色土（10YR4/2）（耕作土）
3 にぶい黄褐色土（10YR5/3）（耕作土）
4 黄褐色粘質土（2.5Y5/3）と
暗灰黄色粗砂（2.5Y5/2）の互層

トレンチ８北壁



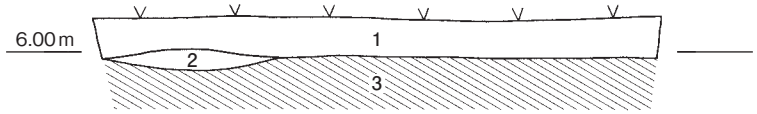
1 黄灰色土（2.5Y4/1）（耕作土）
2 暗黄灰色土（2.5Y4/2）（現代ゴミ穴）
3 灰黄褐色土（10YR4/2）
4 灰黄褐色土（10YR4/2）
5 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
6 灰黄褐色粘質土ブロック（10YR5/2）と
にぶい黄褐色土粗砂混じり（10YR5/3）
7 褐灰色土（10YR5/1）と黒褐灰色粘土（10YR3/1）と
にぶい黄褐色土粗砂混じり（10YR5/3）の互層

トレンチ９北壁



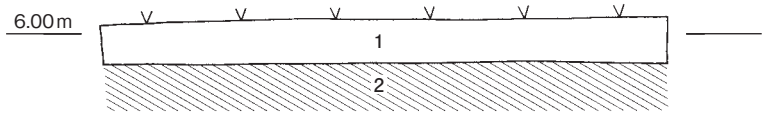
1 褐灰色土（10YR4/1）（耕作土）
2 灰オリーブ色粘土（5Y6/2）

トレンチ10北壁



1 黒褐色土（2.5Y3/1）（耕作土）
2 褐灰色土（10YR4/1）（現代）
3 灰オリーブ色粘土（5Y5/2）

トレンチ11北壁



1 黄灰色土（2.5Y4/1）（耕作土）
2 にぶい黄褐色土（10YR5/1）

第15図　トレンチ７～11断面図（S=1/40）

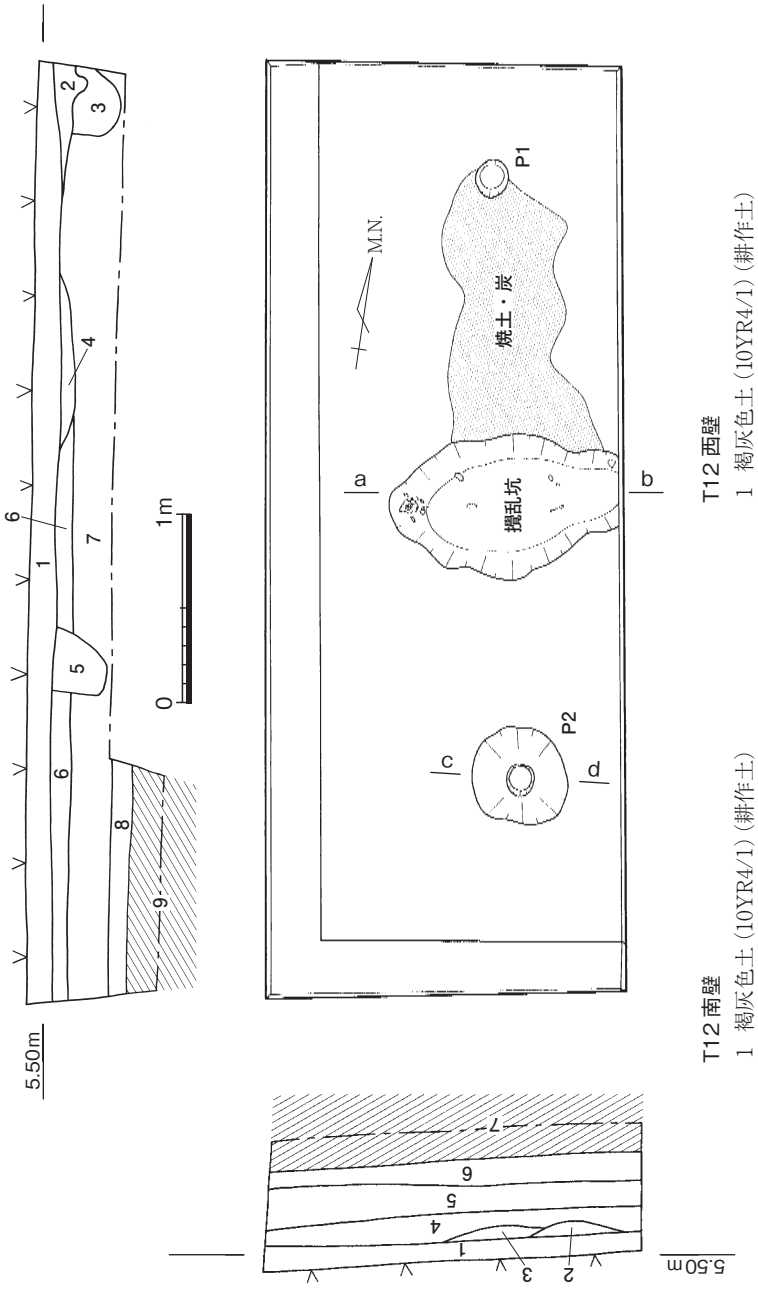
貝層を除けば中世土坑２基とピット2基、撹乱坑1か所が認められる。埋土の掘削を行っていないので、深さなど詳細は不明であるが、トレンチ西壁に係る中世土坑からは須恵器片などが出土している。また、ピット2基の埋土は花崗岩バイラン土であり、最近のものであると考えられる。

T7、**T8**では宅地造成により、地形の改変を受けており、遺物包含層は確認できなかった。

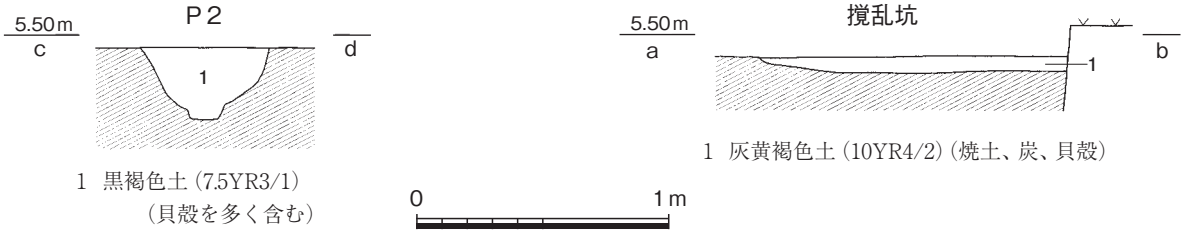
T9～**T11**では開墾により削平されており、遺物包含層は確認できなかった。

T12～**T14**は1955年の土壙墓調査地の付近に位置する。近年までブドウ栽培が行われていたが、休耕地となった後も地層の撹乱が進んだと推測される。

T12では耕作土の直下で貝殻をまばらに含む薄い層（2、4層）がみられ、地表下15cmで縄文時代の遺物包含層（6、7層）が確認された。6層の上面では古代の柱穴2基、撹乱坑1基が検出された。P1の埋土はハイガイを主とした貝殻を多く含んでおり、貝層由来の土壌と思われる。上層にも貝を含む

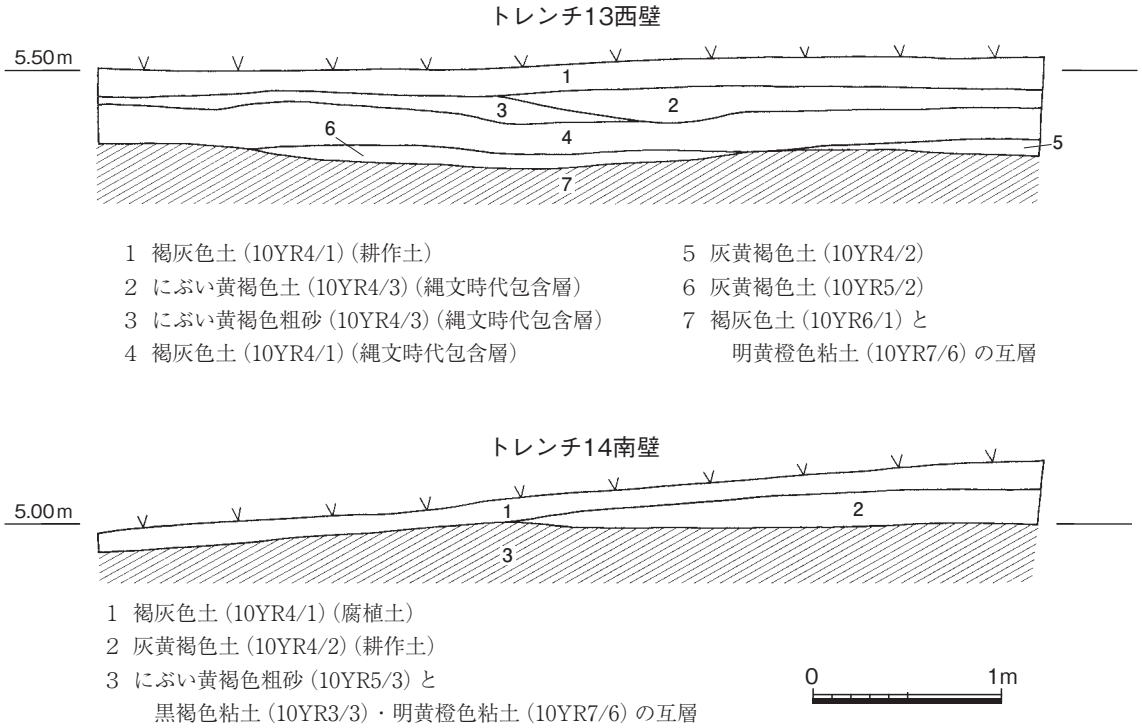


第16図　トレンチ12西壁・南壁断面図・平面図（S=1/40）



第17図　トレンチ12遺構断面図（S=1/30）

層が存在することから、本来はこの場所に貝層が広がっていたと考えられる。また、埋土中には須恵器、古代の製塩土器も含まれている。撹乱坑は、不定形で浅い土坑状を呈し、内部に焼土、炭が含まれる。火を使用した遺構が撹乱を受けたものとみられるが、この中から縄文土器、古代の製塩土器、ヒト側頭部、遊離した歯などの人骨、魚類の骨などが出土している。人骨の出土は土壙墓の存在をうかがわせる。



第18図　トレンチ13・14断面図（S=1/40）

T13でも地表下15㎝で縄文時代の遺物包含層が確認された。出土石器には第39図**S55**・**S56**があり、土器は小片のため図示できないが、縄文時代早期、中期のものが含まれる。

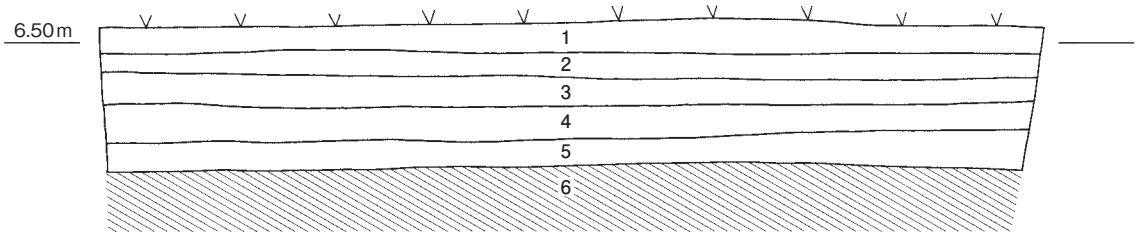
T14では開墾により削平されており、遺物包含層は確認できなかった。3層は地山で、東半部分の標高4.8～5.0ｍに黒褐色粘土の泥炭層が残存している。

実盛地区（T15～T20）

T15と**T16**の現況は水田である。堆積層はほぼ同じ状況で、3～5層にローリングを受けた中世遺物が含まれ、6層以下は遺物を含まない土層となる。水田の床土（2層）は泥炭層を含む粘土層を貼ったもので、付近で採掘した粘土を使用したのであろう。

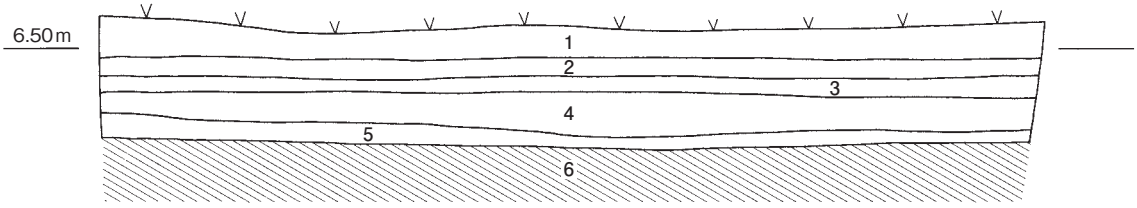
T17と**T18**もかつては水田であったが、現在は盛土による宅地造成が行われている。この場所で

トレンチ15北壁



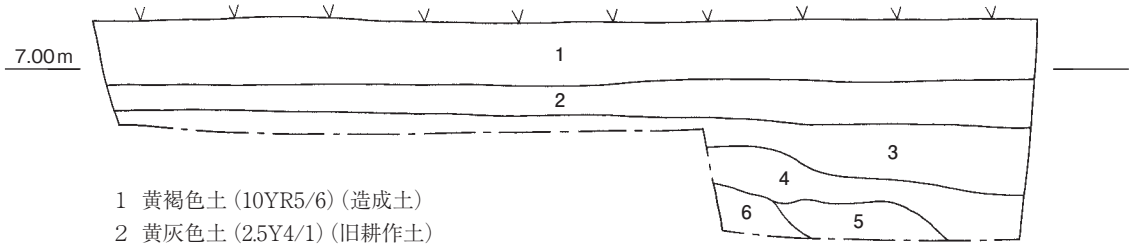
1 黄灰色土（2.5Y4/1）（耕作土）
2 黒褐色粘土（10YR3/1）・にぶい黄褐色土（10YR5/4）（床土）
3 灰黄褐色土（10YR5/2）（中近世遺物）
4 にぶい黄褐色土（10YR5/3）（中近世遺物）
5 褐灰色粘質土（10YR5/1）（中世遺物）
6 明黄橙色粘質土（10YR6/6）と灰色粘土（N5/0）の互層

トレンチ16北壁



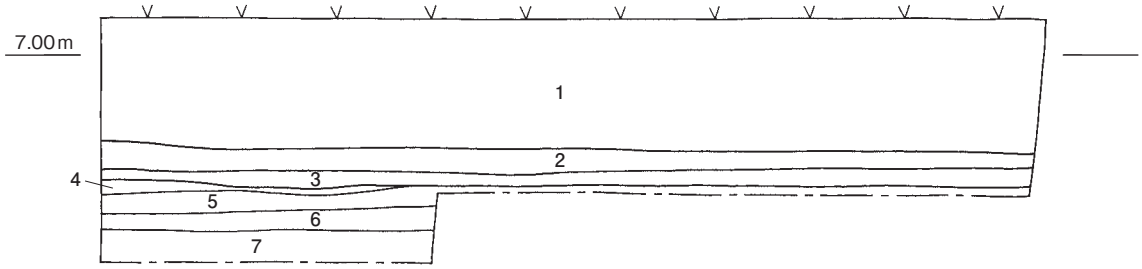
1 黄灰色土（2.5Y4/1）（耕作土）
2 黒褐色粘土（10YR3/1）・
　にぶい黄褐色土（10YR5/4）（床土）
3 灰黄褐色土（10YR5/2）（中近世遺物）
4 にぶい黄褐色土（10YR5/3）（中近世遺物）
5 褐灰色粘質土（10YR5/1）（中世遺物）
6 明黄橙色粘質土（10YR6/6）と
　灰色粘土（N5/0）の互層

トレンチ17東壁



1 黄褐色土（10YR5/6）（造成土）
2 黄灰色土（2.5Y4/1）（旧耕作土）
3 にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）と黄灰色粗砂（2.5Y5/1）の互層
4 灰色シルト（7.5Y5/1）
5 褐灰色粘質土（10YR4/1）にブロック状の黒褐色粘土（10YR3/2）（泥炭層）が混じる。
6 灰色シルト（10Y5/1）

トレンチ18北壁



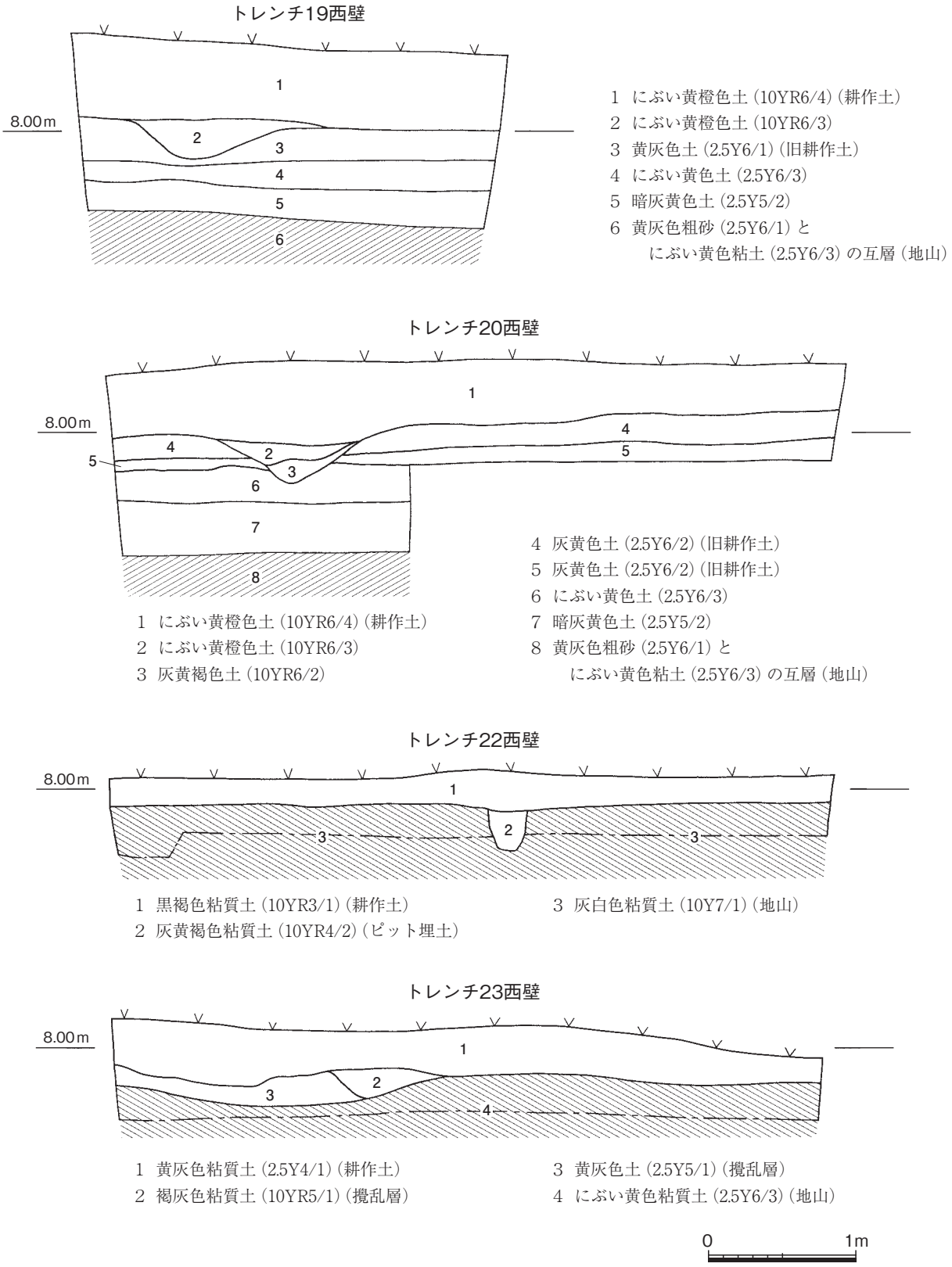
1 灰黄褐色土（10YR4/2）（造成土）
2 灰色粘質土（N4/0）（旧耕作土）
3 褐灰色土（10YR4/1）（旧床土）
4 灰黄褐色細砂（10YR5/2）
5 暗灰黄色細砂（2.5Y5/2）
6 オリーブ灰色粘土（2.5Y6/1）
7 黒褐色粘土（10YR3/1）（泥炭層）

0　1m

第19図　トレンチ15～18断面図（S=1/40）

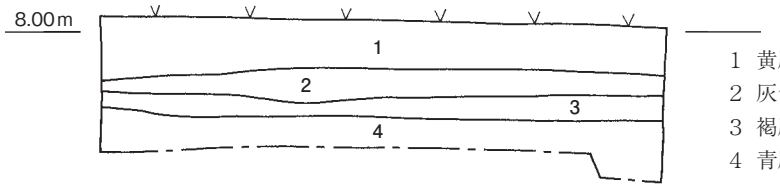
は開墾によって地山の層まで削平を受けており、遺物包含層は確認できなかったが、中世の包含層があったと推測される。**T18**では標高約6.1ｍで厚さ20㎝程度の泥炭層（7層）が確認された。

山際の畑地に設定した**T19**と**T20**では、旧耕作土の下に中世の遺物がわずかに含まれる堆積層が



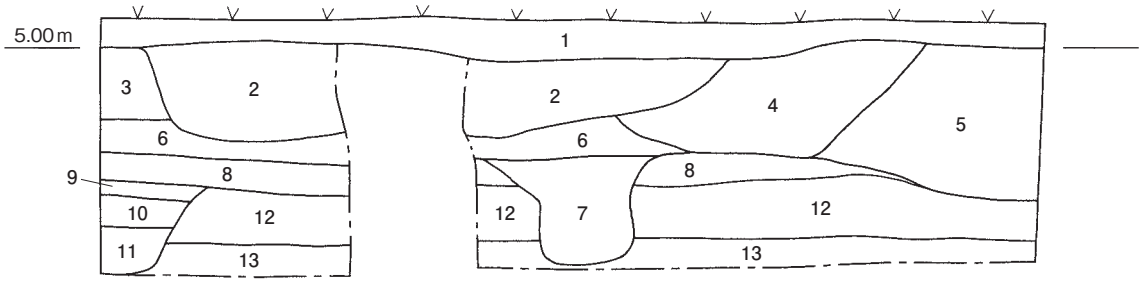
第20図　トレンチ19～23断面図（Ｓ=1/40）

トレンチ24西壁



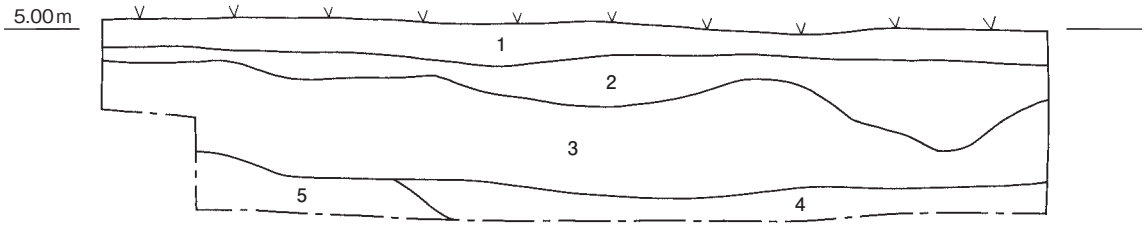
1 黄灰色粘質土（2.5Y4/1）（旧水田耕作土）
2 灰色粘質土（5Y5/1）（水田床土）
3 褐灰色粘質土（10YR5/1）（Mn）
4 青灰色粘質土（5BG6/31）（堆積土）

トレンチ25北壁



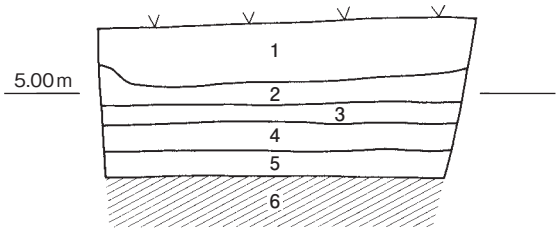
1 黒褐色土（10YR3/1）（耕作土）
2 灰黄褐色土（10YR5/2）（ぶどう耕作土）
3 褐灰色粘質土（10YR5/1）（ぶどう耕作土）
4 褐灰色土（10YR4/1）（ぶどう耕作土）
5 褐灰色粘質土（10YR5/1）（ぶどう耕作土）
6 褐灰色粘質土（10YR5/1）（ぶどう耕作土）
7 黄灰色粘質土（2.5Y4/1）（暗渠排水溝）
8 灰黄褐色土（10YR5/2）（旧水田耕作土）
9 灰黄褐色粘質土（10YR6/2）（暗渠排水溝）
10 灰色粘土（N5/0）（暗渠排水溝）
11 暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）（暗渠排水溝）
12 灰色粘土（N5/0）（中・近世遺物）
13 灰色シルト（N5/0）（堆積土）

トレンチ26北壁



1 黒褐色土（10YR3/1）（耕作土）
2 褐灰色土（10YR5/1）（ぶどう耕作土）
3 灰黄褐色土（10YR5/2）（ぶどう耕作土）
4 褐色粗砂（7.5YR4/4）（堆積土）
5 灰色粘質土（10Y5/1）（堆積土）

トレンチ27南壁



1 黒褐色粘質土（10YR3/1）（耕作土）
2 にぶい黄橙色土（10YR6/3）（現代遺物）
3 褐灰色土（10YR4/1）（中世遺物）
4 灰黄褐色土（10YR5/2）（中世遺物）
5 灰黄褐色土（10YR6/2）（中世遺物）
6 にぶい黄橙色土（10YR6/4）（地山）

0 1m

第21図　トレンチ24～27断面図（S=1/40）

確認されたが、縄文時代の遺物は出土しなかった。

北迫・北迫前地区（T22～T27）

T22、T23は、ブドウの栽培が行われていた畑地に設定したものである。耕作土の下は地山となっており、縄文時代の遺物は出土していない。

T24は水田を畑に変えた農地に設定したものである。旧水田の床土の下は遺物を含まない粘土層が堆積している。

T25、T26は、近年までブドウの温室が建っていた場所である。今回の調査で、水田を盛土造成した土地であることが明らかとなった。上層は厚い造成土で覆われ、ブドウ栽培の暗渠排水溝や天地返しが深部にまで及んでいる。T25では、地表下1.2ｍの灰色粘土層（12層）から中近世の遺物が少量出土した。T26では地表下0.8ｍで灰色粘土層（4層）、褐色粗砂層（5層）の堆積がみられたが、遺物は含まれていない。

T27では地表下約0.5ｍで中世の包含層（3～5層）が検出され、地表下0.8ｍで地山となっている。包含層中には摩耗した縄文土器が含まれていた。北迫の南斜面には縄文遺跡の存在も予想されるが、中世以降に破壊を受けていると思われる。

トレンチ	面　積	検出遺構等	特筆される遺物	備　考
T1	13 ㎡	縄文包含層、土壙墓２基	流紋岩の石材、人骨、獣・魚骨	泥炭層（5.0 m）
T2	6 ㎡	風倒木痕（中世以降）		泥炭層（変形）
T3	10 ㎡	縄文包含層		泥炭層（5.3 m）
T4	10 ㎡	縄文包含層		泥炭層（5.2 m）
T5	10 ㎡	縄文包含層		泥炭層（破壊）
T6	13 ㎡	縄文貝層、縄文包含層	貝殻、獣・魚骨	
T7	10 ㎡			泥炭層（破壊）
T8	10 ㎡			泥炭層（破壊）
T9	10 ㎡			泥炭層（破壊）
T10	6 ㎡			
T11	6 ㎡			
T12	10 ㎡	縄文包含層、柱穴２基他	人骨、貝殻、獣・魚骨	
T13	10 ㎡	縄文包含層		
T14	10 ㎡			泥炭層（4.8 ～ 5.0 m）
T15	10 ㎡			
T16	10 ㎡			
T17	10 ㎡			泥炭層（破壊）
T18	10 ㎡			泥炭層（6.1 m）
T19	10 ㎡			
T20	10 ㎡			
T21	10 ㎡	縄文包含層、土壙墓２基	人骨	土壙墓は未調査
T22	10 ㎡			
T23	10 ㎡			
T24	6 ㎡			
T25	10 ㎡			
T26	10 ㎡			
T27	3 ㎡			

トレンチ一覧表

第３節　出土遺物

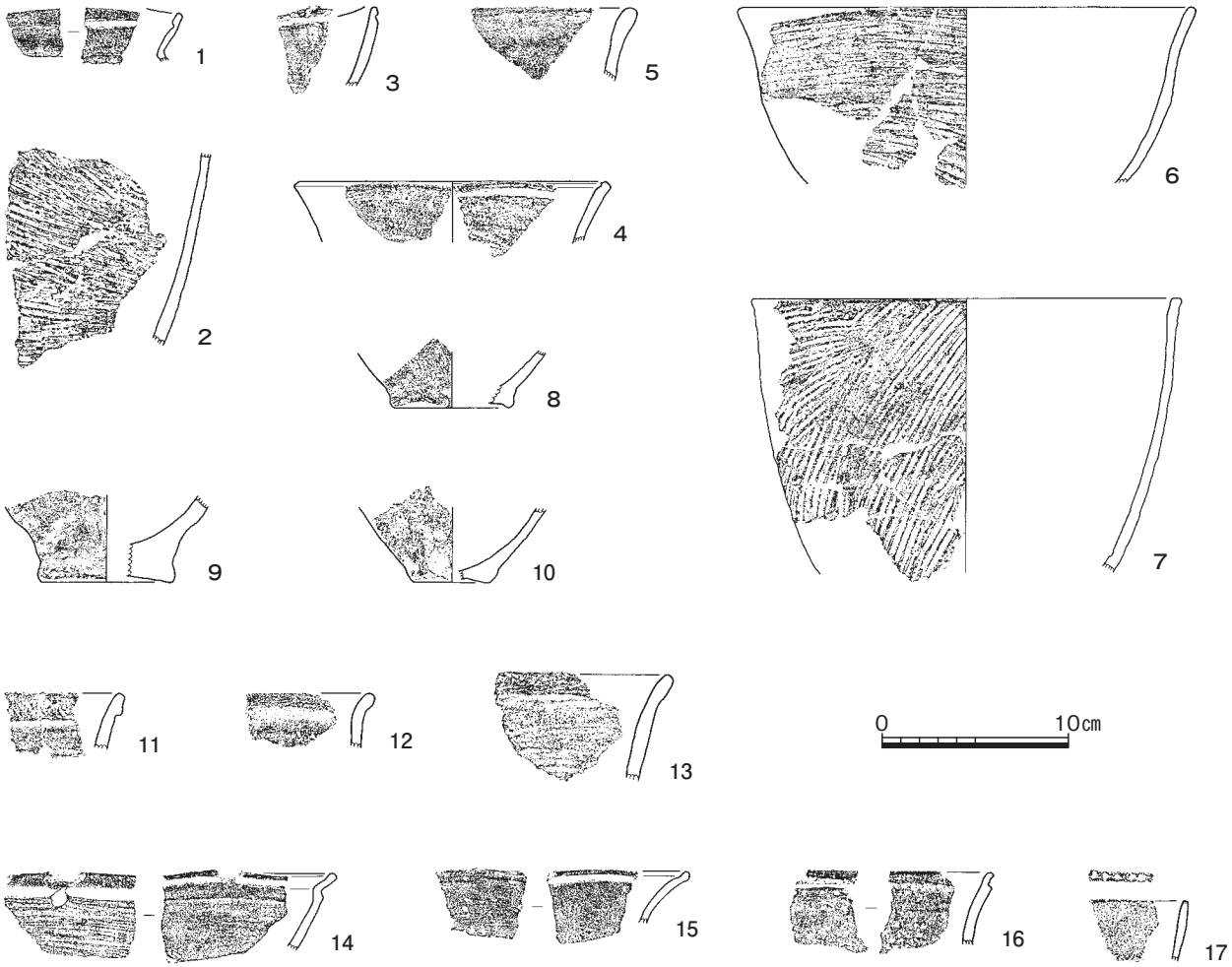
１　土　器

T1土壙墓１埋土（第22図**1**・**2**）

1は波状口縁の鉢である。口縁部が外反し、く字状に屈曲して胴部へ続く。口縁内側には沈線をもつ。内外面にはナデ調整が施され、外面には細目の条線が生じる。**2**は深鉢の胴部である。外面は二枚貝による条痕が顕著で、内面は平滑なナデ仕上げが施される。胎土には1㎜以下の白色砂粒が多く含まれる。**1**、**2**は晩期に属すると思われる。

T1土壙墓２埋土（第22図**3**～**10**）

3、**4**は鉢である。**3**は口縁部の外側に、**4**は内側に1条の細い沈線が巡る。これらの沈線は、工具を斜め下の角度から当て引いたものである。**4**の胎土には橙色微砂粒が含まれる。**5**～**7**は深鉢である。**5**は摩耗が著しいが、外面はナデ調整、内面はミガキ調整である。**6**の外面は横位の巻貝条痕が顕著で、内面は平滑なナデ仕上げであるが、砂粒を引きずった痕が随所に残る。均質な胎土には橙色微砂粒が多く含まれる。**7**の外面は斜方向の二枚貝条痕が著しい。**1**～**4**、**6**、**7**は晩期に属すると思われる。**8**～**10**は底部である。外面は縦方向のケズリ、内面はナデ仕上げとする。



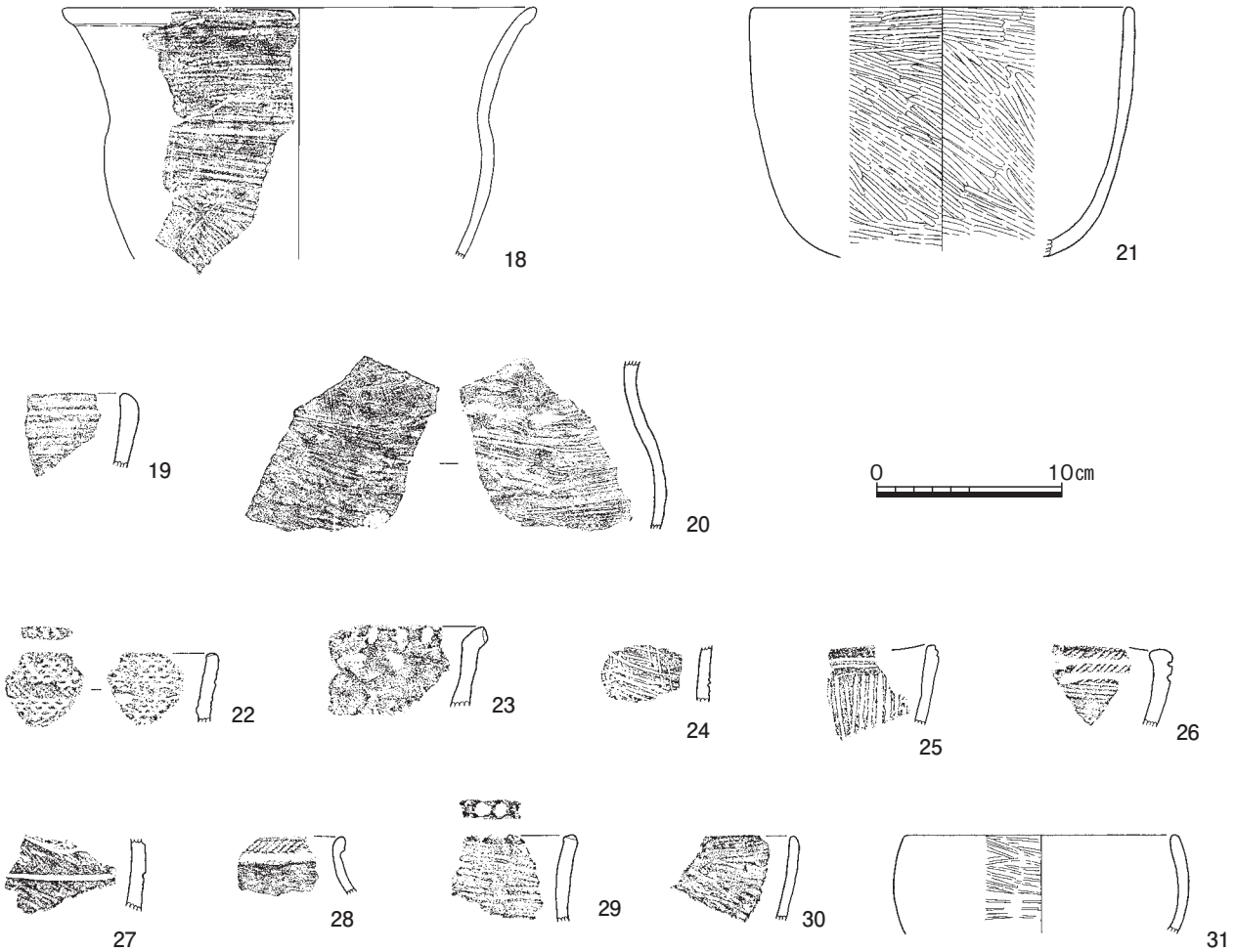
第22図　トレンチ１出土の土器（S=1/4）

T1 包含層（第22図**11**～**17**）

11～**13**は、口縁部が外反し、その上端部外面が肥厚する深鉢である。**11**の肥厚部分にはRL縄文が施文される。彦崎ＫＩ式に並行する時期と思われる。**14**～**16**は鉢である。**14**は口縁部がく字状に屈曲し、口縁端内側が肥厚する。外面では口縁部と胴部の境に陵をもち、その上に9×6㎜くらいの楕円形の凹みを付ける。端部を欠いているが、この位置で低い山形突起状になるかもしれない。**15**は口縁部が外反し、口縁端内側に浅い沈線が巡る。**16**は口縁部が短く外反気味に立ち上がる。外面は胴部との境で段をもち、この部分に1本の沈線が巡る。**17**は深鉢で、口唇部に右Ｄ字刻みを付ける。外面に粘土の継ぎ目が残る。**14**～**17**は晩期に属すると思われる。

T21 土壙墓４検出面（第23図**18**～**20**）

18は、頸部が外反し、口縁部外面が少し肥厚する深鉢である。肥厚部分には頚部と同様に横位の巻貝条痕が残る。彦崎ＫＩ式に並行する時期であろう。**19**は摩耗が著しく調整痕が不鮮明であるが、外面は巻貝による条痕調整の後ナデ仕上げ、内面はナデ調整であろう。**20**は頸部と胴部の境あたりが残る。器面調整は、はじめは内外面とも巻貝条痕とみられ、その後、外面の頸部は縦方向のナデ、胴部は横方向の軽いナデ、内面は横方向のナデである。このナデ調整は、細目の条線が生じるものである。外面黒褐色で胎土中には1～4㎜の白色砂粒が含まれる。



第23図　トレンチ21出土の土器（Ｓ=1/4）

T21土壙墓４埋土（第23図**21**）

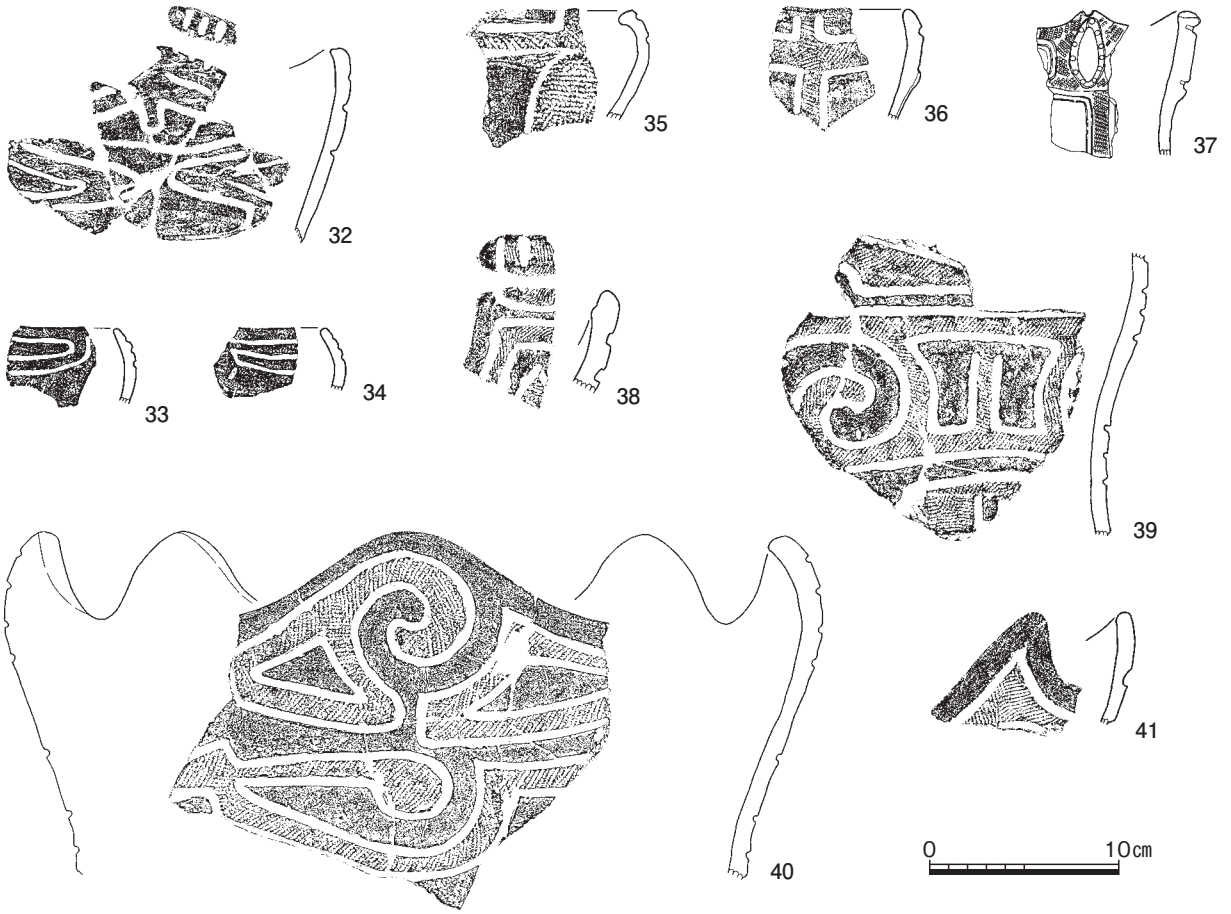
21はサブトレンチから出土したボウル形の鉢で、内外面に丁寧なヘラミガキ調整を行う。色調は外面が褐色で黒斑がみられ、内面は赤褐色を呈す。胎土中には1㎜以下の白色砂粒と粒状の炭化物が含まれる。

T21包含層（第23図**22**～**31**）

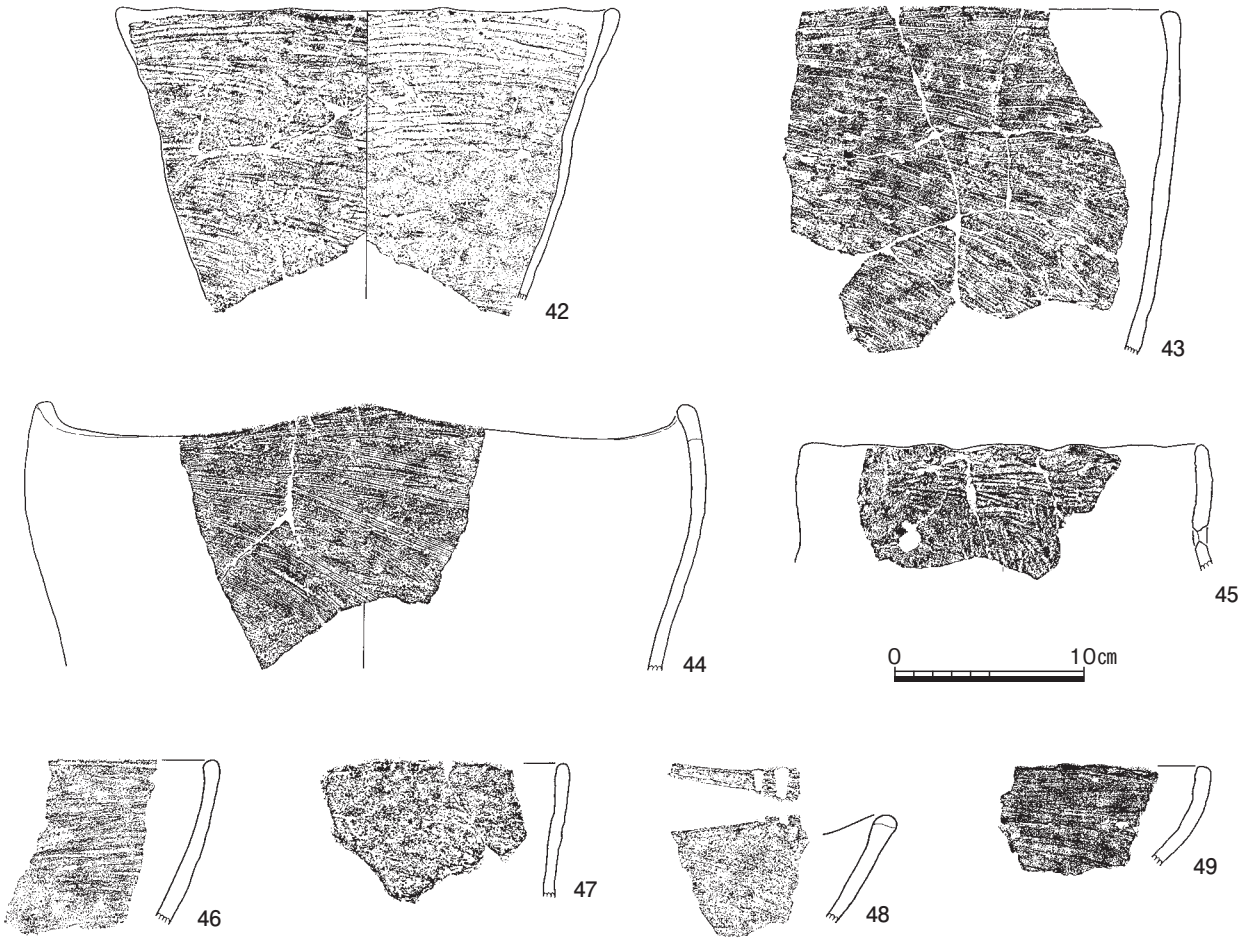
22の内外面には楕円の押型文が施文される。楕円粒子の大きさは6×3㎜程度である。口唇には斜方向の刻目をもつ。**23**は口縁端を外側に折り曲げ、口唇には斜方向の太い刻み目を加える。内外面に指頭圧痕のような凹凸がみられ、粗雑な造りである。**24**、**25**は半裁竹管による平行線文が描かれる。いずれも地文は認められない。**26**は口縁直下の沈線間にLR縄文を施し、その下の無文区に二枚貝条痕とみられる調整痕が残る。**27**は磨消縄文の土器で、沈線は中津式のものと比較して細く浅い。無文区に巻貝条痕が残る。**28**は口縁部外面の肥厚部にLR縄文を施文する。**29**は口唇部に開Ｖ字刻みをもち、外面に二枚貝による条痕調整が施される。**31**は小形の鉢で、外面は丁寧なミガキ調整が施され、内面も滑らかに仕上げる。**22**、**23**は黄島式、**24**、**25**は船元Ⅲ式、**26**は中期末の時期、**27**、**28**は彦崎ＫⅠ式に並行する時期、**29**は晩期に属すると思われる。

T6貝層上面（第24図**32**～第25図**49**）

貝層上面でサンプリングした土器18点を図示する。有文土器（**32**～**41**）は、中期末の要素が残る



第24図　トレンチ６出土の土器１（Ｓ=1/4）



第25図　トレンチ６出土の土器２（S=1/4）

中津式の古段階から磨消縄文が発展、成熟した段階までのものが混在している。

32～**34**は沈線文を施す土器である。**32**は波状口縁となる深鉢で、包含層から出土した第29図**87**と同一個体と思われる。口唇には円棒を押圧したような太い刻目が付く。口縁部直下の沈線は頂部で間隔をあけ、下段にU字形の文様を入れた沈線を重ね、三角形あるいは菱形の文様が展開するようである。**33**、**34**は小形の鉢で、同一個体である。内湾する口縁に平行し横長の文様が描かれる。

35～**41**は磨消縄文で飾られる土器である。**36**、**37**は口縁部が肥厚する。**37**は口縁部肥厚帯に文様が描かれる。小さな山形突起の波頂部端面には円棒で押したような刻みを1つ入れ、直下に円形刺突を付けた沈線で0字文を置く。その両脇には横長の文様を配置するようである。**38**は頂部が水平となる波状口縁である。沈線は口唇部にまで及ぶ。**39**は口縁部下段からくびれ部に至る部分で、渦巻文が左右対称に描かれているのであろう。渦巻文の間にある台形状の文様は、下底から2本の線が平行して立ち上がり、他の線に接合しないまま途切れるが、平行線の間にも縄文が充填される。下段にも縄文帯と無文帯が反転した同様の文様が認められる。**40**は三角形の文様を取り込んだ渦巻文を波頂部に配し、横方向および下段へと文様が続く。**41**は三角形状の口縁部で、2つの波頂が相対して並ぶ形態かもしれない。

42～**47**は無文土器の深鉢である。**42**～**46**には内外面に巻貝条痕が施され、**42**以外は内面にナデ調整を加える。**45**には穿孔がある。**48**は波状口縁となる鉢で、波頂部に太さと深さを変えた刻目を

付ける。

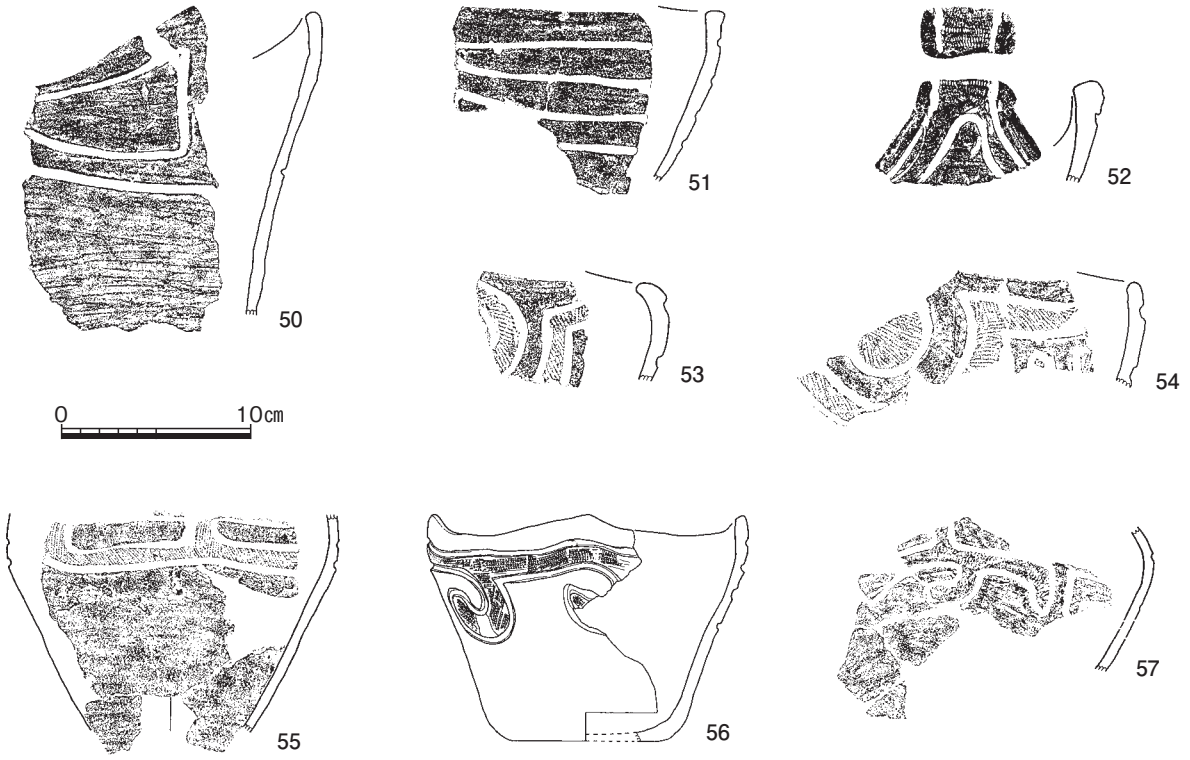
T6東壁サブトレンチ（第26図**50**～第28図**77**、第29図**85**）

貝層断面を観察するために設定した東壁サブトレンチから出土した土器29点を図示する。

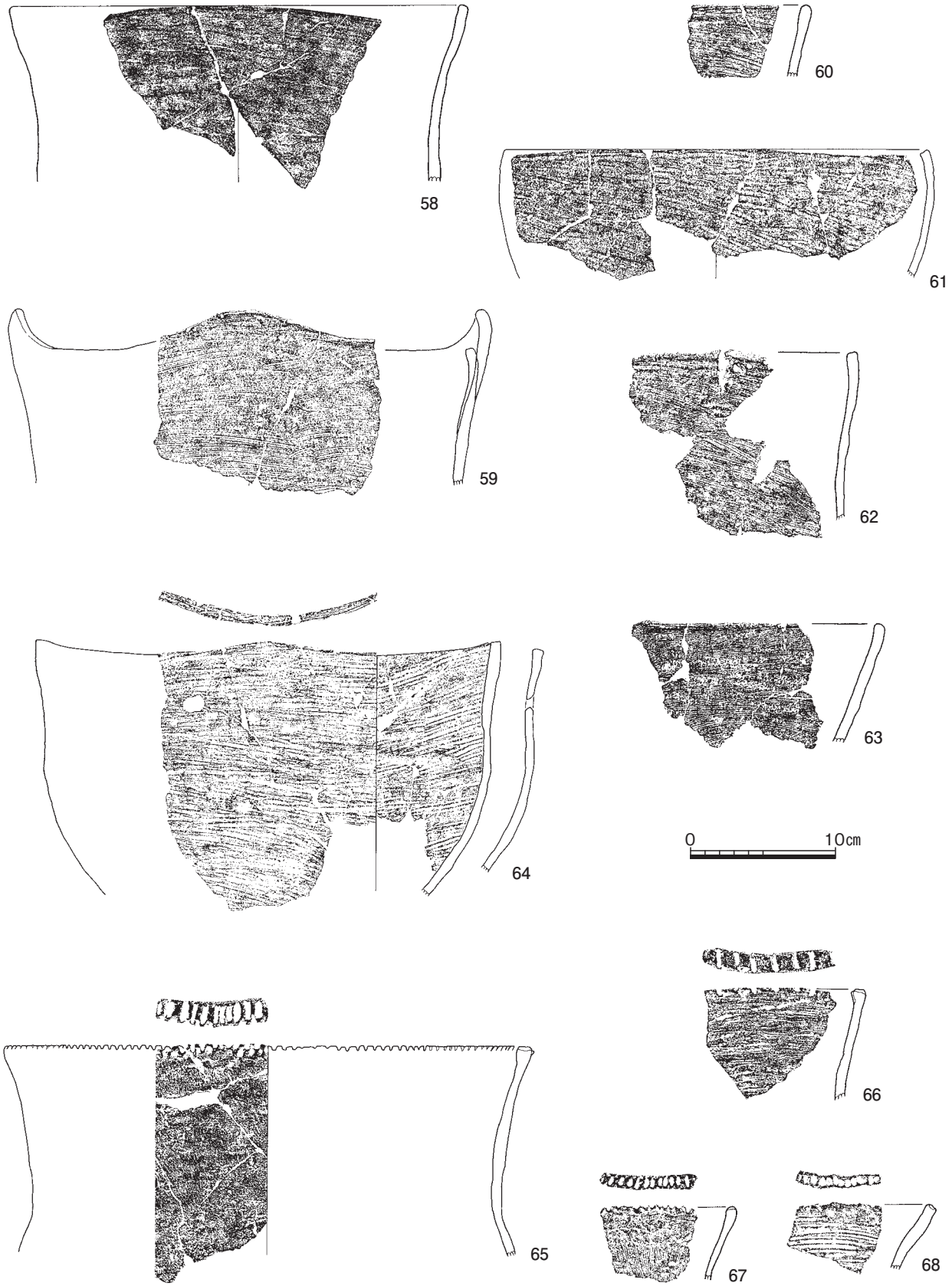
85は磨消縄文で飾られる。口縁部は内湾し、横帯状の文様をもつ。口縁部の縄文は口唇から少し内側に回る部分にまで及ぶ。中期末に属すると思われる。**50**～**57**は中津式土器である。**50**～**52**は沈線文で飾られる。**50**は波状口縁をもつ深鉢で、波頂部に三角形の区画文が描かれる。外面には巻貝条痕が残る。**51**は口縁に平行して横長の文様が描かれる。**52**は波頂部の上端部に巻貝による擬縄文が施される。

53～**57**は磨消縄文の土器である。**53**、**54**は口縁部に下方から巻き上がる渦巻文を描く。**55**、**57**は文様の下端が残る。**57**は沈線間に巻貝による擬縄文を充填する。口縁部から続く横長の文様から巻きの弱い渦巻文が垂下する。**56**は波状口縁をもつ鉢である。巻貝による擬縄文が施され、口縁に平行する文様帯から推定で6個の渦巻文が垂下する。

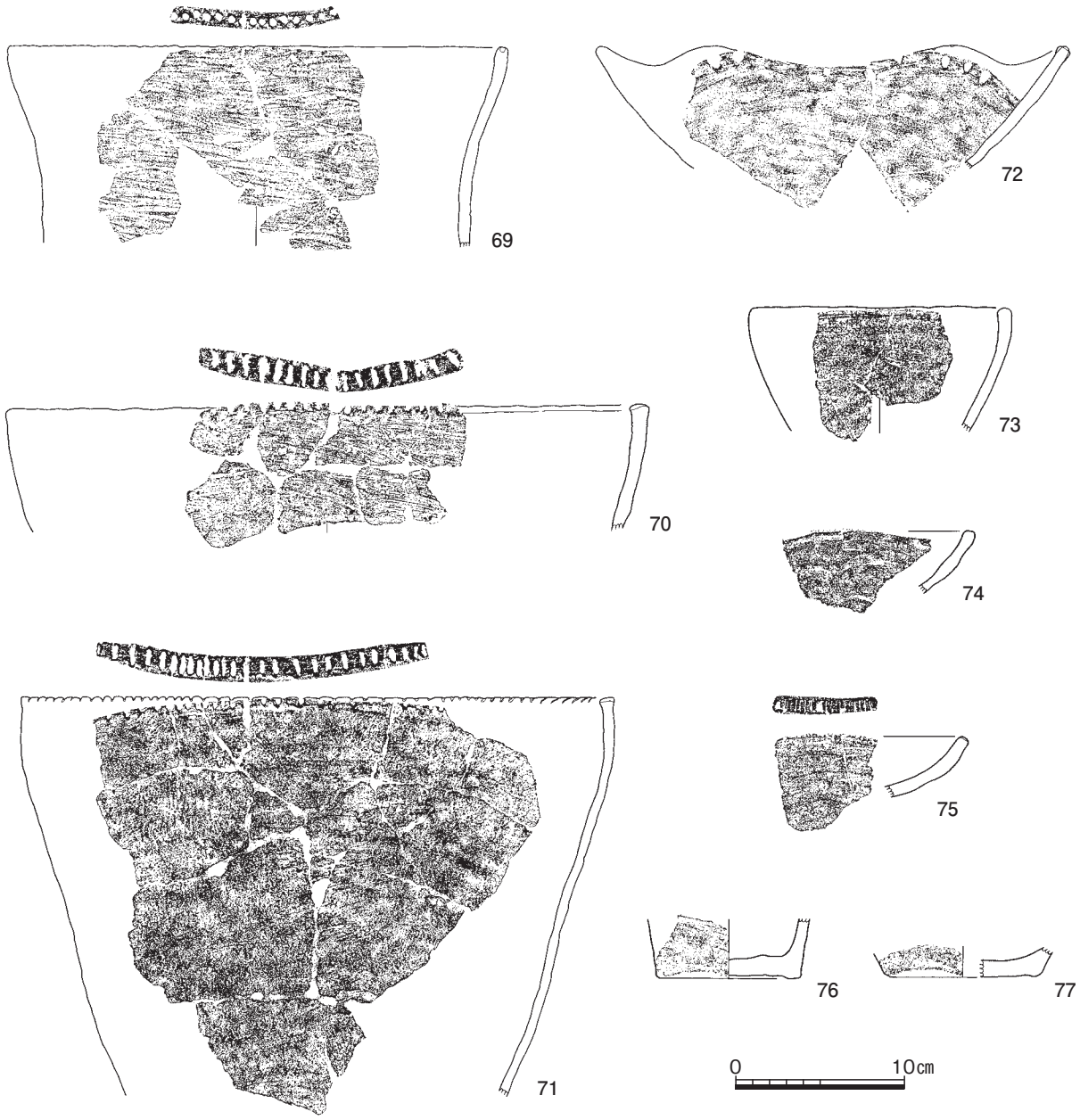
52、**56**、**57**で施文具として用いられた巻貝には、中津貝塚でも出土しているニナ目ウミニナ科のカワアイとフトヘナタリの2種類あると推測される。カワアイは、殻高3.5㎝、殻径1.3㎝くらいの塔形の巻貝である。貝殻の彫刻は、各螺層の中に3本の螺肋が等間隔にあり、これが縦の溝によって切られるため、四角形の凹凸が線状に並ぶ。そのため、カワアイを粘土上で回転させると角をもつ凸線の間に微少な四角形の圧痕列が表れる。また、貝殻を引きずって付けた条痕の場合は、3本の螺肋が溝を掘ることで2本の凸線が生じる。螺層の間はそれよりも広い凸線となるため、「太・細・細・太」の単位で凸線が生じる。このような特徴から、条件が良ければ土器の条痕調整でも比定は可能と思わ



第26図　トレンチ６出土の土器３（S=1/4）



第27図　トレンチ６出土の土器４（S=1/4）



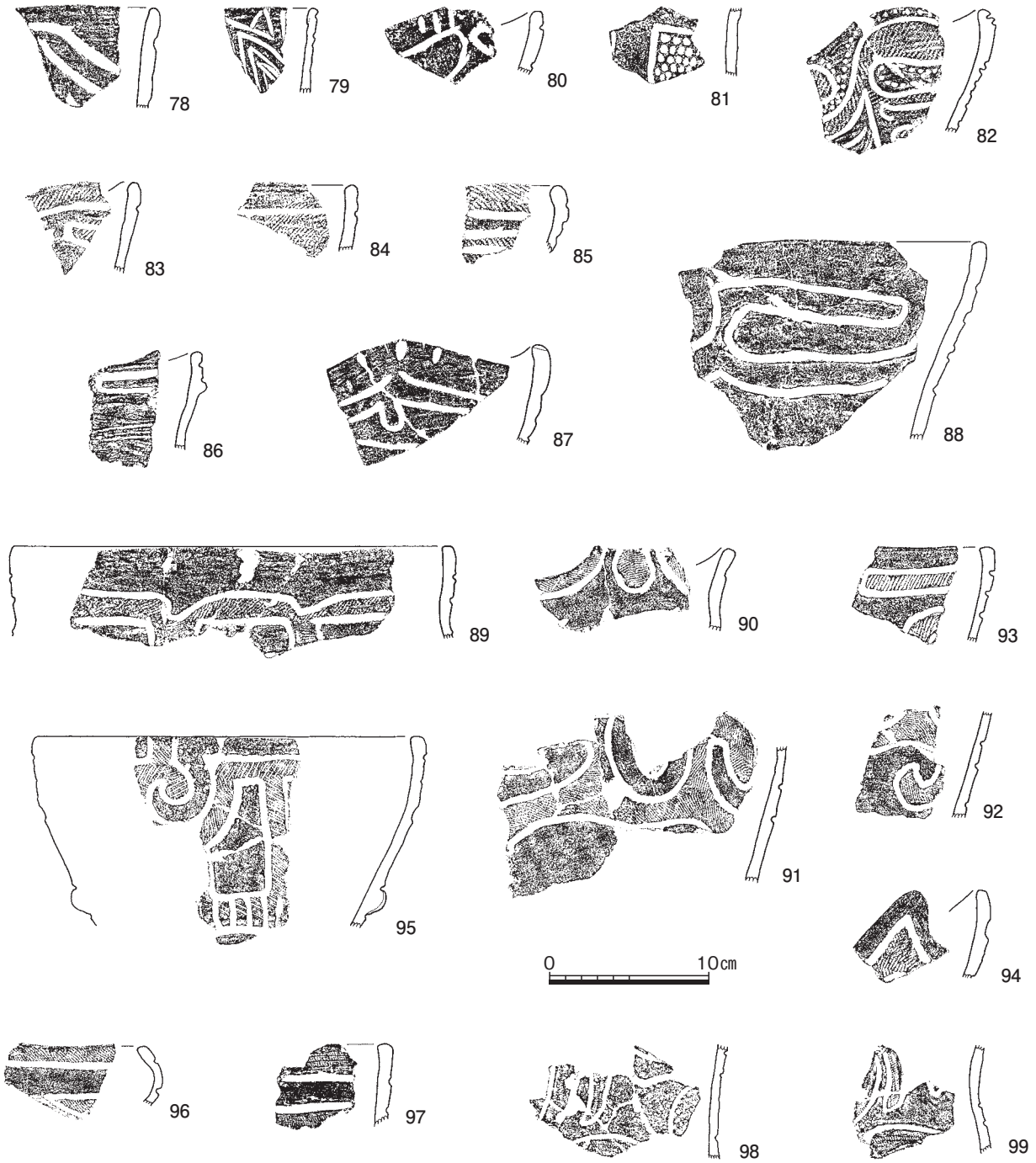
第28図　トレンチ６出土の土器５（S=1/4）

れる。フトヘナタリは、殻高4.0㎝、殻径2.0㎝くらいの塔形の巻貝である。ふくらみをもつ螺層に縦長の結節が並ぶのが特徴で、粘土面に押しつけて回転させると、各螺層に対応して細い横縞のある長楕円形の節が連続して表れる。また、引きずると畝状の凸線と細い条線（沈線）が生じる。同じように結節が並ぶイボウミニナと比較すると、回転施文ではフトヘナタリの方がメリハリのある文様となり、土器の擬縄文でも比定可能と思われる。条痕の場合は、太い畝とシャープな条線の組み合わせがフトヘナタリの特徴であるが、全体的な雰囲気はイボウミニナや別種のウミニナともよく似ており、判別は難しい。巻貝による擬縄文について、上記の特徴を目安にすると、**52**、**57**はフトヘナタリ、**56**はカワアイで施文されたものと推定される。

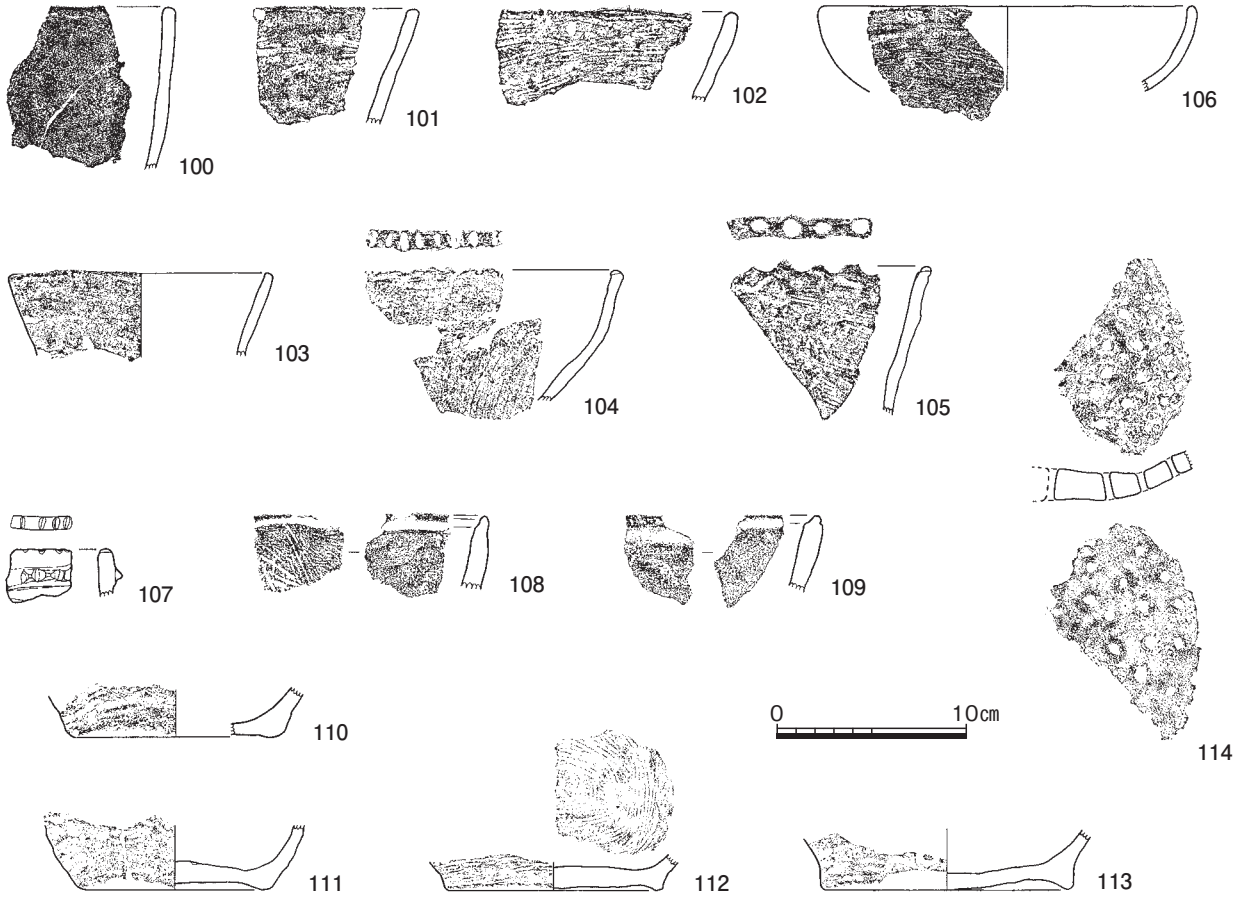
58～**75**は無文土器である。**58**～**71**は深鉢で、**58**のナデ調整はミガキ風になっている。**59**、**64**は波状口縁である。**64**には穿孔があり、外面が巻貝、内面が二枚貝の腹縁による条痕調整である。

条痕は口唇部にも及んでおり、巻貝条痕が優勢の中、二枚貝条痕に切られている部分がみられる。**65**～**71**は口唇部に刻目を入れる。**68**、**69**の口唇部には円形刺突が巡る。**67**の外面調整は、横位の条痕の後､縦位の細かい条痕が加わる。**71**のナデ調整はミガキ風になっている。**72**～**75**は鉢である。**72**は波頂部に太い刻目を3つ入れる。巻貝による条痕調整の後、ミガキ風のナデを加える。**75**の刻目は細い線状で、浅く密に付ける。

76、**77**は縄文土器の底部小片である。**76**は底部周縁が高い高台底で、外面に巻貝条痕が残る。**77**は浅い凹底である。



第29図　トレンチ６出土の土器６（S=1/4）



第30図　トレンチ６出土の土器７（S=1/4）

T6包含層（第29図**78**～**84**、第29図**86**～第30図**114**）

貝層上面を検出するまでに掘り下げた遺物包含層（中世の撹乱層）から出土した土器36点を図示する。**78**～**81**は沈線文をもつ土器である。**78**の沈線は幅6㎜と太く、深さは一定していない。内面に畝が生じるほど深い部分もある。表面は摩滅しており、調整は不明である。**79**の口唇部は粘土を内側に折り込むようにして雑に仕上げる。文様は、直線と曲線を組み合わせた形を入れ子状に重ねたようである。**80**は口縁部に横長楕円状の文様や短沈線が粗雑に描かれる。里木貝塚報告書の「里木Ⅲ式」とした資料に類例がある。**81**は方形状の区画の中に円形刺突文を密に充填する。沈線は浅い。

82～**84**は磨消縄文で飾られる。**82**は波状口縁をもつ深鉢で、波頂部が円みを帯び、口唇部には縄文が付けられる。口縁部には横方向に流れる渦巻状の区画文が描かれ、刺突文を配列する区画と縄文が施文される区画が交互に入り組む。縄文の区画は刺突文の区画の上下を包むように展開し、下側は蕨状文により区画される。その下にも無文部分を挟んで縄文の区画が描かれており、縄文の部分と無文の部分を交互に配置する意図がうかがえる。**84**の口縁部無文帯には、区画線から縄文がはみ出している。**81**～**84**は中期末に属すると思われるが、**84**は後期の可能性もある。

86～**88**は沈線文が施される。**86**は波状口縁の深鉢である。口縁部に粘土紐を貼り付けて段を形成し、その上に横長の窓枠状の文様を描く。外面には二枚貝条痕が残る。市内の貝塚出土資料でこれに類似した土器には、口縁部の段より下に巻貝条痕が残るもの、口縁部以下全体をナデ調整するもの

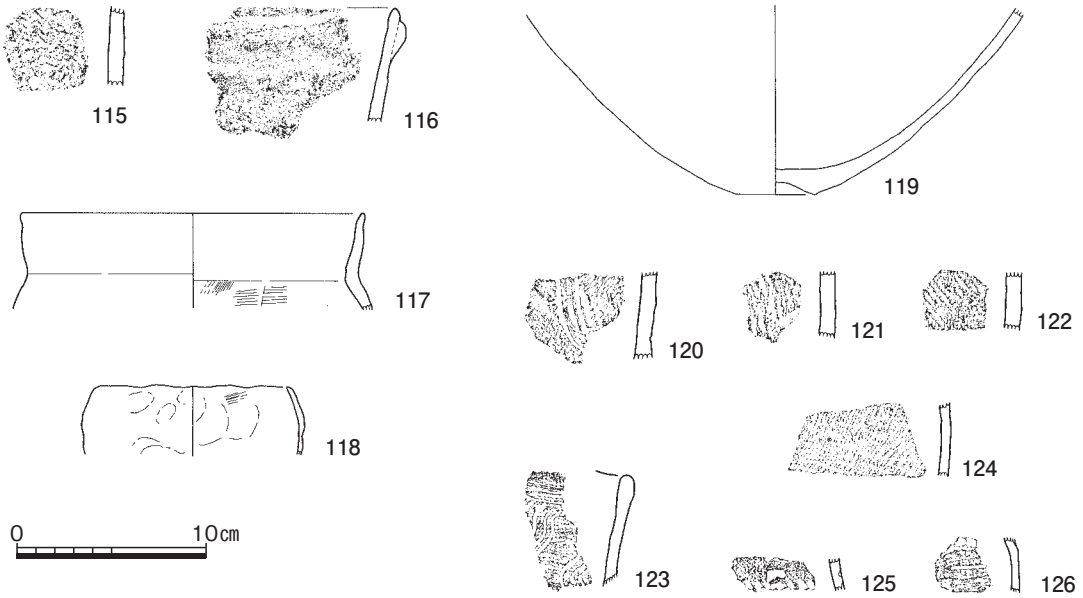
もあるが、これらと比較して本資料は古い要素をもつ。

87、**88**は中津式土器である。**87**は波状口縁をもつ深鉢で、第24図**32**と同一個体であろう。口唇には円棒を押圧したような太い刻目が入る。口縁に沿う沈線は頂部で離れ、その下にはU字形の文様を入れた線が平行する。**88**は横長に展開する文様構成で、左端には渦巻文の一部が残る。文様帯の幅は一定せず、線がぎこちなく波打っている。

89～**99**は磨消縄文が施される中津式土器である。**89**は口縁部に横長の窓枠状の文様を連結して描いている。**90**～**92**は同一個体の可能性がある。無文帯は丁寧なミガキ調整が施され、黒褐色を呈する。**94**は波頂部で、第24図**41**と同じ形状である。**95**は幅1～1.2㎝の縄文帯や隆帯で飾られる。渦巻文が描かれる口縁部から縄文帯が垂下し、横走する隆帯とつながる。土器片の下半部左端に渦巻文と隆帯を直線で結ぶ沈線が認められることから、渦巻文からも縄文帯が垂下すると推測される。隆帯は断面がかまぼこ状で、上下を沈線で区画し、縦の沈線が密に入る。縄文は、深浅の条が交互に表れるもので、ＬＲどうしを反に撚り合わせた3段の縄ＬＬＲを用いたのかもしれない。**96**は内湾する口縁部をもつ鉢で、無文帯はミガキ調整が施される。**97**～**99**の施文帯には、巻貝による擬縄文が充填される。**97**はカワアイ、**98**、**99**はフトヘナタリで施文されたものであろう。**98**、**99**は同一個体と思われる。幅の狭い施文帯による文様の描き方が第26図**57**と似ているが、文様は複数段にわたる。

100～**106**は無文土器である。**106**は鉢で、それ以外は深鉢と思われる。**104**、**105**は口唇部に刻目をもつ。

107～**109**は縄文時代晩期の土器である。**107**は口縁外面に刻目の付いた突帯をもち、口唇部にも刻目が付く。磨滅が著しい。**108**は口縁端の内外面に凹線を巡らす。**109**は口縁端の内側に凹線を巡らし、外側には細く鋭い沈線が入る。**110**～**113**は縄文土器の底部で、**110**、**111**は凹底、**112**、**113**は高台底である。**112**の内面には二枚貝条痕が残る。**114**は多孔底土器である。径約3㎜の孔が同心円状に並ぶ。内面および孔の表面には褐灰色を呈する膜状のものが付着する。



第31図　トレンチ３・５・12出土の土器（S=1/4）

T3包含層（第31図**115**～**118**）

115、**116**は縄文時代早期の土器である。**115**の外面には山形の押型文が施文される。**116**は無文で、口縁部外面には、口端から5㎜くらい下に幅2㎝程度の隆帯が粗雑に貼り付けられる。胎土・焼成は**115**によく似ている。**117**は土師器甕、**118**は奈良・平安時代の製塩土器である。

T5攪乱坑（第32図**119**）

119は深鉢の底部である。凹底を呈し、底径は3.2㎝である。外面調整は摩耗のため明らかでないが、内面は平滑なナデ調整である。縄文晩期に属すると思われる。

T12攪乱坑（第33図**120**～**126**）

120～**123**は縄文時代中期の土器である。**120**はＲＬ縄文を地文とし、半裁竹管状工具による平行線文が描かれる。**123**は無文地に波状文が縦位に描かれる。いずれも船元Ⅲ式と思われる。**121**、**122**の縄文は節の中に繊維痕がみられる。**124**には撚糸文が施文される。**125**、**126**は縄文時代晩期の深鉢で、頸部と胴部との境に爪形文がめぐる。**125**には頸部で垂下する爪形文が認められる。**126**の胴部には横方向のケズリ調整がみられる。

２　石　器

サヌカイト製石器・剥片など1,754点、流紋岩製石核・剥片など228点、姫島産黒曜石剥片・砕片2点が出土している。石材別の総重量はサヌカイト1,739.87g、流紋岩4,260.77g、姫島産黒曜石3.16gである。また、このほかに石錘、磨石類なども出土している。

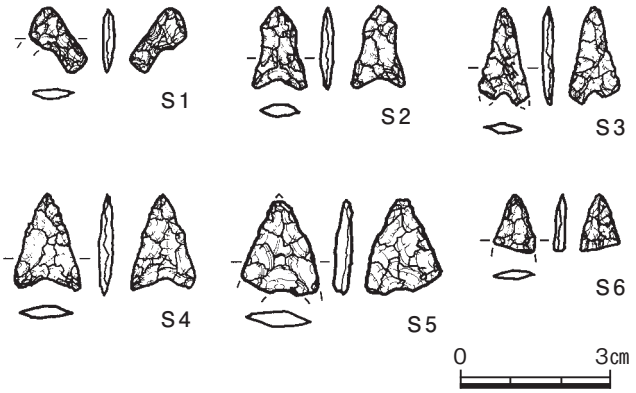
トレンチ1（第32図～第36図）

トレンチ1では土壙墓1･2及び包含層から石器が出土しており、以下順に解説する。なお、土壙墓1･2の埋土については、微細遺物の検出のために一部水洗しており、多量のサヌカイト・流紋岩砕片が検出されている。

土壙墓1からは石器製品としてはサヌカイト製の石鏃1点が出土しているが、埋葬に伴うものではなく、埋土中に混入したものと考えられる。**S1**はやや幅広で抉りが深い凹基鏃である。片方の脚を欠失し、著しく風化している。

土壙墓2からは、サヌカイト製の石鏃6点、スクレイパー１点、楔形石器3点、加工痕跡のある剥片2点、流紋岩製の石核3点が出土している。また、姫島産と考えられる黒曜石製砕片も1点検出されている。このうち石鏃5点、石核2点（接合資料含む）を図化した。

石鏃には明確に埋葬に伴うものはなく、埋土中に混入したものばかりと考えられる。先端のみの破片である**S6**と図化しなかった1点を除くとすべて抉りの浅い凹基鏃である（第32図）。**S2**の側縁部はＳ字状で、細身の五角形状を呈する。**S3**はほっそりした薄手の鏃である。**S4**･**S5**は二等辺三角形状を呈している。

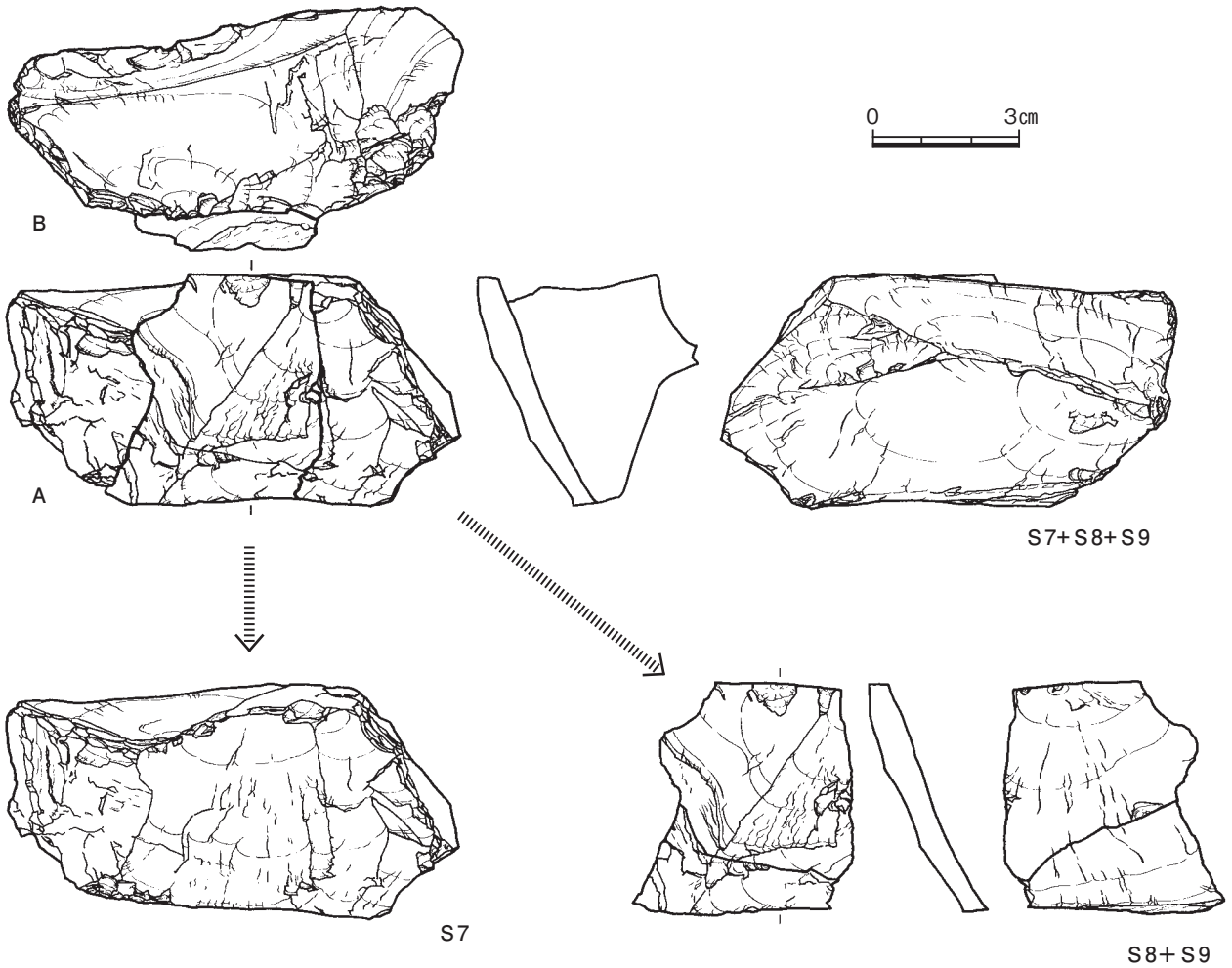


第32図　土壙墓１・２出土の石鏃（Ｓ=2/3）

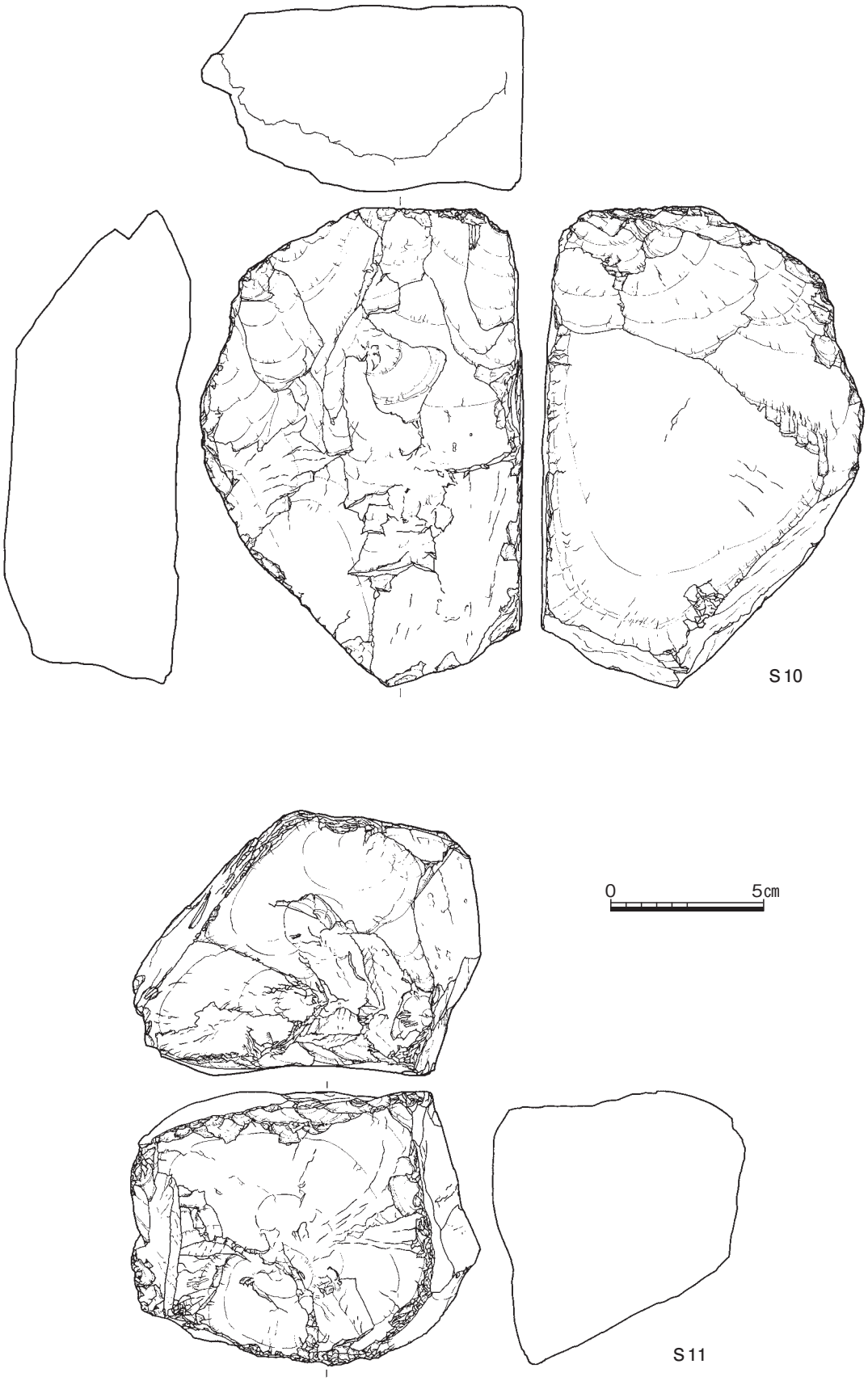
図化しなかった1点は抉りの深い凹基鏃の脚部である。細片であり、風化が著しい状態であった。

S7･**S8**･**S9**は流紋岩製の接合資料である（第33図）。**S7**が石核で､**S8**＋**S9**が接合する剥片である。**S7**は土壙墓2の検出面附近、**S9**は土壙墓2埋土1層から出土していることから、土壙墓2埋葬後の陥没坑に廃棄されたものであろう(1)。**S7**は不定形で礫面や摂理が多く認められる。まず、図のＢ面を打面、Ａ面を作業面として、Ａ面から剥片2枚を剥離した痕跡が認められる。そのうちの2枚目の剥片が**S8**＋**S9**である。**S8**＋**S9**は全体では長さ5.34㎝、幅4.24㎝、厚さ0.95㎝、重さ21.13ｇの剥片に復元できるが、摂理によって2枚に分かれてしまっている。そのため、石器石材として利用されなかったものであろう。なお、剥片**S8**＋**S9**の打点は原礫面である。その後、打面転移を行い、Ａ面を打面､Ｂ面を作業面としてＢ面から横長の剥片を剥離した後､この石核は廃棄されたようである。

S10・**S11**は埋土3層中から出土した流紋岩製の石核および剥片である（第34図）。**S10**は原材から厚さ6㎝程の板状の素材剥片を剥離して石核としたものである。素材剥片の背面側は原礫面であるが、少なくとも4枚の剥片剥離痕が認められ、そのうち1枚は最終剥離面である。腹面側には少なくとも3枚の剥片剥離痕が認められる。**S11**は流紋岩製の剥片である。長さ8.54㎝、幅10.12㎝、厚さ8.57㎝、重さ1.17㎏のサイコロ状を呈する大きな剥片である。3面が原礫面で、他の面には摂理面が認められる。周囲の辺には著しいつぶれが認められ、石核の素材にしようとしたが、摂理が多いこと



第33図　土壙墓２出土の接合資料（Ｓ=2/3）

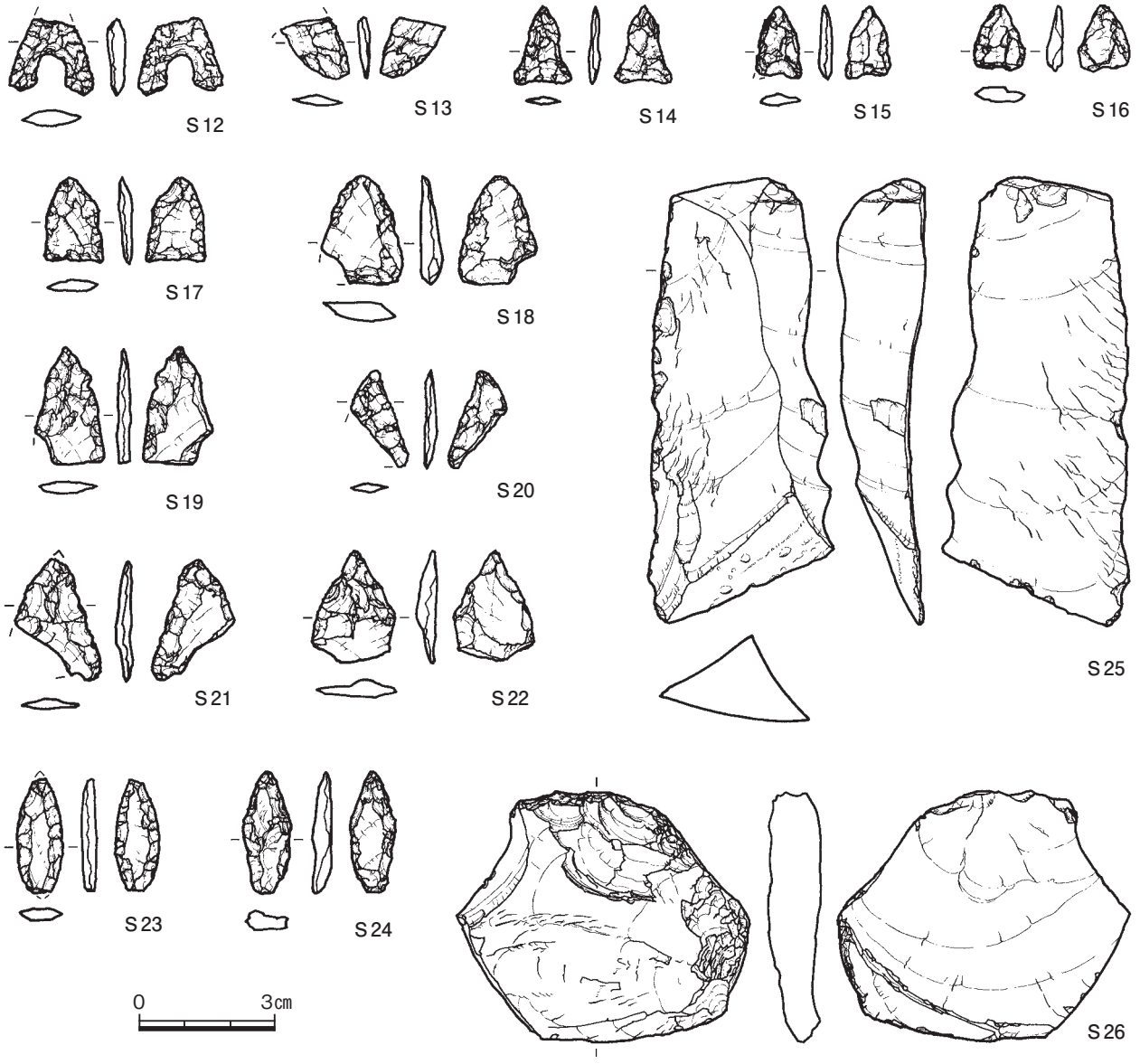


第34図　土壙墓２出土の石核・剥片（S=1/2）

からその意図を放棄されたものと考えられる。

土壙墓埋土以外の包含層等からは、サヌカイト製の石鏃14点、楔形石器3点、流紋岩製の石核1点、花崗岩製等の磨石類4点他が出土している。サヌカイト製の石鏃13点、流紋岩製剥片2点、および磨石類3点を図化した（第35・36図）。

S12～**S16**は凹基鏃である。**S12**・**S13**は抉りが深く、**S14**～**S16**は微妙に内湾している程度の抉りである。**S12**はやや厚手であるが、精緻な調整が施されている。また、先端部が再加工されている。**S14**の側縁部はＳ字状で、基部にかけて広がる形状を呈している。**S15**･**S16**は長さ1.5㎝前後、重さが0.5g前後のやや小型の石鏃である。**S17**・**S18**は平基鏃であるが、**S15**・**S17**は側縁に変換点があり、やや細身の五角形状を呈する。**S18**は厚手で、側縁の調整があまり深くまで及ばないものである。**S19**～**S21**は形式不明の石鏃である。側縁調整が大雑把であり、未製品の可能性もある。**S22**～**S24**は凸基鏃である。**S22**は基部が円弧状である。先端部が少し絞られていることから、未

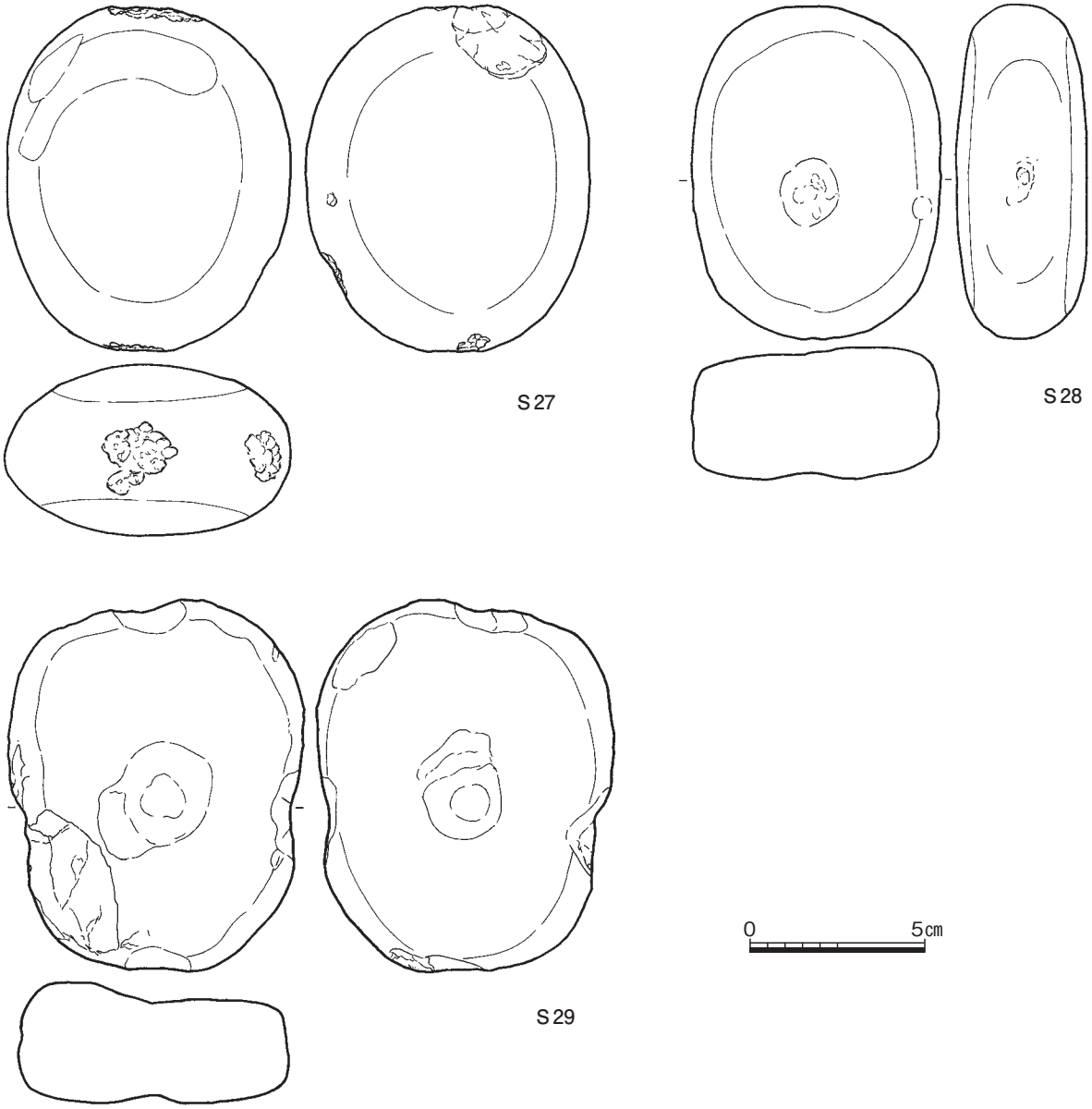


第35図　トレンチ１包含層ほか出土の石器１（Ｓ=2/3）

使用の石錐、あるいは基部が加工されていないことから未製品の可能性もある。**S23・S24**は柳葉形で、側縁の調整があまり深くまで及ばず、素材の面を広く残している。

S25・S26は流紋岩製の剥片である。これらは包含層出土として取り上げたが、出土状況を撮影した写真から推測して土壙墓2の埋土1層に含まれていた可能性が高い。**S25**は長さ10.86㎝、幅4.03㎝、厚さ1.83㎝、重さ57.25ｇと厚手ではあるが、割りにくい流紋岩製にしては珍しい縦長剥片である。背面に3枚の先行剥離痕、先端に原礫面を残している。**S26**は長さ5.50㎝、幅6.37㎝、厚さ1.18㎝、重さ48.94ｇの不定形剥片で、打点側の辺に著しいつぶれが認められる。なお、これら2点の剥片にはカルシウム分の沈着が認められ、遺存していた環境を考える上で示唆的である。

S27～S29は磨石類である。**S27**は包含層出土、**S28・S29**は廃土中から回収された。**S27**は流紋岩製の磨石で、表裏に摩耗した磨面があり、さらに周縁部に敲打痕が3か所ほど認められることから、叩石としても利用されたことがわかる。**S28**は砂岩製の磨石である。表裏及び側面の3面に摩耗

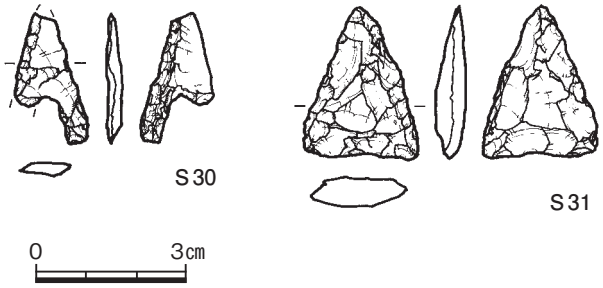


第36図　トレンチ１包含層ほか出土の石器２（S=1/2）

した磨面があり、さらに凹み2か所、敲打痕が4か所認められる。**S29**は花崗岩製の凹石である。被熱のため赤化している。表裏に凹みがあるほか、4辺に縄掛け用のへこみが認められることから錘としても使用されたことがわかる。

トレンチ4（第37図）

耕作土からサヌカイト製の石鏃2点が出土している。**S30**は凹基鏃である。抉りが深い薄手の鏃であるが、脚部以外の調整が粗雑であり、制作中に破損して廃棄されてしまったものかもしれない。**S31**は二等辺三角形状をした厚手の平基鏃である。



第37図　トレンチ４出土の石鏃（S=2/3）

トレンチ6（第38図）

石器製品としては、サヌカイト製の石鏃15点、石鏃未製品4点、石匙2点、スクレイパー3点、楔形石器3点、加工痕のある剥片5点、石核1点、安山岩製等の石錘2点、結晶片岩製の叩石1点が出土している。このうち石鏃15点、石匙2点、スクレイパー1点、石錘2点、叩石1点を図化した。

石鏃はすべて包含層中からの出土である。**S32**～**S36**は凹基鏃である。**S32**は抉りが深く精緻な調整の施されたものである。**S33**～**S36**は抉りが浅く、調整も粗雑なものが多い。**S37**～**S45**は平基鏃である。**S37**は正三角形をした丁寧な作りの鏃である。**S38**･**S39**は長さ1.2㎝程度、重さが0.5gにも満たない小型の石鏃である。**S40**～**S42**はやや細身で、側縁の調整があまり深くまで及ばない。**S43**は先端が円弧状であり、凹基鏃が逆刺を欠失したものの可能性もある。**S44**・**S45**は厚手で、側縁の調整があまり深くまで及ばない粗雑な作りである。**S46**は欠失が大きいが、凹基鏃か平基鏃であろう。

S47・**S48**は石匙である。**S47**はサブトレンチ内から出土した横型の石匙である。つまみ部は尖頭状で、刃部は片面調整である。欠失した部分は尖っていた可能性がある。**S48**は包含層から出土したものである。つまみ部を残し、本体の両側を欠失している。ただ、つまみ部の抉りのうち、片側の調整が明瞭でなく、ノッチなどの石器であった可能性も否定できない。

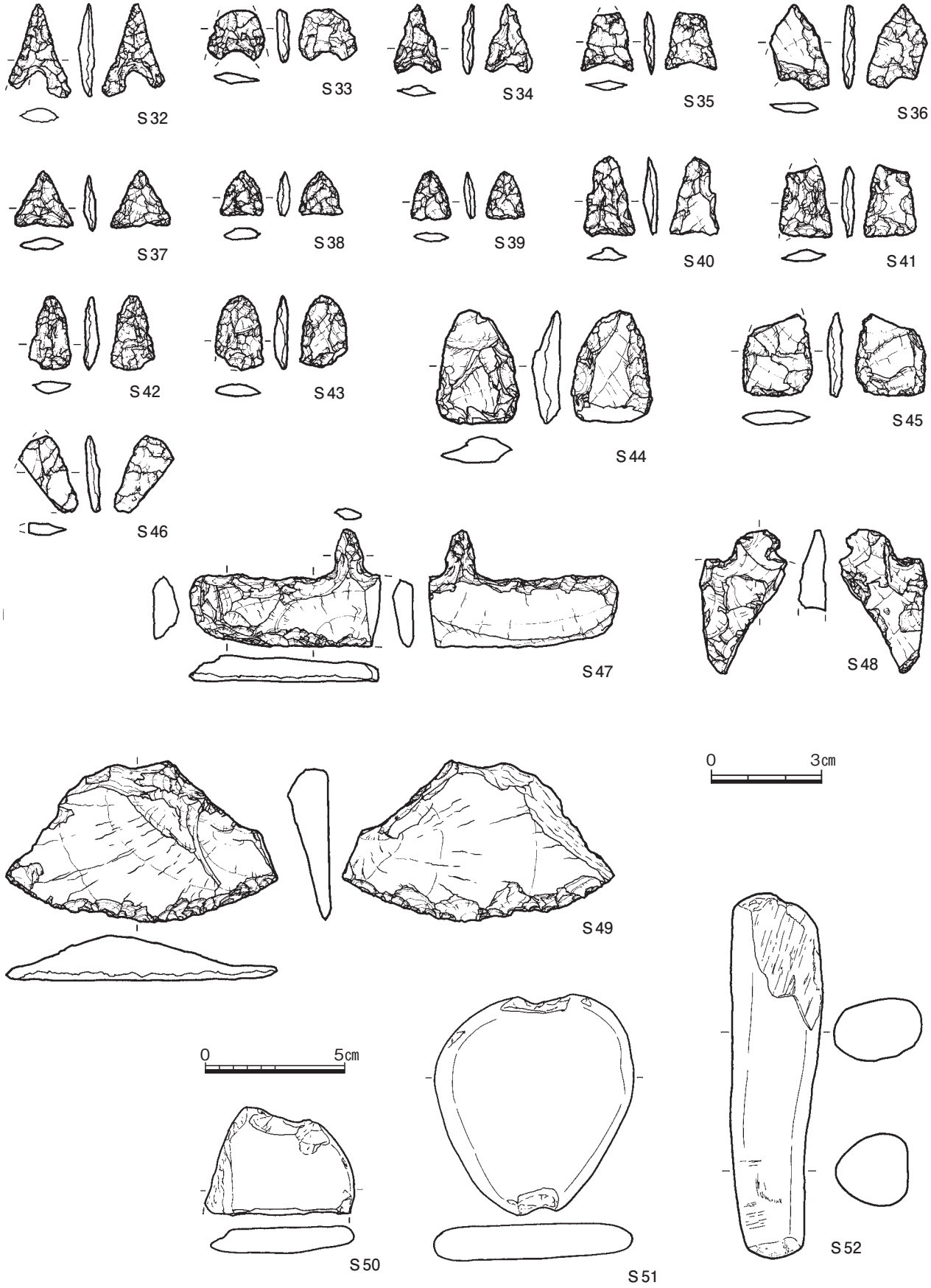
S49はサブトレンチ内から出土したスクレイパーである。原礫面を残す不定形剥片を利用したもので、両面調整の刃部は円弧状を呈する。

S50・**S51**はサブトレンチ内から出土した打欠石錘である。**S50**は安山岩製で欠損しているが、重量29.6gである。**S51**は珪質片岩製のようで、重量116.2gである。

S52は包含層から出土した結晶片岩製叩石である。棒状の石材の上下に敲打痕跡が認められ、また、側面にはかすかに擦痕が観察される。小型石棒等の可能性もあり、今後の検討を要する遺物である。

トレンチ12（第39図）

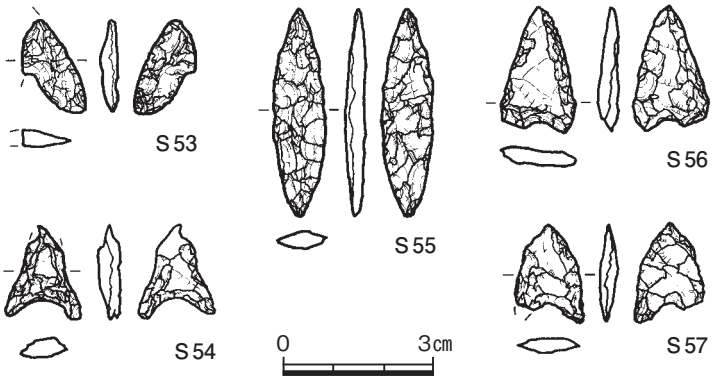
石器製品としては、サヌカイト製の石鏃2点、加工痕のある剥片1点、流紋岩製の石核1点が出土している。このうち石鏃2点を図化した。**S53**は包含層から出土した凹基鏃である。脚部の破片であるが、薄手で抉りが深く、精緻な加工が行われている。**S54**はサブトレンチ内から出土した凹基鏃で、先端を欠損している。厚手で、抉りはあまり深くないが、逆刺の鋭い凹基鏃である。



第38図　トレンチ６出土の石器（S=2/3・1/2）

トレンチ13（第39図）

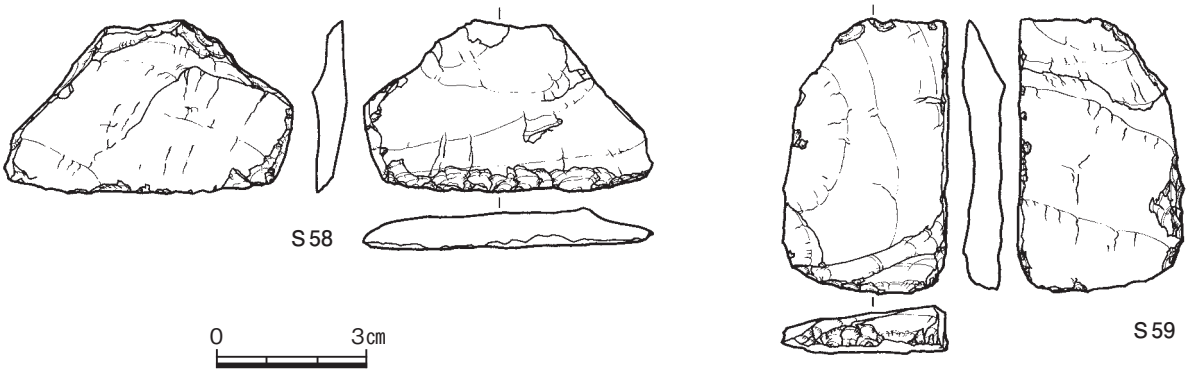
石器製品としては、包含層からサヌカイト製の石鏃2点、加工痕のある剥片1点、使用痕のある剥片1点が出土している。このうち石鏃2点を図化した。**S55**は薄い柳葉形の丁寧な作りの凸基鏃である。**S56**は抉りの浅い凹基鏃である。二等辺三角形状を呈し、側縁調整は浅く、広い素材面を残している。



第39図　トレンチ12～14出土の石鏃（S=2/3）

トレンチ14（第39図）

石器製品としては、耕作土からサヌカイト製の石鏃1点が出土している。**S57**は五角形状を呈する凹基鏃である。抉りそれほど深くないが、逆刺は鋭い。



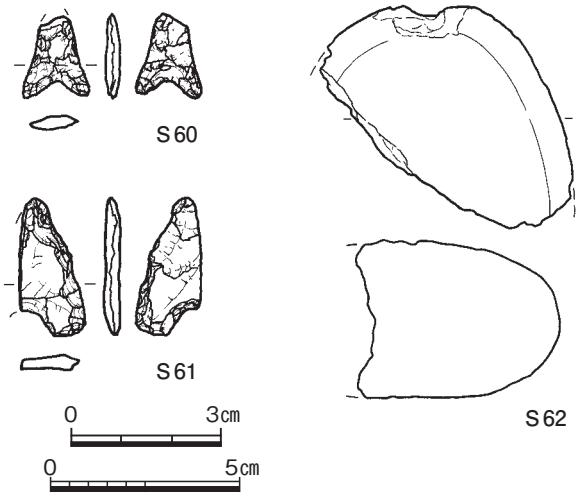
第40図　トレンチ15出土の石器（S=2/3）

トレンチ15（第40図）

石器製品としては、サヌカイト製と流紋岩製のスクレイパー各1点が包含層から出土している。**S58**はサヌカイト製のスクレイパーである。やや横長の剥片を利用したもので、直線的な刃部は腹面側に加工を施している。**S59**は流紋岩製の不定形な剥片を利用したスクレイパーである。片面調整の角度の急な刃部加工が施されている。

トレンチ21（第41図）

石器製品としては、サヌカイト製の石鏃2点、加工痕のある剥片1点、流紋岩製の石錘1点が出土している。このうち石鏃2点、石錘1点を図化した。**S60**･**S61**はサヌカイト製の凹基鏃である。**S60**は包含層から出土したもので、抉りが浅く、逆刺はやや外反する。**S61**は土壙墓4の埋土から出土したものである。抉りはあまり深くなく、側縁調整は浅く、素材面を広く残している。



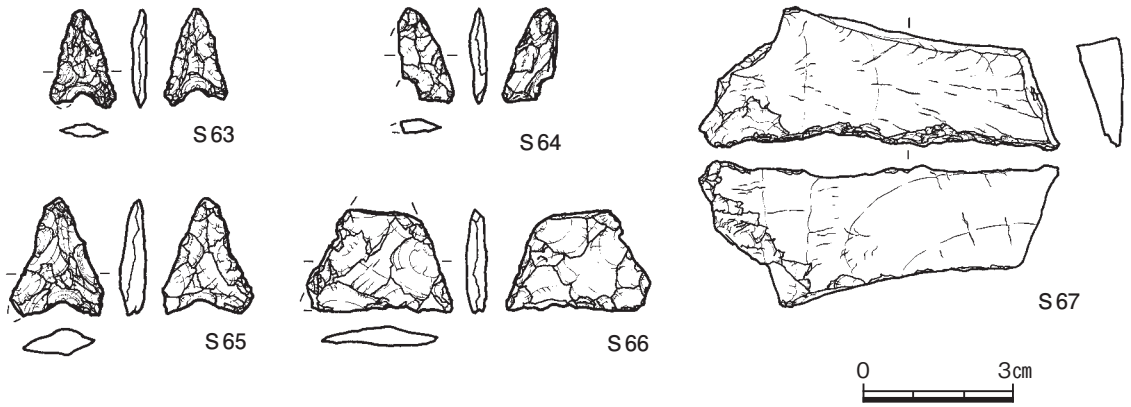
第41図　トレンチ21出土の石器（S=2/3・1/2）

S62は凝灰岩製の打欠石錘である。厚手のものであるが、欠損が著しい。

表面採集等の石器（第42図）

サヌカイト製の石鏃4点、スクレイパー１点を図化した。他に姫島産黒曜石の剥片1点も採集している。**S63**はほっそりした形状の抉りの浅い凹基鏃で、整理中に出土トレンチがわからなくなったものである。**S64**～**S66**はトレンチ4～トレンチ6を設定した畑地で採集されたものである。**S64**・**S66**は凹基鏃で、**S64**はやや抉りが深く、側縁調整が丁寧である。**S66**は抉りが浅く、側縁調整がやや粗雑である。**S66**は正三角形状を呈するやや大きめの鏃と推定されるが、つまみ部を欠失した小型の石匙の可能性もある。

S67は岡山県が発掘調査を行ったトレンチ10・23と同じ敷地で採集されたスクレイパーである。刃部は急な角度の片面調整で、やや内湾している。



第42図　表面採集ほかの石器（S=2/3）

註

（１）**S8**は包含層出土として取り上げているが、土壙墓2が検出される以前の日付であることから、土壙墓2の検出面附近を掘り下げ中に出土したものである可能性がある。

第４章　調査の成果

遺跡の範囲と消長

中津貝塚確認調査は、遺跡保存のための基礎資料を得ることを目的として、平成30年度から令和2年度の3年間にわたり倉敷市教育委員会が実施した。調査の結果、縄文時代後期初頭の中津式の時期を中心に形成された貝層および縄文時代晩期前半期を含む時期に築かれた土壙墓群の範囲を把握することができた（第43図）。

縄文貝層は新池の南西角から西120ｍくらいまでの範囲で確認され、南向きの緩斜面に貝層が残されている。貝塚の南縁は、落差1ｍ以上の崖状となっており、この部分は、南西から流れる河川（現在の屋守川を拡大した谷川）によって削られたものと考えられる。また、北端について、**T1**では貝層は確認されなかったが、埋葬人骨の保存状態が良好な理由として貝層土壌が影響していることが考えられることから、この地点まで貝層が広がっていたと推測される。

第43図　中津貝塚の貝層と土壙墓群の範囲
（S=1/5,000）

土壙墓群の分布については、過去の出土歴から**T1**から新池までの東西約70ｍの範囲が想定される。**T1**土壙墓1、2の所属時期については、遺構埋土に含まれる土器から縄文晩期前半の可能性を考え得るが、埋葬人骨の年代測定および自然人類学的分析の結果を待って判断すべきである。

また、遺跡全体でみると、中世以降の土地の開発により上層部は大きく破壊や削平を受けており、深い場所に位置する遺構や貝層だけが残っている状況と理解される。

中津貝塚で遺跡が継続される期間については、1965年に高橋 護氏が示している[1]。出土土器の有無によって、人間が生活していた期間（土器型式を時間軸におく）を図表で提示したものであるが、実線で示される存続期間は、早期押型文期、中期初頭～晩期中葉である。存在が不明確な前期末、晩期中葉の期間は破線で示されている。これについては今回の調査結果でも追認されるが、各時期の動静を概観した、いわゆる「遺跡の消長」についてあらためて触れてみる。中津貝塚の場合、貝塚が営まれる時期や墓地ができる時期があるように、生業などの生活のあり方や遺跡における土地利用の仕方は、各時期によって異なることは明かである。また、これまでに住居跡も発見されておらず、居住

域については依然として不明である。遺跡に残されているのは、当時の活動の一部分に過ぎないことを含み置いて述べることにする。

中津貝塚で出土した最も古い遺物は縄文時代草創期の有茎尖頭器である。Ｔ３で検出された泥炭層を資料として放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代草創期に該当する年代値が得られ、その頃までには安定した地表面が存在していたことが推測されている（付論）。今回の調査では、Ｔ１～Ｔ５、Ｔ７～Ｔ９、Ｔ14、Ｔ18で泥炭層の存在が確認されており、遺跡の下層を広く覆っていることが確かめられた。この分析結果を受け、周辺地形の成り立ちを解釈してみると、泥炭層の形成前には、遺跡地あたりは低湿な環境であった。大雨のたびに洪水が起こり、背後の丘陵裾に堆積していた風化土が流れ出し、一帯に再堆積。ゆっくりと扇状地が形成される。→河川の流路が定まり（主に南側の谷筋）、乾燥した土地へと変わっていく。→遺跡の土台となる台地が生まれる。といった変遷がたどれるのではなかろうか。その後、海進により瀬戸内海が誕生し、貝塚の東側も入江になる。さらには、干潟が形成されるといった海況の変化が人々の活動に大きな影響を与えたのである。縄文時代草創期の遺物は今のところわずかな数だけであり、狩場として利用されただけかもしれないが、早期押型文期になると、ある程度安定的に活動が営まれたと推測される。

早期押型文土器はT3、T12、T14、T21から少量ではあるが出土しており、広い範囲で認められる。前期初頭から中期初頭の遺物は確認されなかった。「過去の出土資料」[2]では、前期彦崎ＺＩ式や中期船元Ｉ式の土器がわずかにあり、希薄ながら遺跡が存在することを示す。中期船元Ⅲ式はT1、T12、T13、T21で小片が出土しており、この時期からまた利用されはじめたことがうかがえる。里木Ⅱ・Ⅲ式はT12で出土し、中期末の土器はT6のサブトレンチと包含層から出土した。後期初頭の中津式については、出土土器のほとんどがT6の貝層に由来すると考えられ、貝塚の中心的な時期が中津式の古段階から新段階の期間であることが明らかとなった。貝層の上面は破壊を受けているため、貝塚がいつまで営まれたかは不明である。しかし、「過去の出土資料」の中から破片が大きく、保存状態が良好なものを選んで貝層出土の可能性のある資料として加えるならば、福田ＫⅡ式（古・新）の時期までは存続したと推測される。後期中葉の津雲Ａ式は貝塚周辺で少量認められる程度で、この地での活動が低調になったことを示すのであろう。彦崎ＫＩ式は、Ｔ21の土壙墓4埋土上層や包含層に比較的多く含まれており、この時期の遺構が残されているかもしれない。彦崎ＫⅡ式、福田ＫⅢ式について確実な資料は認められなかったが、出土例がある。晩期前半期については、T1で検出された土壙墓2基がこの時期に属する可能性があり、低台地の中でも高い場所に墓域が形成されたことが確認された。晩期後半期は、わずか1片の磨耗した資料であったが、突帯文土器が出土した。

以上が今回実施した確認調査の成果である。縄文貝塚と土壙墓群は上層を破壊されながらも元位置で保存されており、その他の遺構も深い場所であれば残存していることをあらためて強調したい。

なお、T1の土壙墓1、2から出土した1号人骨、2号人骨の自然科学分析およびT1、T6などで出土した動物遺存体の分析に関わる報告は諸般の事情により別の機会に譲ることにする。

石器について

今回の調査は範囲確認のためのトレンチ調査であることから、出土した石器を用いて、石器組成や

遺跡内における空間的出土状況の検討などを行うには十分なものではない。ここでは、整理作業等の中で気づいたことを若干述べるにとどめたい。

調査によって出土した石器製品の中で最も数が多いのは石鏃で形態も多様であるが、遺構との関係から時期を特定できるものはない。今回の調査で出土した土器をみると、縄文時代早期及び中期末～晩期にかけてのものであり、これらの時期に属するものとみるのが妥当であろうが、形態的な特徴からは縄文時代前期に属すると考えられるものも含まれている。**T1**の**S12**、**T6**の**S32**、**T12**の**S53**は抉りが深く、調整も丁寧であり、縄文時代早期～前期のものである可能性がある。特に**S53**は脚のみの破片ではあるが、前期磯の森式期によくみられる形態である。また、**T1**の**S23**・**S24**、**T13**の**S55**も柳葉形を呈し、中部瀬戸内地域においては前期によく見られるものである。前期の土器は「過去の出土資料」(2)にわずかながら含まれている。石器においても、縄文時代前期に希薄ながら遺跡周辺で人々が活動していたことをうかがえる資料である。

土壙墓2の3層中から出土した遺物については、一連の埋葬行為の中で考えなければならない問題であるが、含まれていた獣骨等の整理が未了であることから今後の課題としたい。石器関係に限れば、玉島産流紋岩製石核・剥片（**S10**・**S11**）の存在が目につく。各トレンチから出土した石器石材の総重量は、サヌカイト1,739.87g、玉島産流紋岩4,260.77g、姫島産黒曜石3.16gとなる。**S10**・**S11**の2点で重量2,545.00gとサヌカイトを軽く凌駕し、玉島産流紋岩の総重量においてもその60%を占めている。**S10**・**S11**の評価は、何らかの意図のもとに置かれたのか、他の礫と同じ扱いであったのかによって異なってくる。前者であったとすれば、被葬者が石器製作等に係わった可能性が出てくる。さらには、中津貝塚は玉島産流紋岩の産地から直線距離で約2.2㎞ほどしか離れておらず、中津貝塚を形成した集団が玉島産流紋岩の流通に一定程度関与していたことも想定可能である(3)。土壙墓2への玉島産流紋岩製石核・剥片の埋納はそうした背景を持っていた可能性も視野に入れて考える必要があるだろう。

註

（１）高橋 護「縄文時代における集落分布について」『考古学研究』第12巻第1号 1965

（２）a　吉備考古学会の宗澤節雄氏が昭和８年に発掘した資料のうち、岡山県立博物館が寄託を受けた資料。および倉敷市が寄贈を受けた資料。岡山県立博物館にある資料は以下の文献に掲載されている。
佐藤寛介「倉敷市中津貝塚出土の縄文土器」『研究報告』23・24号　岡山県立博物館 2004
b　若林コレクションの中津貝塚出土土器。吉備考古学会の会員であった若林 喬氏が収集し、1977年に倉敷市が寄贈を受けた資料。その中には、水原岩太郎『岡山県浅口郡黒崎村中津貝塚発見縄文式土器紋様』1935に掲載された土器6点も含まれる。資料収集の経緯については不明である。

（３）玉島産の流紋岩については下記文献で一度紹介している。
藤原好二「4 倉敷市玉島に産出する流紋岩の流通」『朝原寺2 溝落遺跡』倉敷埋蔵文化財センター発掘調査報告第15集 2013

付 論

中津貝塚土壌サンプルの自然化学分析

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze

1．はじめに

中津貝塚より採取された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

年代測定試料は、トレンチ3の東壁断面から切り出され、タッパウェアーに保存されていた不撹乱の堆積物ブロックサンプルから採取した（図1）。年代測定試料を写真1に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

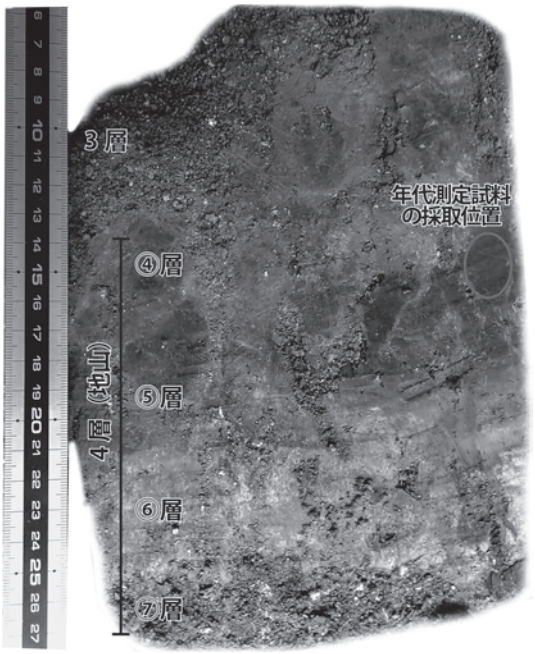


図１　不撹乱ブロックサンプル断面

3．結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、図2に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表１　測定資料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-40247	試料 .No.1 位置：トレンチ３東壁断面 層位：⑤層	種類：土壌 状態：dry	湿式篩分：106 μ m 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

表２　放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	δ 13C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-40247 試料 .No.1	− 25.72 ± 0.25	12895 ± 36	12895 ± 35	13535-13328 cal BC（68.2%）	13649-13274 cal BC（95.4%）

写真１　年代測定資料

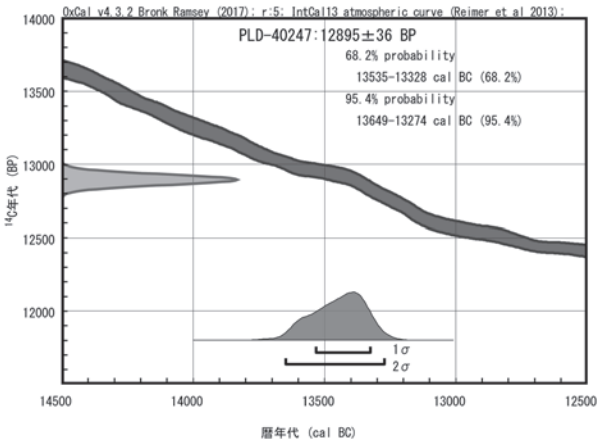


図２　暦年校正結果

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期として Libbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

年代測定試料は、トレンチ３東壁断面の基本層序の地山である４層を構成する堆積層のうち、黒褐色粘土層である⑤層の腐植から採取した。（図1）。この腐植からは、12895±35 BP、２σ暦年代範囲で13649-13274 cal BCの年代値が得られた。この年代値は、小林（2017）を参照すると、縄文時代草創期に相当する。

⑤層は、塊状無層理をなし、未分解の植物遺体を含まないため、有機物の分解が進行する乾燥した好気的な土壌環境下で堆積したと考えられる。また、不撹乱の堆積物ブロックサンプルの断面観察によると、⑤層は直下の⑥層との層理面が不明瞭で、土色の黒みが漸移的に薄くなっていくような様相が観察される。このような特徴から、⑤層に含まれる腐植は土壌発達によって生成されたと解釈される。そして、⑤層の腐植が周囲の古い地層に由来する再堆積物ではなく、土壌発達に伴って生成した原地性の高い腐植である場合には、年代値が示す縄文時代草創期に、トレンチ3付近で古土壌が形成されるような安定した地表面が存在していたと考えられる。この⑤層は、縄文時代後晩期の遺構や包

含層が形成されている層から比較的近い深度に堆積している。よって、トレンチ3付近では、縄文時代草創期以降に活発な堆積作用がなかったとみなされる。⑤層の下位は、腐植を含まない砕屑物主体と考えられる灰黄～黄褐色の泥質堆積物や、場所によって砂質堆積物が厚く累重するようである。したがって、⑤層の下位では、活発な堆積作用が存在した可能性がある。

地山に認定される層準の、以上のような堆積状況から、トレンチ3付近では、⑤層の堆積段階になると活発な堆積作用が終息傾向を示し、地表面が安定して土壌が形成される時期が存在したと推定される。⑤層の上位に堆積する縄文時代後晩期の遺構・遺物の検出層準までは、堆積層の被覆が顕著ではない。このような堆積状況から、⑤層の腐植が示す縄文時代草創期頃には、トレンチ3付近の地形面ですでに離水傾向が強まっていた状況が推測される。離水傾向が強まる要因としては、付近の河川による下刻が強まり段丘化したなどの地形変化が想定される。地山層準の堆積作用や年代、さらに地形変化については、今後さらに検討が必要と認識される。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

小林謙一（2017）縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－. 263p, 同成社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C 年代編集委員会編「日本先史時代の14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M. and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869-1887.

出土遺物観察表

1．土器観察表

番号	出土位置	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色　調（外面／内面）
1	T1 土壙墓 1	鉢 波状口縁	晩期	口縁部内側に沈線	ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色
2	T1 土壙墓 1	深鉢	晩期	1 ～ 2 ㎜の砂粒多し	二枚貝条痕	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
3	T1 土壙墓 2	鉢 波状口縁	晩期	口縁部外側に沈線	ナデ	ミガキ	褐灰色 にぶい黄褐色
4	T1 土壙墓 2	鉢	晩期	口縁部内側に沈線	ナデ	条痕のちナデ	黒褐色 黄灰色
5	T1 土壙墓 2	深鉢	後期中葉？	1 ㎜以下の砂粒多し	ナデ	ミガキ	灰黄色 黒褐色
6	T1 土壙墓 2	深鉢	晩期	1 ㎜以下の橙色砂粒多し	巻貝条痕	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色
7	T1 土壙墓 2	深鉢	晩期	1 ㎜以下の橙色砂粒多し	二枚貝条痕	ナデ	褐灰色 黒褐色
8	T1 土壙墓 2	底部		1 ㎜以下の砂粒多し	ケズリ	ナデ	褐灰色 黒褐色
9	T1 土壙墓 2	底部		1 ～ 2 ㎜の砂粒多し	ケズリ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色～にぶい黄橙色
10	T1 土壙墓 2	底部		1 ㎜以下の砂粒多し	ケズリ	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色～橙色
11	T1 包含層	深鉢	後期中葉	口縁部外面が肥厚し、RL 縄文を施文	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色
12	T1 包含層	深鉢	後期中葉	口縁部外面が肥厚	ナデ	ナデ	黄灰色 褐灰色
13	T1 包含層	深鉢	後期中葉	口縁部外面が肥厚・1 ㎜程度の砂粒多し	条痕	ナデ	黒褐色 黒褐色
14	T1 包含層	鉢	晩期	口縁端内側が肥厚・外面肩部に楕円形の押圧	口縁部ナデ 胴部条痕	ミガキ	褐灰色 黒褐色
15	T1 包含層	鉢	晩期	口縁端内側に沈線	ミガキ	ミガキ	褐灰色 黒褐色
16	T1 包含層	深鉢	晩期	口縁部外側に段をもち、1 条の沈線が巡る	ナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色
17	T1 包含層	深鉢	晩期	外面に粘土の継ぎ目が残る・口唇部に刻目	粗いナデ	ナデ	橙色 橙色
18	T21 土壙墓 2 検出面	深鉢	後期中葉	口縁部外面が肥厚	巻貝条痕 フトヘナタリ？	巻貝条痕のちナデ	赤褐色 にぶい黄橙色
19	T21 土壙墓 2 検出面	深鉢	後期中葉？		条痕のちナデ	条痕のちナデ	褐灰色 にぶい橙色
20	T21 土壙墓 2 検出面	深鉢	晩期？	1 ～ 4 ㎜の白色砂粒	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	黒褐色 灰黄褐色
21	T21 土壙墓 2 埋土	鉢	晩期？	1 ㎜以下の白色砂粒、炭粒を含む	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい褐色 明赤褐色
22	T21 包含層	深鉢	早期	内外面に楕円文の押型文・口唇部に斜位の刻目			褐灰色 にぶい黄褐色
23	T21 包含層	深鉢	早期	口縁端を外側に折り曲げ、斜位に刻目を付ける	指押さえ	指押さえ	橙色 にぶい黄橙色
24	T21 包含層	深鉢	船元Ⅲ式	半裁竹管による平行線文	ナデ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色
25	T21 包含層	深鉢	船元Ⅲ式	縄文地に半裁竹管による平行線文	ナデ	ナデ	黒褐色 にぶい橙色
26	T21 包含層	深鉢	中期末？	磨消縄文（LR）	二枚貝？条痕のちナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色
27	T21 包含層	深鉢	後期中葉	磨消縄文（RL）	巻貝条痕のちナデ	ナデ	黄灰色 にぶい黄橙色
28	T21 包含層	深鉢	後期中葉	口縁部外面が肥厚し、LR 縄文を施文	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色
29	T21 包含層	深鉢	晩期	口縁端面に開Ｖ字刻み	二枚貝条痕	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
30	T21 包含層	深鉢	後期？	無文	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙色 黄灰色
31	T21 包含層	鉢	後期？	無文	ミガキ	ナデ？	にぶい黄橙色 灰黄褐色
32	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁		幅 3 ㎜の沈線文・口唇部に刻目	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色

出土遺物観察表

番号	出土位置	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色　調（外面／内面）
33	T6 混土貝層上面	鉢	中津式	幅２㎜の沈線文	ミガキ	ミガキ	明黄褐色～灰黄褐色 にぶい橙色
34	T6 混土貝層上面	鉢	中津式	幅２㎜の沈線文	ミガキ	ミガキ	明黄褐色～灰黄褐色 にぶい橙色
35	T6 混土貝層上面	深鉢	中津式	磨消縄文（RL）・沈線が口唇部に及ぶ	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色～灰褐色 にぶい黄橙色
36	T6 混土貝層上面	深鉢	中津式	磨消縄文（LR）・口縁部下端に段をもつ	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色
37	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁	中津式	磨消縄文（LR）・口縁部が肥厚	ナデ	ナデ	橙色～灰褐色 明黄褐色
38	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁	中津式	磨消縄文（RL）・沈線が口唇部に及ぶ	巻貝条痕のちナデ	ナデ	褐灰色 にぶい橙色
39	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁	中津式	磨消縄文（LR）	ナデ	ナデ	浅黄色 浅黄色
40	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁	中津式	磨消縄文（LR）・波頂部に渦巻文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	灰黄色 にぶい黄橙色
41	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁	中津式	磨消縄文（LR）	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色～褐灰色 にぶい黄橙色
42	T6 混土貝層上面	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕 フトヘナタリ？	巻貝条痕	にぶい褐色 褐灰色～黒褐色
43	T6 混土貝層上面	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色
44	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁	中津式	無文	巻貝条痕 カワアイ	巻貝条痕のちナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
45	T6 混土貝層上面	深鉢 波状口縁	中津式	無文・口縁部に穿孔	巻貝条痕 フトヘナタリ？	巻貝条痕のちナデ	灰黄色～褐灰色 にぶい黄橙色
46	T6 混土貝層上面	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	橙色～褐灰色 にぶい褐色～褐灰色
47	T6 混土貝層上面	深鉢	中津式	無文	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
48	T6 混土貝層上面	鉢 波状口縁	中津式	無文・波頂部口唇に刻目	巻貝条痕のちミガキ	ミガキ	にぶい褐色 にぶい橙色
49	T6 混土貝層上面	鉢	中津式	無文	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	褐灰色 褐灰色
50	T6 サブトレンチ	深鉢 波状口縁	中津式	幅４㎜の沈線文	巻貝条痕のちナデ	ナデ	褐灰色 にぶい黄橙色
51	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	幅３～４㎜の沈線文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	橙色～褐灰色 黒褐色
52	T6 サブトレンチ	深鉢 波状口縁	中津式	波頂部に擬縄文	巻貝条痕のちナデ	ナデ	にぶい黄橙色～灰褐色 にぶい黄橙色～灰褐色
53	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	磨消縄文（RL）・口縁部に渦巻文	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
54	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	磨消縄文（RL）・口縁部に渦巻文	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色
55	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	磨消縄文（RL）	巻貝条痕のちナデ	ナデ	灰褐色 褐灰色
56	T6 サブトレンチ	鉢 波状口縁	中津式	沈線間に擬縄文・口縁部に渦巻文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕	にぶい橙色～灰褐色 黒褐色
57	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	沈線間に擬縄文	巻貝条痕のちナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色
58	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	黄灰色 灰黄色
59	T6 サブトレンチ	深鉢 波状口縁	中津式	無文	巻貝条痕 カワアイ	巻貝条痕のちナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
60	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
61	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕 フトヘナタリ？	巻貝条痕のちナデ	にぶい褐色 褐灰色
62	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	褐灰色 褐灰色
63	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕 カワアイ	巻貝条痕のちナデ	にぶい黄橙色～褐灰色 褐灰色
64	T6 サブトレンチ	深鉢 波状口縁	中津式	無文・口縁部に穿孔	巻貝条痕 フトヘナタリ？	二枚貝条痕	褐灰色 黄灰色
65	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	灰黄色 灰黄色
66	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	黄灰色 黄灰色
67	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	にぶい褐色 褐灰色

番号	出土位置	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色 調（外面／内面）
68	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文・口唇部に円形刺突列	巻貝条痕 フトヘナタリ？	巻貝条痕のちナデ	にぶい黄橙色～褐灰色 にぶい黄橙色
69	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文・口唇部に円形刺突列	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	にぶい橙色～にぶい褐色 褐灰色
70	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	巻貝条痕	巻貝条痕のちナデ	灰褐色 灰黄褐色
71	T6 サブトレンチ	深鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	黄灰色 灰黄色
72	T6 サブトレンチ	鉢 波状口縁	中津式	無文・波頂部口唇に刻目	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	灰黄褐色～褐灰色 灰黄色
73	T6 サブトレンチ	鉢	中津式	無文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色
74	T6 サブトレンチ	鉢	中津式	無文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	灰黄褐色 褐灰色
75	T6 サブトレンチ	鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	巻貝条痕のちナデ	ナデ	褐灰色 にぶい橙色
76	T6 サブトレンチ	底部			巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
77	T6 サブトレンチ	底部				ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色
78	T6 包含層	深鉢	中期？	幅６㎜の沈線文	磨耗	磨耗	灰黄色 灰黄色
79	T6 包含層	深鉢	中期？	幅２㎜の沈線文	条痕のちナデ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色
80	T6 包含層	深鉢 波状口縁	中期末	幅３㎜の沈線文	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
81	T6 包含層	深鉢	中期末	幅５㎜の沈線文と円形刺突文	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色
82	T6 包含層	深鉢	中期末	磨消縄文（LR）・刺突文	ナデ	ナデ	黒褐色 黄褐色
83	T6 包含層	深鉢 波状口縁	中期末	磨消縄文（LR）	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色～褐灰色 にぶい黄橙色～褐灰色
84	T6 包含層	深鉢	中期末？	磨消縄文（LR）	巻貝条痕のちナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい褐色
85	T6 サブトレンチ	深鉢	中期末	磨消縄文（RL）・縄文が口唇部に及ぶ	ナデ	ナデ	黒褐色～灰黄褐色 にぶい黄橙色
86	T6 包含層	深鉢	中期末？	磨消縄文（LR）	巻貝条痕のちナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい褐色
87	T6 包含層	深鉢 波状口縁	中津式	幅３㎜の沈線文・口唇部に刻目	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
88	T6 包含層	深鉢	中津式	幅５㎜の沈線文	巻貝条痕のちナデ	ナデ	にぶい黄橙色～灰黄褐色 にぶい黄橙色
89	T6 包含層	深鉢	中津式	磨消縄文（LR）	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色
90	T6 包含層	深鉢 波状口縁	中津式	磨消縄文（RL）・沈線が口唇部に及ぶ	ミガキ	ミガキ	黒褐色 褐灰色
91	T6 包含層	深鉢	中津式	磨消縄文（RL）	ミガキ	ミガキ	黒褐色 褐灰色
92	T6 包含層	深鉢	中津式	磨消縄文（RL）・渦巻文	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色～褐灰色 褐灰色
93	T6 包含層	深鉢	中津式	磨消縄文（LR）	巻貝条痕のちナデ	ナデ	褐灰色 にぶい黄橙色
94	T6 包含層	深鉢 波状口縁	中津式	磨消縄文（LR）	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい黄橙色
95	T6 包含層	深鉢	中津式	磨消縄文（LLR?）・口縁部に渦巻文、頸部に隆帯	ナデ	ナデ	にぶい橙色 黒褐色
96	T6 包含層	鉢	中津式	磨消縄文（RL）	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色
97	T6 包含層	深鉢	中津式	沈線間に擬縄文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色
98	T6 包含層	深鉢	中津式	沈線間に擬縄文	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄褐色
99	T6 包含層	深鉢	中津式	沈線間に擬縄文	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄褐色
100	T6 包含層	深鉢	中津式	無文	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色
101	T6 包含層	深鉢	中津式	無文	条痕のちナデ	条痕のちナデ	褐灰色 褐灰色
102	T6 包含層	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕 フトヘナタリ？	巻貝条痕のちナデ	灰褐色 褐灰色

出土遺物観察表

番号	出土位置	器種・形態	時期／分類	文様等の特徴	外面調整	内面調整	色　調（外面／内面）
103	T6 包含層	深鉢	中津式	無文	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	褐灰色 褐灰色
104	T6 包含層	深鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	巻貝条痕のちナデ	巻貝条痕のちナデ	灰黄色～褐灰色 褐灰色
105	T6 包含層	深鉢	中津式	無文・口唇部に刻目	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色
106	T6 包含層	鉢	中津式	無文	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
107	T6 包含層	深鉢	晩期	口唇部に刻目・口縁部に刻み目突帯文	不明	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
108	T6 包含層	深鉢	晩期	口縁端の内外面に凹線・胎土は均質で精良	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色
109	T6 包含層	深鉢	晩期	口縁端の外面に沈線・内面に凹線・胎土は均質で精良	ナデ	ナデ	灰黄色～灰色 灰色
110	T6 包含層	底部			ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい赤褐色
111	T6 包含層	底部			ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色
112	T6 包含層	底部			二枚貝条痕のちナデ	二枚貝条痕	灰黄褐色 にぶい黄褐色
113	T6 包含層	底部			ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい褐色
114	T6 包含層	多孔底土器	縄文時代	孔の径３㎜・内面に付着物	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色
115	T3 包含層	深鉢	早期	外面に山形文の押型文		ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
116	T3 包含層	深鉢	早期	無文・口縁部外面に隆帯		ナデ	黒褐色 灰黄褐色
117	T3 包含層	土師器甕	古墳時代		口縁部ナデ	口縁部ナデ	橙色 黒褐色
118	T3 包含層	製塩土器	奈良・平安時代	薄手、無文	指押さえ	ナデ	にぶい橙色 灰褐色
119	T5 攪乱坑	深鉢底部	晩期		摩耗	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色
120	T12 攪乱坑	深鉢	船元Ⅲ式	RL 縄文地に半裁竹管による平行線文		ナデ	にぶい橙色 黄灰色
121	T12 攪乱坑	深鉢	中期	RL 縄文		ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色
122	T12 攪乱坑	深鉢	中期	RL 縄文		ナデ	褐灰色 褐灰色
123	T12 攪乱坑	深鉢	船元Ⅲ式	半裁竹管による波状文	条痕	ナデ	褐灰色 灰黄褐色
124	T12 攪乱坑	深鉢	里木Ⅱ・Ⅲ式	撚糸文（R）		ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色
125	T12 攪乱坑	深鉢	晩期	頸部に縦位爪形文・肩部に横位爪形文	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色
126	T12 攪乱坑	深鉢	晩期	肩部に横位爪形文	胴部ケズリ	ナデ	褐灰色 褐灰色

2．石器組成表（サヌカイト）

トレンチ・層位等 ＼ 器種		石鏃	石鏃未製品	石匙	スクレイパー	楔形石器	加工痕剥片	使用痕剥片	石核	剥片	砕片	計	総重量(g)
T 1	土壙墓１埋土	1								12	215	228	18.30
	土壙墓２埋土	6			1	3	2			104	975	1091	89.92
	包含層	14				3				141		158	372.12
T 3	包含層									2		2	6.71
T 4	耕作土	2										2	4.46
	包含層									1		1	2.01
T 5	撹乱坑									5		5	20.87
T 6	包含層	15	4	1	2	3	3		1	144		173	608.76
	サブトレンチ			1	1		1			10		13	296.35
	廃土中						1			7		8	19.62
T12	耕作土									1		1	1.99
	撹乱坑									13		13	18.16
	包含層	2					1			14		17	37.23
T13	包含層	2					1	1		8		12	29.41
T14	耕作土	1										1	0.80
T15	包含層				1							1	14.52
T21	土壙墓４埋土	1					1			2		4	19.38
	包含層	1								6		7	41.24
表採ほか		4			1					12		17	138.02
計		49	4	2	6	9	10	1	1	482	1190	1754	1739.87

3．石器組成表（その他の石材）（石錘・磨石類を除く。）

トレンチ・層位等 ＼ 石材・器種		流紋岩					姫島産黒曜石		
		石核	スクレイパー	剥片	砕片	総重量(g)	剥片	砕片	総重量(g)
T 1	土壙墓１埋土			1	6	0.30			
	土壙墓２埋土	3		40	108	3219.74		1	0.06
	包含層	1		18		202.81			
	廃土中			1		2.53			
T 2	包含層	1				198.00			
T 6	包含層			28		250.91			
	サブトレンチ			1		43.54			
	廃土中			5		24.99			
T12	カク乱坑			1		0.47			
	柱穴１			1		13.54			
	包含層	1		3		24.87			
T15	包含層		1	2		36.98			
T21	包含層			2		186.89			
	土壙墓４埋土			3		52.34			
表採ほか				1		2.86	1		3.10
計		6	1	107	114	4260.77	1	1	3.16

4．石器計測表

番号	トレンチ・層位等		器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　考	整理番号
S1	T1	土壙墓1埋土	石鏃	サヌカイト	1.29	(1.18)	0.22	0.20		AX1-60
S2	T1	土壙墓2埋土	石鏃	サヌカイト	1.59	1.03	0.26	0.35		AY6-9
S3	T1	土壙墓2埋土	石鏃	サヌカイト	(1.92)	(0.99)	0.20	0.29		AY6-8
S4	T1	土壙墓2埋土	石鏃	サヌカイト	1.90	(1.31)	0.26	0.48		AY6-10
S5	T1	土壙墓2埋土	石鏃	サヌカイト	(1.81)	(1.54)	0.32	0.70		AY6-1
S6	T1	土壙墓2埋土	石鏃	サヌカイト	(1.12)	(0.77)	0.19	0.14		AY6-16
	T1	土壙墓2埋土	石鏃	サヌカイト	(0.84)	(0.75)	0.21	0.13	脚部	AY6-15
	T1	土壙墓2埋土	スクレイパー	サヌカイト	(1.99)	(2.24)	0.75	3.63	破片	AX1-45
	T1	土壙墓2埋土	加工痕のある剥片	サヌカイト	1.49	1.82	0.30	0.94		AY6-22
	T1	土壙墓2埋土	加工痕のある剥片	サヌカイト	1.57	1.33	0.33	0.72		AY6-21
	T1	土壙墓2埋土	楔形石器	サヌカイト	2.56	1.22	0.45	1.70		AY6-31
	T1	土壙墓2埋土	楔形石器	サヌカイト	1.89	1.74	0.42	1.53		AY6-25
	T1	土壙墓2埋土	楔形石器	サヌカイト	1.80	1.37	0.43	1.19		AY6-32
S7	T1	土壙墓2埋土	石核	流紋岩	4.58	9.09	4.99	179.50		AY6-37
	T1	土壙墓2埋土	石核	流紋岩	11.72	9.32	4.19	440.00		AY6-36
S10	T1	土壙墓2埋土	石核	流紋岩	15.80	10.55	6.02	1375.00		AY6-34
S12	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.62)	1.88	0.43	1.00		AX1-8
S13	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.35)	(1.46)	0.27	0.40	脚部	AX1-5
S14	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	1.69	1.26	0.23	0.32		AX1-9
S15	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	1.51	1.00	0.32	0.46		AX1-6
S16	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	1.43	1.09	0.34	0.52		AY6-11
S17	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	1.87	1.30	0.30	0.74		AX1-4
S18	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	2.41	(1.74)	0.50	1.97		AX1-3
S19	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.55)	(1.48)	0.29	1.08		AY6-2
S20	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	1.90	(1.30)	0.66	0.40		AY6-28
S21	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.59)	(1.89)	0.31	1.13		AX1-7
S22	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.47)	1.84	0.42	1.39		AX1-2
S23	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.48)	1.00	0.34	1.10		AX1-1
S24	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	2.67	1.01	0.43	1.27		AX1-61
	T1	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.78)	(1.20)	0.34	0.84		AX1-62
	T1	包含層	楔形石器	サヌカイト	2.39	1.13	0.69	2.91		AY6-29
	T1	包含層	楔形石器	サヌカイト	2.18	2.36	0.69	3.37		AY6-30
	T1	包含層	楔形石器	サヌカイト	1.99	2.14	0.71	2.79		AX1-63
	T1	包含層	石核	流紋岩	2.16	2.93	2.63	23.86		AX1-57
S27	T1	包含層	磨石	流紋岩	9.89	8.09	4.84	466.30		AX1-33
S28	T1	廃土中	磨石	砂岩	9.58	7.13	3.82	408.50		AX1-35
	T1	包含層	磨石	流紋岩	(6.15)	(3.00)	(5.01)	109.90	破片	AX1-59
S29	T1	廃土中	凹石	花崗岩	10.56	8.49	3.45	441.70		AX1-34
	T2	包含層	石核	流紋岩	6.36	8.19	3.58	198.00		AX1-58
S30	T4	耕作土	石鏃	サヌカイト	(2.59)	(1.41)	0.27	0.75		AX1-10
S31	T4	耕作土	石鏃	サヌカイト	3.02	2.28	0.61	3.71		AX1-11
S32	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	2.48	(1.66)	0.39	0.82		AX1-12
S33	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.35)	(1.52)	0.31	0.65		AX1-23
S34	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	1.86	(1.29)	0.32	0.51		AX1-17
S35	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.57)	1.38	0.26	0.50		AX1-16
S36	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	2.23	(1.52)	0.29	0.85		AX1-25
S37	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	1.48	1.54	0.29	0.46		AX1-18
S38	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	1.18	1.15	0.34	0.42		AX1-15
S39	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	1.29	1.03	0.27	0.37		AX1-13
S40	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	2.11	(1.35)	0.40	0.77		AX1-14
S41	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.93)	(1.37)	0.34	0.91		AX1-19
S42	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.93)	(1.10)	0.35	0.63		AX1-22
S43	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	1.93	(1.25)	0.33	0.83		AX1-24
S44	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	(3.05)	2.17	0.70	4.63		AX1-26
S45	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.12)	1.86	0.32	1.91		AX1-20
S46	T6	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.05)	(1.63)	0.32	0.73		AX1-21
	T6	包含層	石鏃未製品	サヌカイト	2.43	1.89	0.32	1.66		AX1-41
	T6	包含層	石鏃未製品	サヌカイト	2.16	(1.45)	0.35	1.28		AX1-42
	T6	包含層	石鏃未製品	サヌカイト	2.12	1.11	0.33	0.75		AX1-43
	T6	包含層	石鏃未製品	サヌカイト	1.99	1.48	0.35	1.27		AX1-44

( ) 内は残存値

番号	トレンチ・層位等		器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　考	整理番号
S47	T6	サブトレンチ	石匙	サヌカイト	3.18	(5.09)	0.67	9.42		AX1-31
S48	T6	包含層	石匙	サヌカイト	(4.04)	(2.18)	0.72	6.17		AX1-32
S49	T6	サブトレンチ	スクレイパー	サヌカイト	4.31	7.25	1.10	24.93		AX1-30
	T6	包含層	スクレイパー	サヌカイト	3.91	5.55	0.98	25.78		AX1-46
	T6	包含層	スクレイパー	サヌカイト	5.18	(6.16)	0.77	28.09		AX1-47
	T6	包含層	加工痕のある剥片	サヌカイト	3.35	1.79	0.36	2.38		AX1-48
	T6	包含層	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.07	1.79	0.28	1.07		AX1-49
	T6	包含層	加工痕のある剥片	サヌカイト	(5.31)	(6.25)	1.09	33.03		AX1-50
	T6	サブトレンチ	加工痕のある剥片	サヌカイト	3.69	2.78	0.50	4.92		AX1-51
	T6	包含層	楔形石器	サヌカイト	2.36	3.00	0.89	7.32		AX1-53
	T6	包含層	楔形石器	サヌカイト	1.89	2.49	0.49	2.85		AX1-54
	T6	包含層	楔形石器	サヌカイト	2.49	1.55	0.62	2.36		AX1-55
	T6	包含層	石核	サヌカイト	4.12	(2.56)	1.51	17.21	破片	AX1-56
S50	T6	サブトレンチ	石錘	安山岩	(3.96)	(5.28)	0.94	29.60	半欠	AX1-38
S51	T6	サブトレンチ	石錘	珪質片岩?	7.82	7.01	1.32	116.20		AX1-37
S52	T6	包含層	叩石	結晶片岩	13.15	3.35	2.66	191.20		AX1-36
	T6	廃土中	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.50	2.52	0.37	2.77		AX1-52
S53	T12	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.83)	(1.28)	0.34	0.54		AY6-3
S54	T12	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.80)	1.50	0.47	0.77		AY6-12
	T12	包含層	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.84	2.31	0.81	5.42		AY6-33
	T12	包含層	石核	流紋岩	2.68	3.36	1.12	11.55		AY6-26
S55	T13	包含層	石鏃	サヌカイト	4.10	1.01	0.39	1.59		AY6-4
S56	T13	包含層	石鏃	サヌカイト	2.44	1.46	0.38	1.26		AY6-5
	T13	包含層	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.29	2.48	0.44	3.33		AY6-20
	T13	包含層	使用痕のある剥片	サヌカイト	1.52	5.88	0.51	4.94		AY6-24
S57	T14	耕作土	石鏃	サヌカイト	1.98	(1.37)	0.35	0.80		AY6-6
S58	T15	包含層	スクレイパー	サヌカイト	(3.40)	(5.68)	0.67	14.52		AY6-17
S59	T15	包含層	スクレイパー	流紋岩	5.42	3.24	0.79	19.98		AY6-19
S60	T21	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.62)	1.31	0.28	0.45		AY6-13
S61	T21	土壙墓4埋土	石鏃	サヌカイト	2.22	(1.24)	0.32	1.16		AY6-14
	T21	土壙墓4埋土	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.13	1.68	0.41	1.86		AY6-23
S62	T21	包含層	石錘	流紋岩	(5.90)	(6.65)	4.24	151.30	欠損	AY6-27
S63	不明		石鏃	サヌカイト	1.91	(1.24)	0.28	0.43		AX1-29
S64	表採		石鏃	サヌカイト	1.93	(1.12)	0.31	0.60		AY6-7
S65	表採		石鏃	サヌカイト	(2.29)	(1.79)	0.53	1.49		AX1-27
S66	表採		石鏃	サヌカイト	(2.00)	(2.85)	0.34	2.28		AX1-28
S67	表採		スクレイパー	サヌカイト	2.89	7.08	1.04	18.38		AY6-18

( ) 内は残存値

図　版

56

１　土壙墓１・２
人骨検出状況
（南東から）

２　土壙墓１半裁状況
（南から）

３　土壙墓１人骨検出状況
（北から）

図版２　　トレンチ１ 2018年度（２）

１　土壙墓１人骨取上状況
（上から）

２　土壙墓２検出状況
（東から）

３　完掘状況（南から）

１　土壙墓２
　１層遺物出土状況
　（東から）

２　土壙墓２
　３層遺物出土状況
　（南から）

３　土壙墓２
　人骨検出状況
　（西から）

図版４　　トレンチ１ 2019年度（２）

１　土壙墓２
人骨上半身検出状況
（西から）

２　土壙墓２
人骨取上状況
（南から）

３　完掘状況（南西から）

１　トレンチ２全景
（南西から）

２　トレンチ３全景
（北西から）

３　トレンチ３
東壁深掘断面

図版６　　トレンチ６

1　東壁北半部

2　東壁南半部

3　貝層上面（東から）

１　トレンチ６全景
（南西から）

２　トレンチ７全景
（南西から）

３　トレンチ９全景
（南西から）

図版８　　トレンチ12・16・18

1　トレンチ12全景
（南東から）

2　トレンチ16全景
（南東から）

3　トレンチ18全景
（南東から）

1　トレンチ20全景
（北東から）

2　トレンチ21
土壙墓３検出状況
（東から）

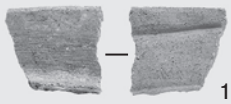
3　トレンチ21
土壙墓４検出状況
（南から）

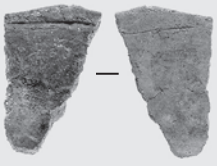
図版 10　トレンチ21・24・27

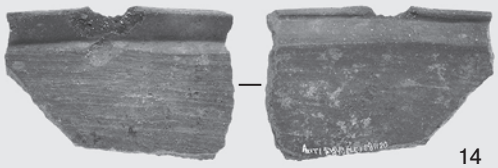
1　トレンチ21完掘状況
（北から）

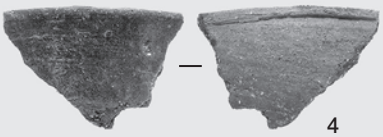
2　トレンチ24全景
（南東から）

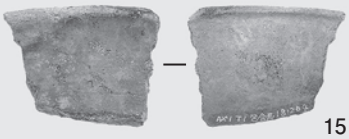
3　トレンチ27南壁

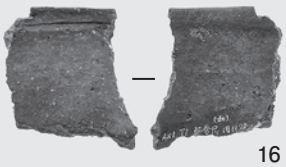

1

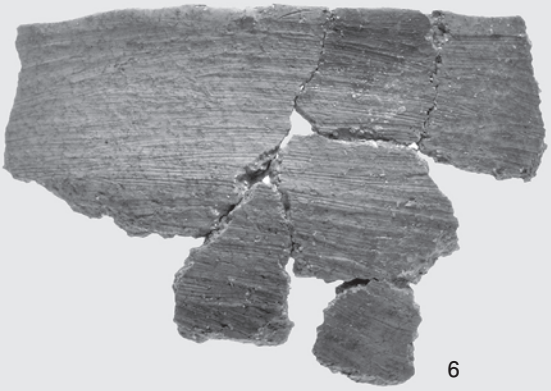

3


14


4

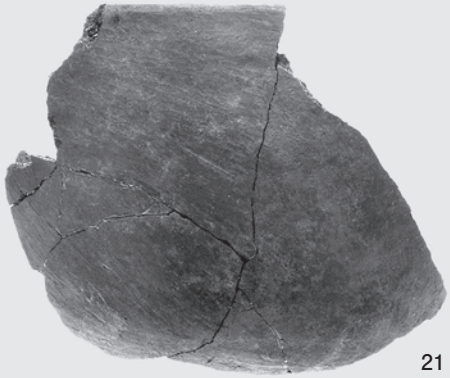

15

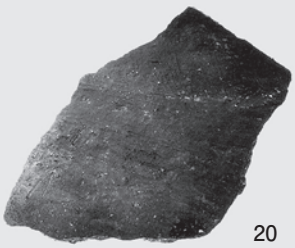

16


6

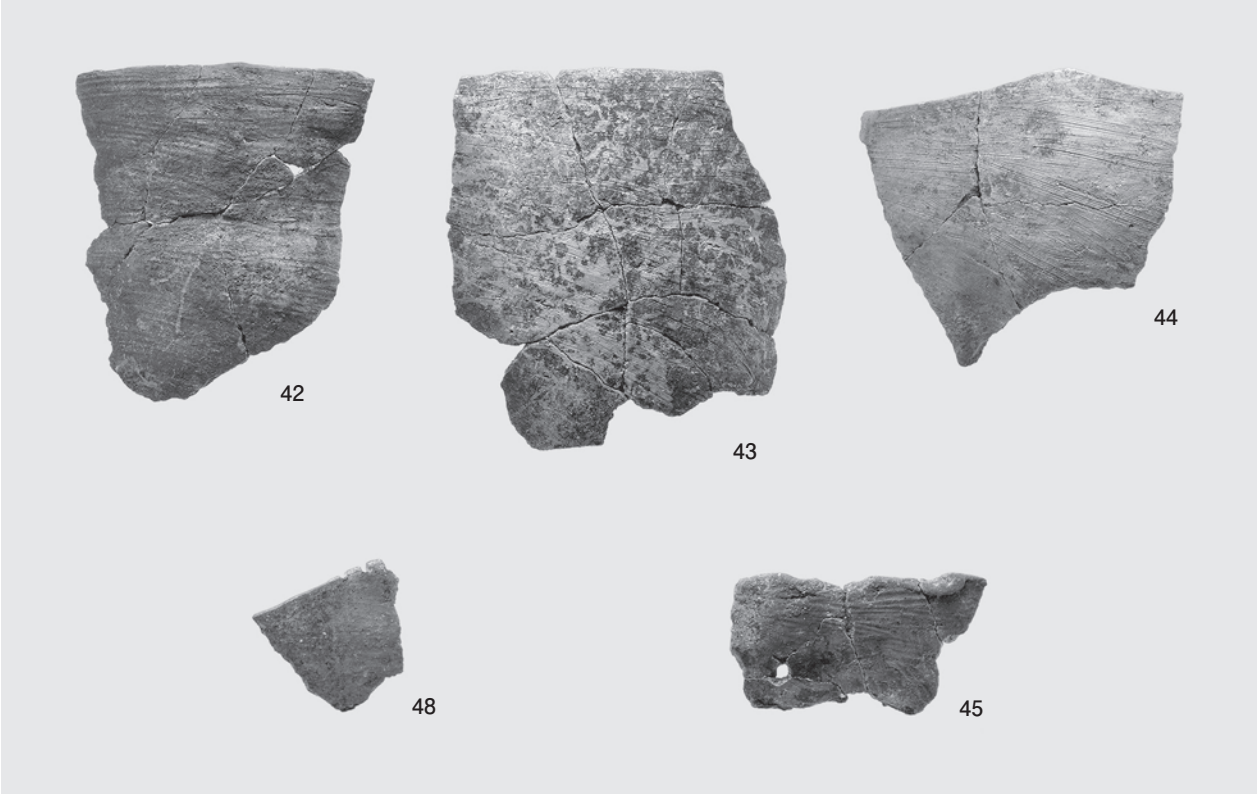
7

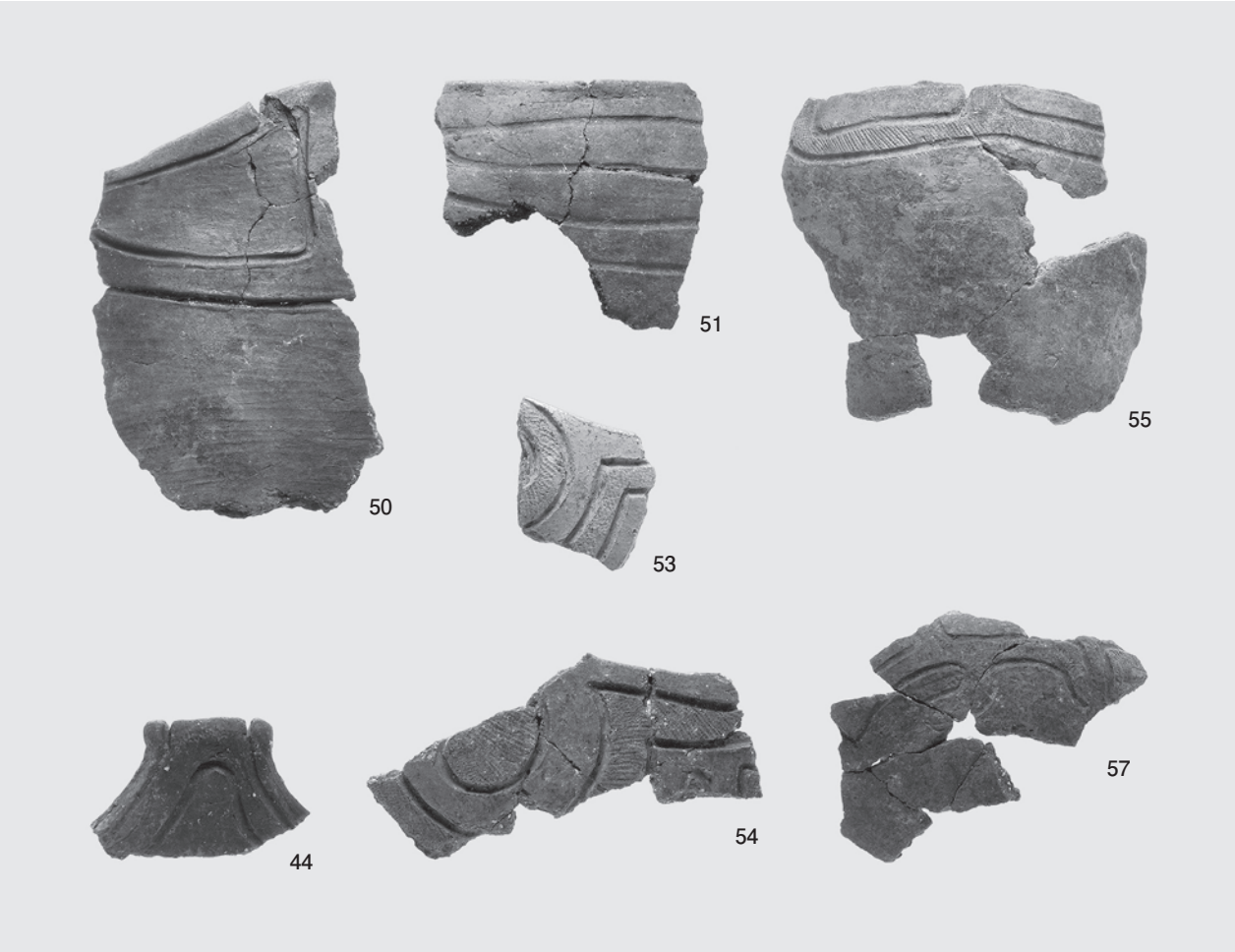
18

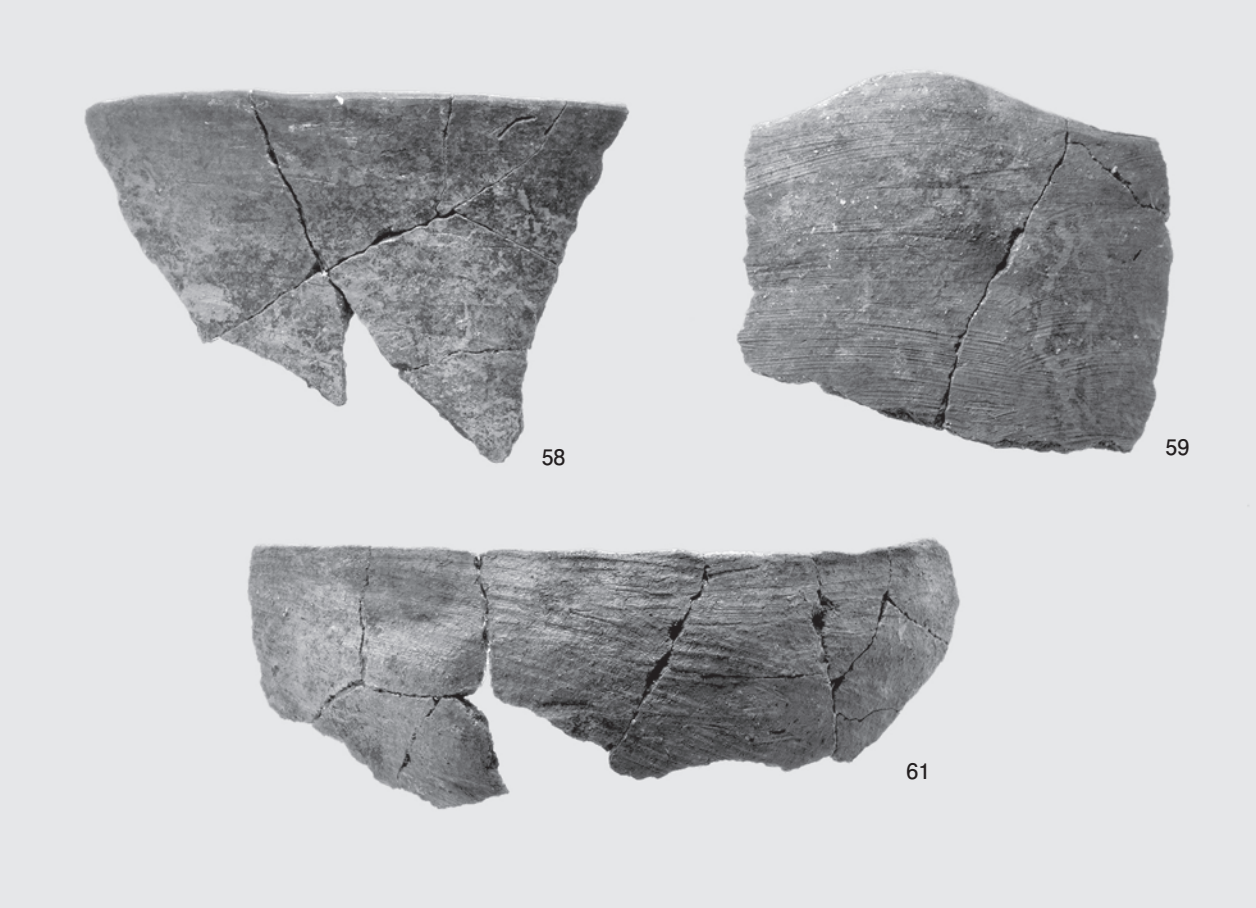

21


20

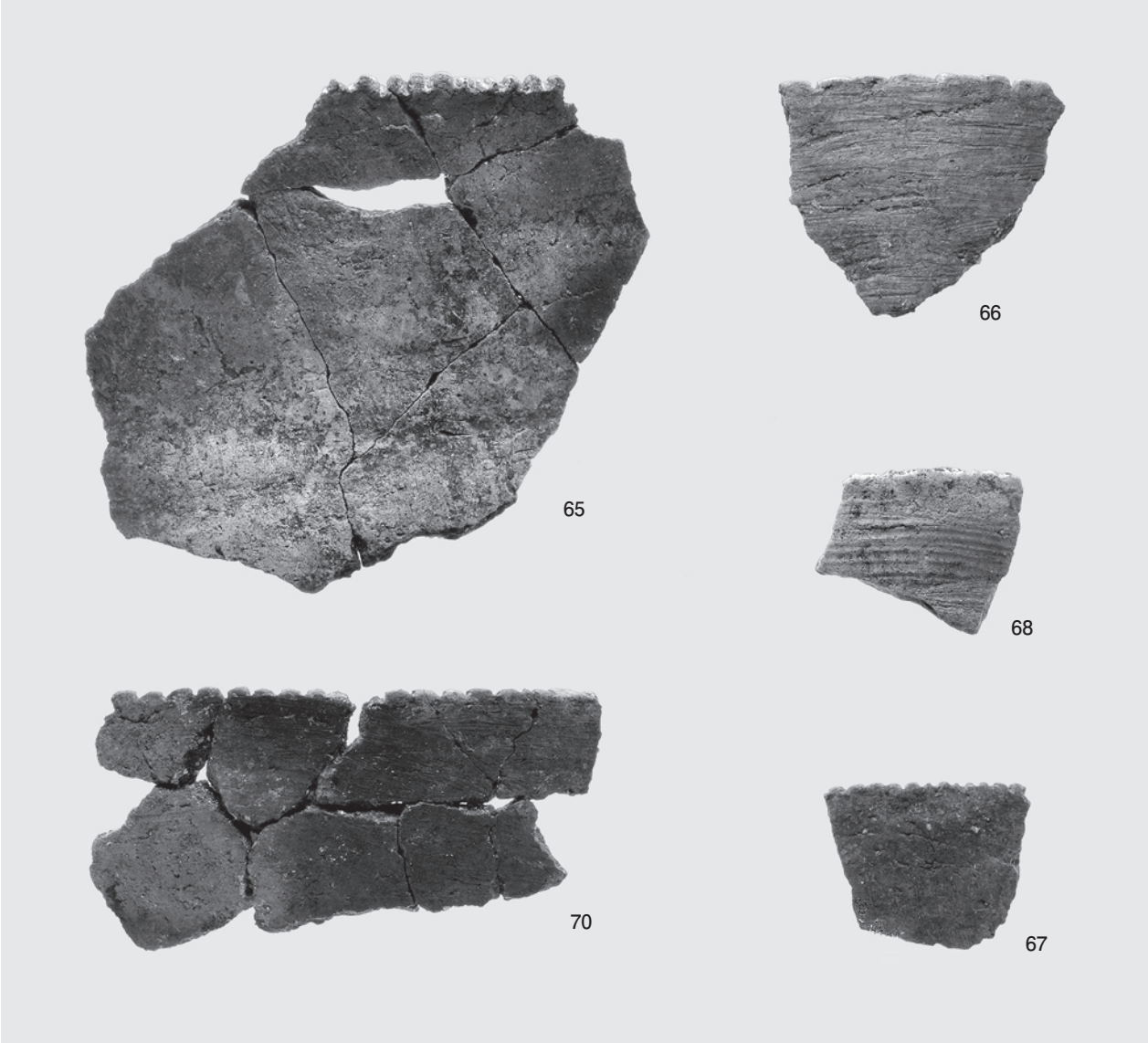
図版 12　出土土器（２）

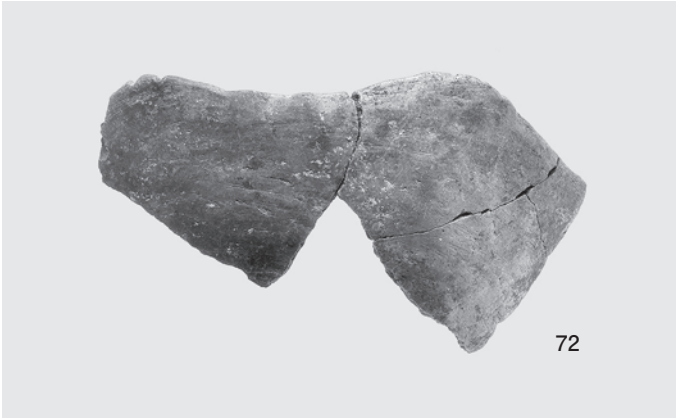



50
51
55
53
44
54
57

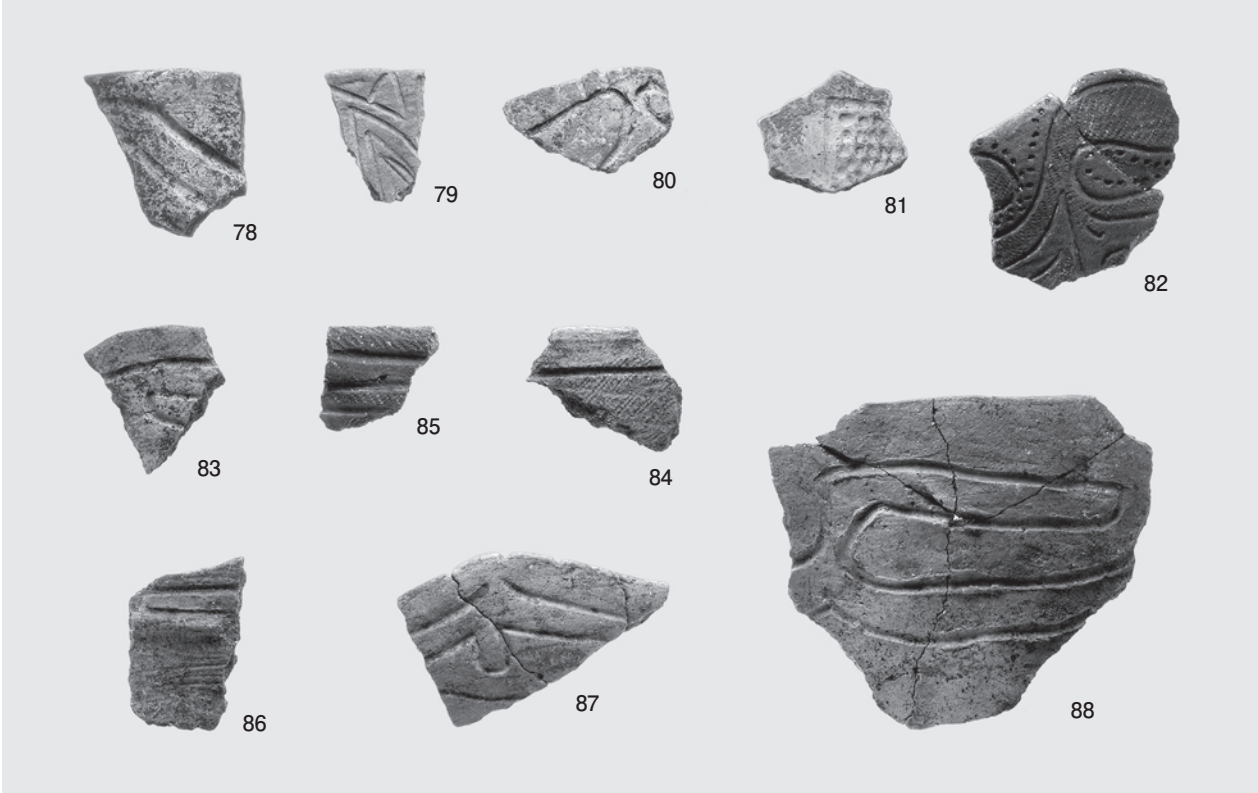

58
59
61

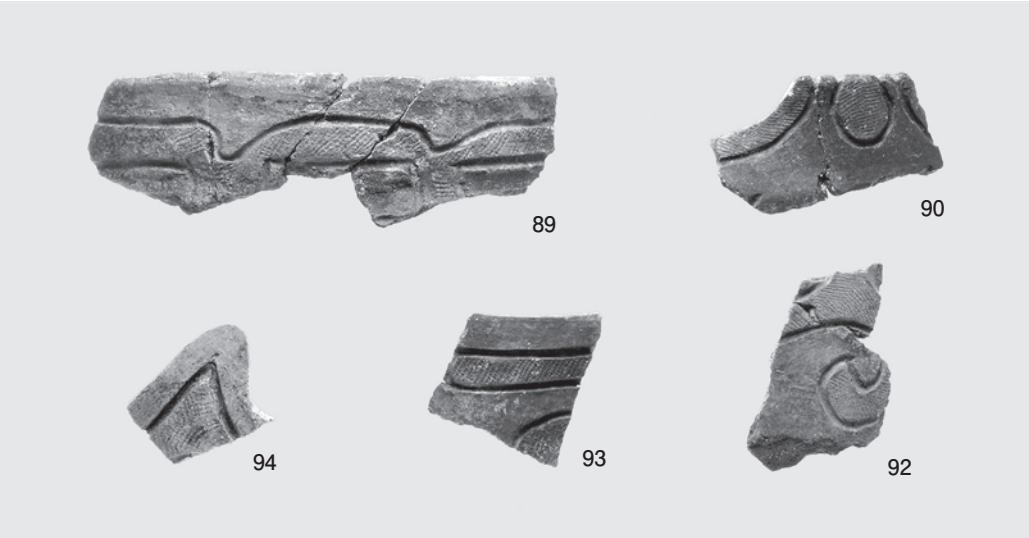
図版 14　出土土器（４）



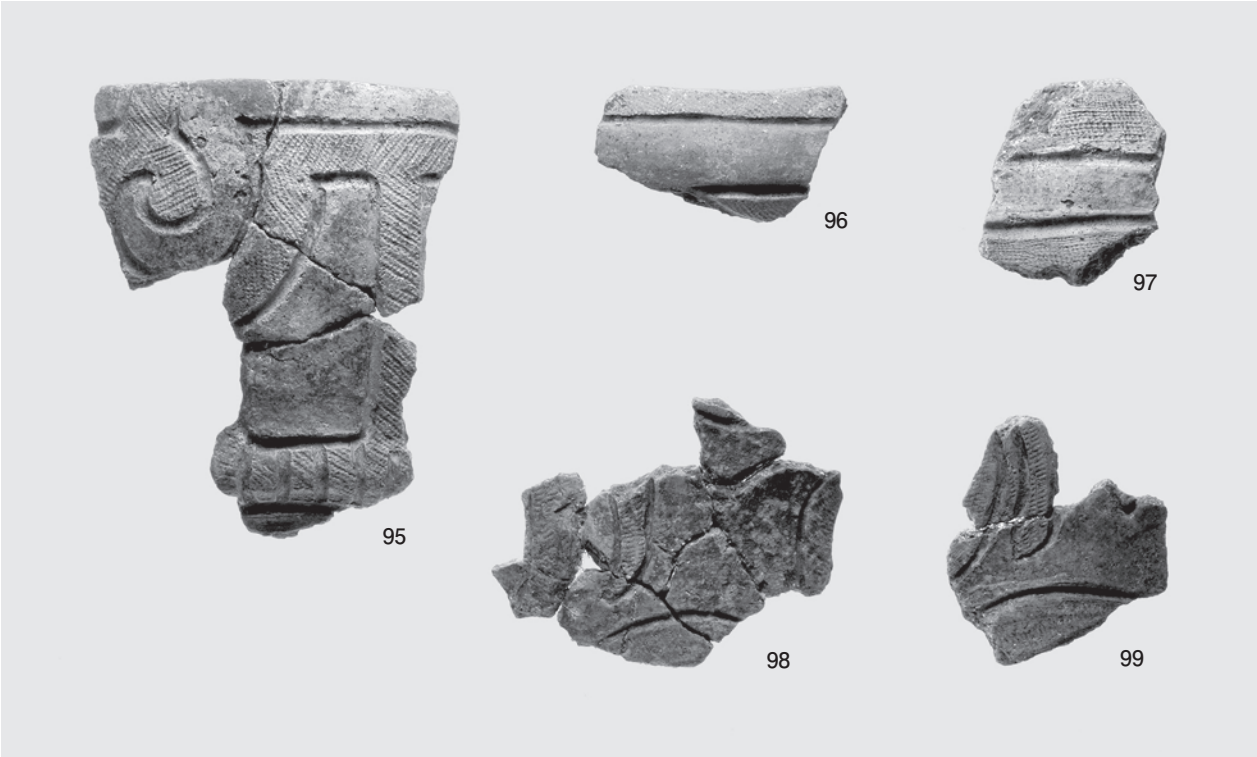

72

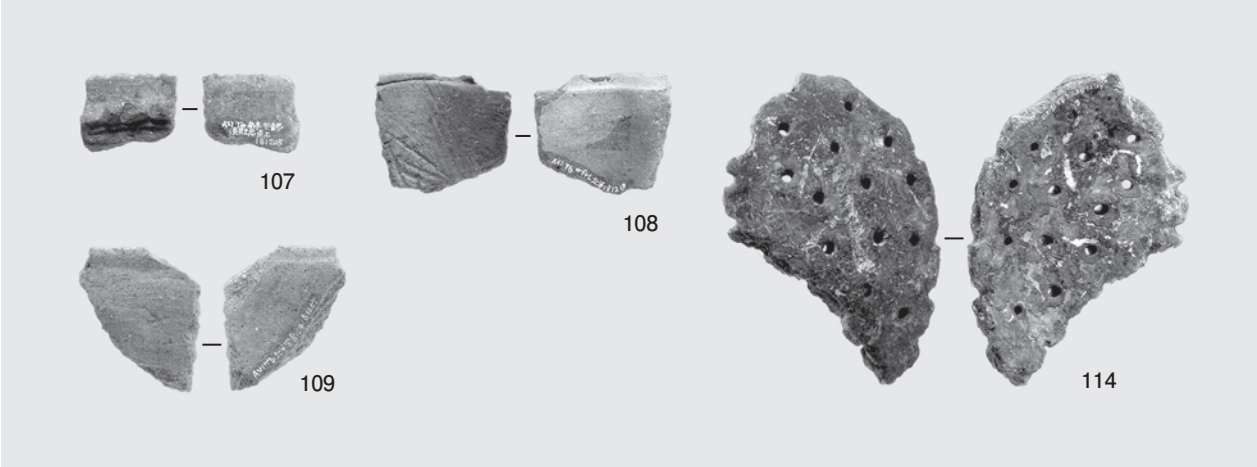
71

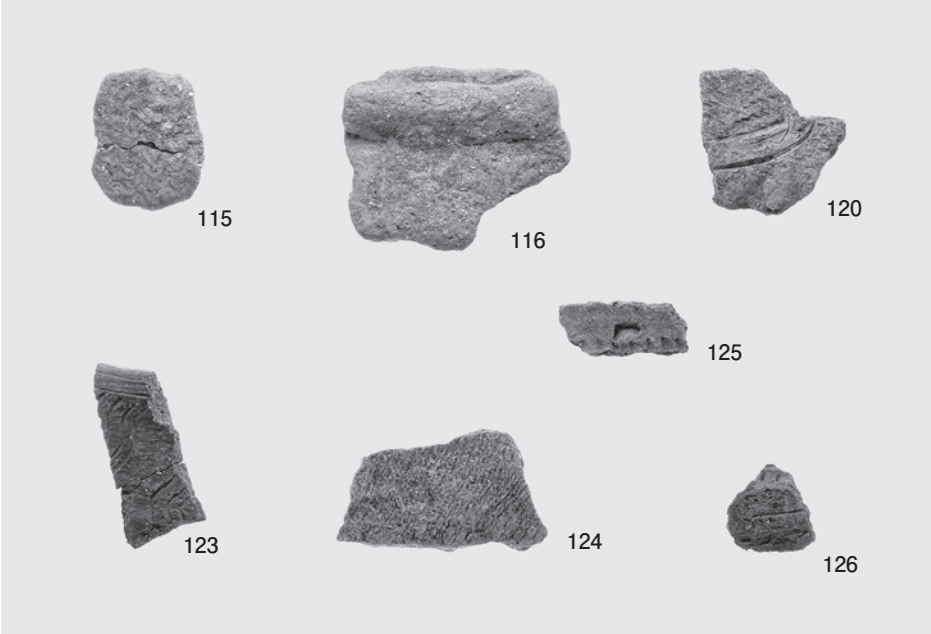

78
79
80
81
82
83
85
84
86
87
88

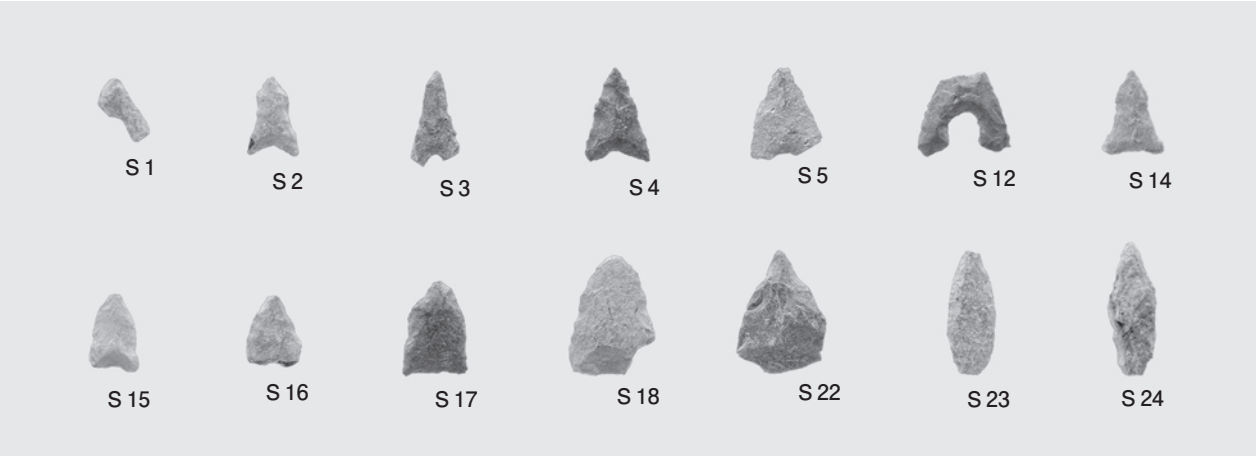

89
90
94
93
92

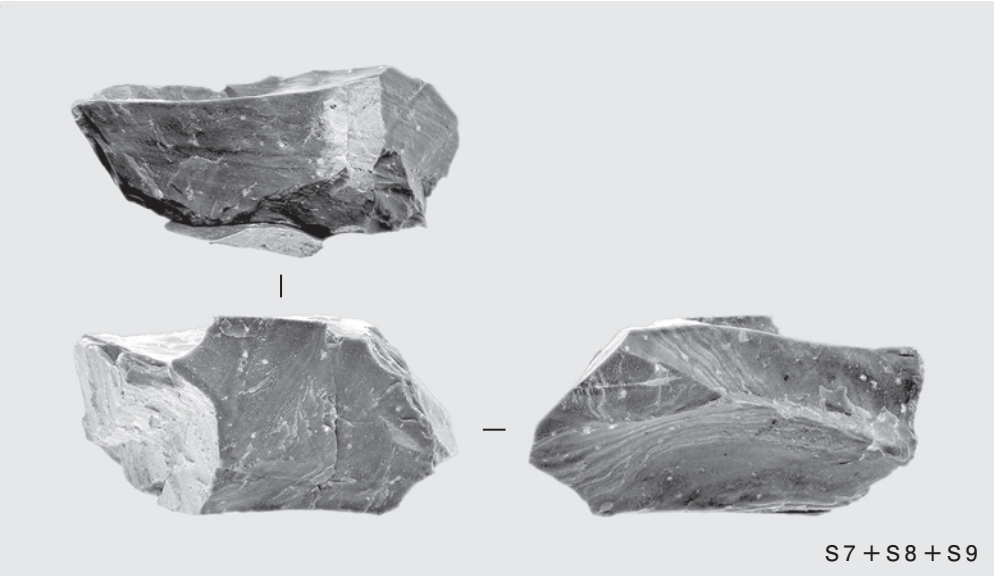
図版 16　出土土器（６）

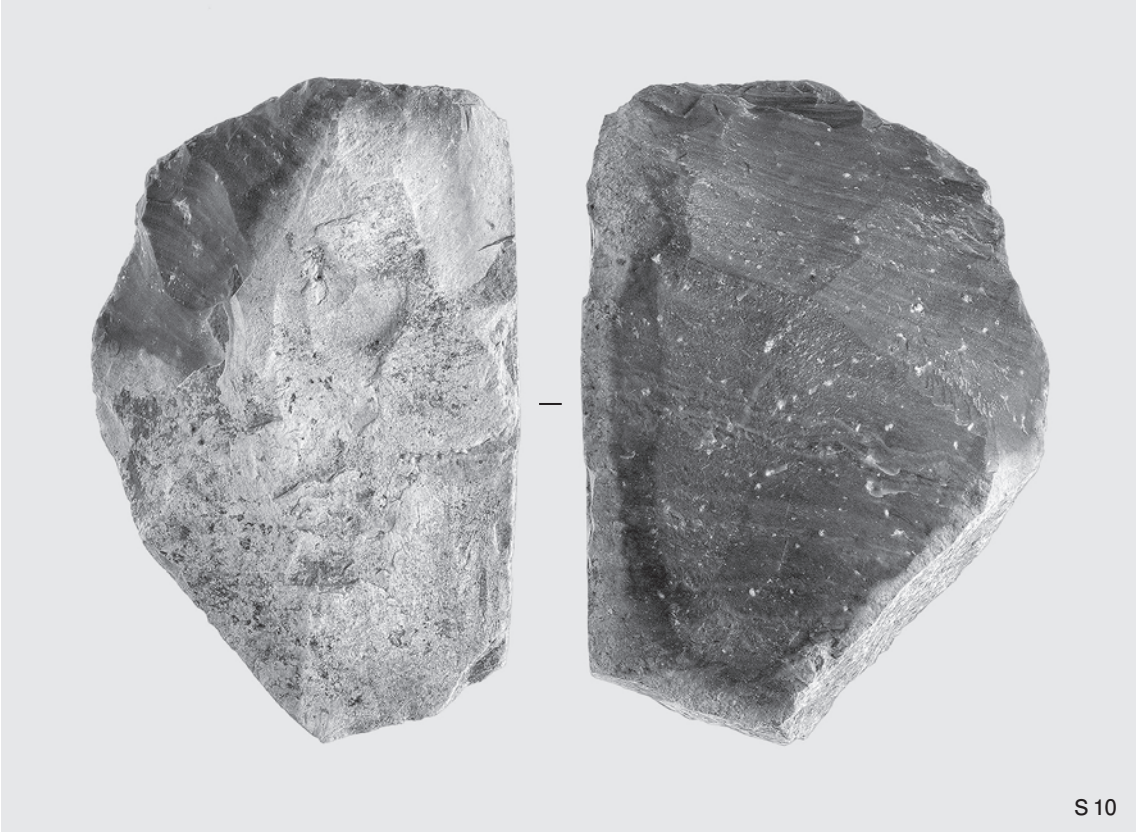




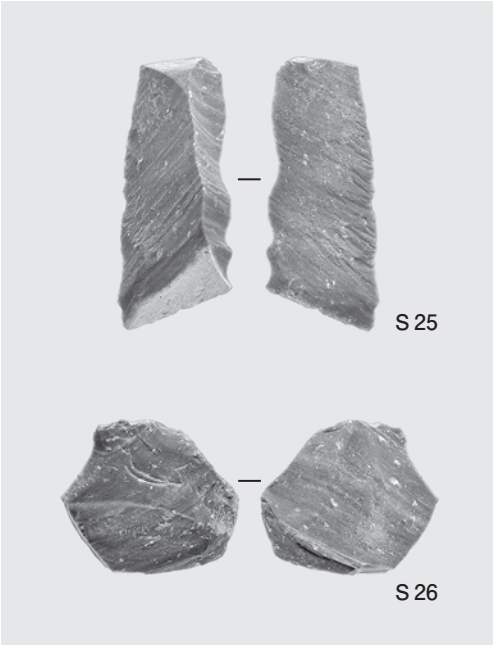


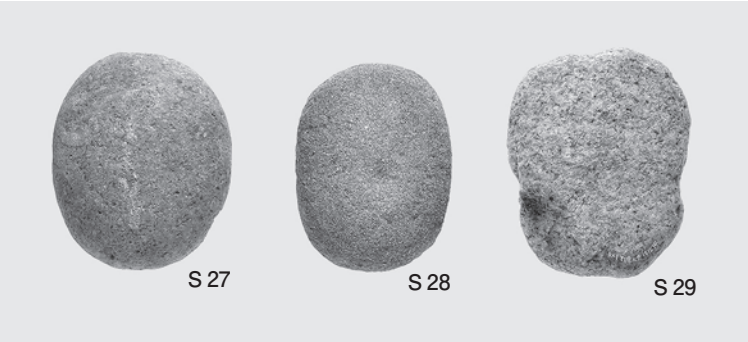

S 1
S 2
S 3
S 4
S 5
S 12
S 14
S 15
S 16
S 17
S 18
S 22
S 23
S 24

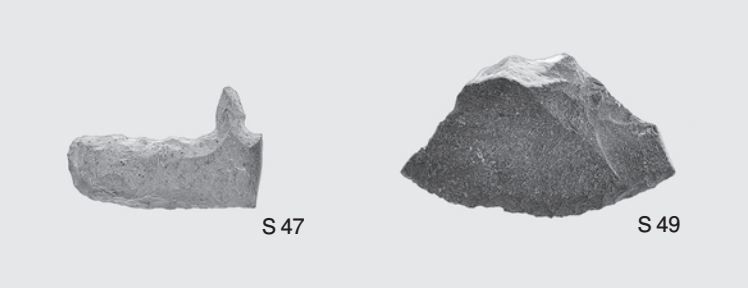

S7＋S8＋S9

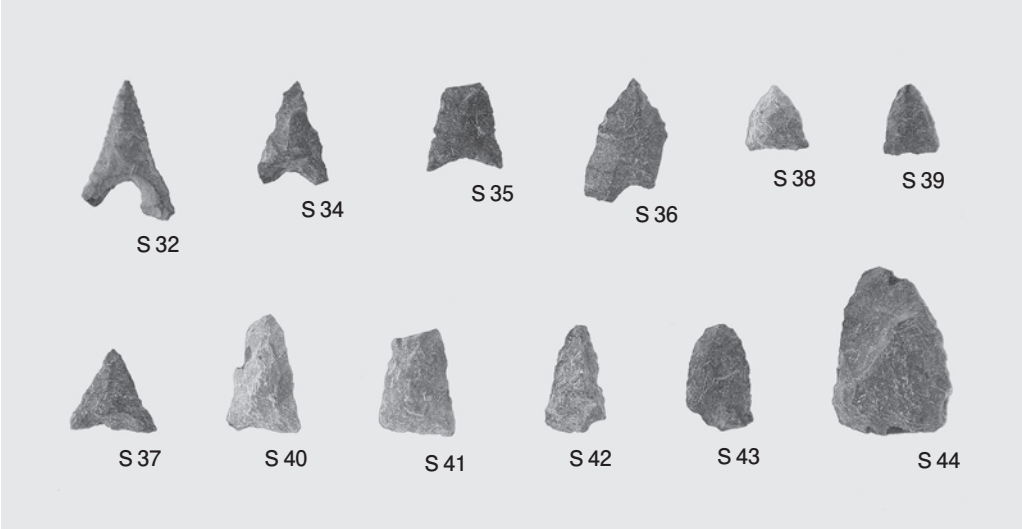

S 10

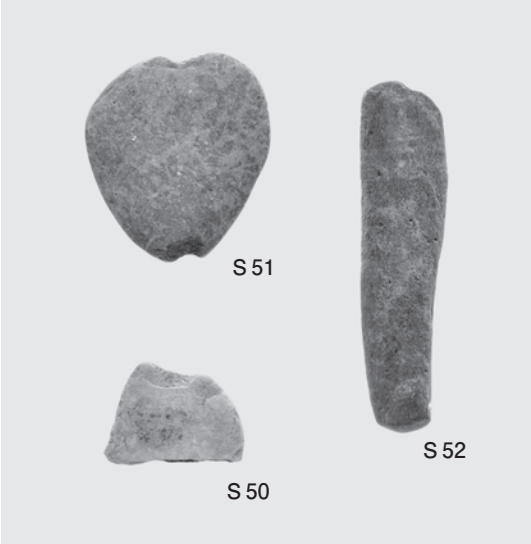
図版 18　出土石器（２）

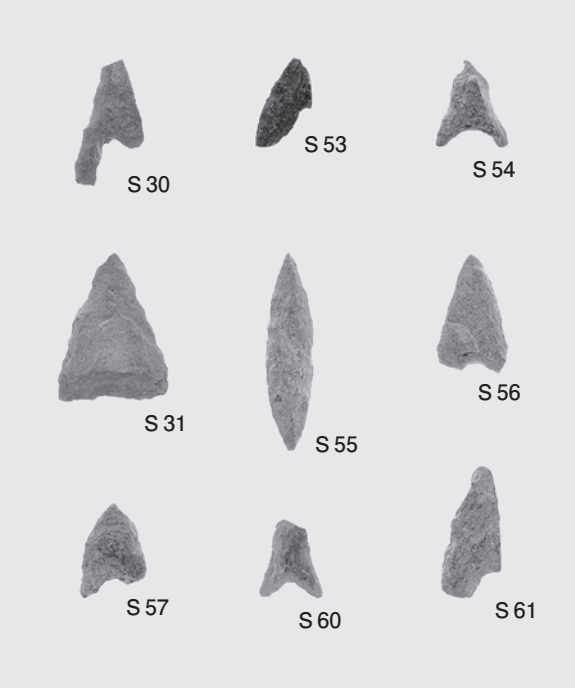

S 25
S 26


S 27
S 28
S 29


S 47
S 49


S 32
S 34
S 35
S 36
S 38
S 39
S 37
S 40
S 41
S 42
S 43
S 44


S 51
S 52
S 50


S 30
S 53
S 54
S 31
S 55
S 56
S 57
S 60
S 61

報告書抄録

ふりがな	なかつかいづか
書名	中津貝塚
副書名	
巻次	
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第18集
編著者名	小野雅明・藤原好二
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター
所在地	〒712-8046　岡山県倉敷市福田町古新田940番地　TEL086-454-0600
発行年月日	令和3年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　'　"	東経 °　'　"	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかつかいづか 中津貝塚	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 たましまくろさき 玉島黒崎	33202	15-004	34° 31' 30"	133° 38' 30"	20181120～ 20190224 20191119～ 20200219 20200929～ 20201020	253㎡	遺跡範囲詳細確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中津貝塚	貝塚	縄文	貝層・土壙墓	縄文土器 石鏃・石匙 人骨	

印刷仕様	
紙　　質	表紙：サンマット160kg（PP張り）
	本文：書籍用紙65kg
	図版：マットアート110kg
編　　集	Mac OS 10.14.6　Adobe InDesign CC 14.0.2
	Adobe Photoshop CC 20.0.4
使用フォント	モリサワ OpenType フォント
	（リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・太ゴ B101・見出ゴ MB31）
製　　本	無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第18集

中津貝塚

令和3年3月31日印刷発行

発 行　倉敷市教育委員会

編 集　倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046　倉敷市福田町古新田940番地

TEL 086-454-0600

The Excavation Report
Of
Nakatsu Shell Mound In Tamashima

Volume 18

Kurashiki
Archaeological Center

March 2021